

楠見遺跡

—都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書—

2006年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山市所在の楠見遺跡は、和歌山県北部を西流する紀ノ川と和泉山脈の間に位置しています。

過去に実施された調査では古墳時代の初期須恵器が多く出土し、すぐ北側にある大谷古墳の存在などもあわせて朝鮮半島との関係が強い地域として注目されてきました。

財団法人和歌山県文化財センターでは、都市計画道路西脇山口線改良工事に伴い平成10, 11, 13年度の3ヶ年にわたり、発掘調査を実施しました。その結果、掘立柱建物や井戸、土壇墓等、古代から中世を中心とした集落を発見し、楠見遺跡の新たな側面を明らかにすることができました。

平成16年度から平成17年度にかけて整理作業を進めて参りましたが、ようやくその成果をまとめることができましたので、このたび発掘調査報告書として刊行する次第でございます。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の方々に活用していただける歴史資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 木村 良樹

例 言

- 1 本書は和歌山市大谷に所在する楠見遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は都市計画道路西脇山口線改良工事に先立つもので、平成10・11・13年度に楠見遺跡の第1次から第3次発掘調査を行い、平成16・17年度に出土遺物整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物整理業務は和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 現地調査及び報告書作成に際し、和歌山市教育委員会をはじめ、関係機関および大谷自治会、西大谷自治会、和歌山市立楠見小学校など地元の方々から助言・協力を得た。
- 5 本書は、整理事業担当者である黒石・佐々木が、調査担当者である土井・村田との協議の元に執筆編集した。
- 6 図版編纂構写真は、各次調査担当者が撮影し、それ以外のものは佐々木が撮影した。
- 7 発掘調査及び出土遺物等の関連資料調査、報告書作成にあたっては、次の諸氏から多大な御指導・御教示を賜った。記して感謝申し上げる。
安部みき子（大阪市立大学）、北野隆亮・井場好英（財団法人和歌山市文化体育振興事業団）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、立岡和人（紀の川市教育委員会）、日置智（海南市教育委員会）、冨加見泰彦（和歌山県立紀伊風土記の丘）
- 8 航空写真撮影及び航空写真図化は和歌山航測株式会社に委託した。
- 9 土壌分析調査は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 10 調査・整理事業で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 11 発掘調査・整理事業の調査組織は次項に示すとおりである。

調 査 組 織

事 務 局

(専務理事兼務) 岩橋 駿 (平成13・16年度)

事 務 局 長 中谷博昭 (平成10～11年度)

熊崎訓自 (平成17年度)

事務局次長 菅原正明 (平成10～11年度)

吉田宣夫 (平成11年度)

畑中照雄 (平成13年度)

松田正昭 (平成13～16年度)

管 理 課 長 西本悦子 (平成13・16・17年度)

埋蔵文化財課長 松田正昭 (平成10～11年度)

松下 彰 (平成13年度)

渋谷高秀 (平成16～17年度)

調査業務担当

埋蔵文化財課主任 土井孝之 第1・2次発掘調査 (平成10～11年度)

埋蔵文化財課主任 村田 弘 第3次発掘調査 (平成13年度)

埋蔵文化財課専門調査員 立岡和人 第2次発掘調査 (平成11年度)

埋蔵文化財課専門調査員 佐伯信行 //

整理業務担当

埋蔵文化財課副主査 黒石哲夫 第1次整理業務 (平成16年度)

埋蔵文化財課副主査 佐々木宏治 第2次整理業務 (平成17年度)

凡 例

- 1 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系（日本測地系）に基づき、図示した北は座標北を示す。
- 2 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T. P. ）である。
- 3 発掘調査で使用した調査コードは、以下のとおりである。
 楠見遺跡第1次調査（1998年度）-----98-01・070
 楠見遺跡第2次調査（1999年度）-----99-01・070
 楠見遺跡第3次調査（2001年度）-----01-01・070
- 4 地区割の詳細については、第Ⅲ章第1節に記述する。
- 5 遺構番号と遺物番号は、調査区別に1番からの通し番号とした。遺構は調査区、番号の順に表し必要に応じて最後に種類を付した。
 例 C1002溝
 また、複数の遺構で構成される遺構については、調査区別に種類、調査区、アルファベットの順で表した。
 例 掘立柱建物C-a
- 6 遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。
- 7 遺物実測図の縮尺は、土器類は1/4、石製品は1/2を基本としている。
 遺物写真の縮尺は、特に統一はしていない。
- 8 土器及び調査時の土層の色調は、日本色研事業株式会社発行小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖16版』（1996年後期版）を使用した。

本文目次

ページ

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 既往の調査	4
第Ⅲ章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層序	8
第3節 調査の成果	10
1. A, B区 (1次調査)	10
(1) 調査の概要	10
(2) 遺構と遺物	17
2. C区 (2次調査)	37
(1) 調査の概要	37
(2) 遺構と遺物	37
3. D区 (2次調査)	58
(1) 調査の概要	58
(2) 遺構と遺物	59
4. F区 (3次調査)	60
(1) 調査の概要	60
(2) 遺構と遺物	60
5. G区 (2次調査)	62
(1) 調査の概要	62
(2) 遺構と遺物	62
第Ⅳ章 土壌分析の成果	65
第1節 はじめに	65
第2節 分析資料	65
第3節 花粉分析	65
第4節 珪藻分析	67
第Ⅴ章 総括	70

表目次

表 I-1	発掘調査工程表
表 IV-1	分析資料一覧表
表 IV-2	花粉化石産出一覧表
表 IV-3	橋元遺跡堆積物中の珪藻化石産出表
表 V-1	「て」の字状口縁土師器皿出土比率
付表 1	遺構検出状況一覧表
付表 2	出土遺物観察表

図版1	跡部遺跡(東から)、調査地遺迹(南から)
図版2	跡部地遺迹(西から)、跡部地遺迹(北から)
図版3	A1区南壁土層、B区東壁土層、C1区南壁土層、C2区南壁土層、C2区東壁土層、D区南壁土層、F区南壁土層、G区西壁土層
図版4	B3区2遺構面全景(西から)、B41井戸(西から)/(南から)、B34竈溝(西から)/(南から)
図版5	B19土坑(北から)、B25段土坑(北から)、B21区竈溝(南から)、B368土坑(北から)、A28竈ちみ(西から)、A66土坑(南東から)、A26竈溝、A67土坑(東から)、A1.7流路(北から)
図版6	A区第3遺構面全景(西から)、B3区第3遺構面全景(東から)
図版7	A39土壇基(南東から)、A218土壇基(南東から)
図版8	A39、A218土壇基(北西から)、A39土壇基(北東から)、A218土壇基(北東から)、B687土坑(東から)
図版9	B348土壇基(西から)/(北から)/(東から)、B201柱穴(西から)、B427柱穴(北から)
図版10	B744柱穴(西から)、B308竈ちみ遺物出土状況(北東から)、A67、68土坑(北東から)、B346、355竈溝(北から)、A195土坑(北東から)/(東から)、B346、355土層断面(北から)、B355土層断面(南から)
図版11	B346、355土壇(北から)、B751土壇(西から)、B区第6遺構面(西から)、B区第10層下礎石(東から) C1区第1遺構面全景(東から)
図版12	C1区第3遺構面全景(東から)、C2区第3遺構面全景(西から)
図版13	C134・135土壇(東から)、C136土壇(東から)、C215集石(東から)、C190土坑(北から)、C192竈(東から)、C181ピット(西から)、C182柱穴(北から) C260柱穴(北から)
図版14	C1区第3遺構面全景(東から)、C2区第3遺構面全景(西から) C220竈ちみ(東から)、C261土坑(西から)、C237ピット(北から)、C64・101柱穴(西から)、C53水溝(北から)、C1004水溝(北から)、C247井戸(西から)
図版16	C279竈(東から)、C238土坑(北から)、C1002自然流路(東から)、C1002遺構面出土状況(北から) C1002土壇サンプル採取状況 C1010土坑(西から)、C1021自然流路(西から)、C2区南半部8層面全景(西から)
図版17	D区第3・38層面全景(西から)、D区第4遺構面全景(東から)、D5土壇(西から)、F区第2遺構面全景(東から)、D区第38遺構面全景(東から)、F区第4遺構面全景(東から)、F90土壇(北から)、F99土壇・瓦出土状況(北から)
図版18	G区第10層G10層土師器類出土状況、G区西半部G2遺構面全景(東から)、G区西半部G1土層断面(東から)、G区西半部G11土層断面(北から)、G区東半部G2遺構面全景(西から)、G区東半部G3遺構面全景(西から)、G区東半部G5遺構面全景(西から)、G区南壁土層サンプル採取状況
図版19・20	各地区出土土物

第1章 調査に至る経緯と経過

和歌山市紀ノ川北岸を東西に走る県道粉河加太線の慢性的な交通渋滞緩和、岩出町方面への連携強化のため西脇地区から山口地区に至る都市計画道路西脇山口線（仮称）の建設が和歌山県によって計画された。またこの道路は、将来的に阪南市へ延びる第2阪和国道和歌山北バイパスに大谷地区でアクセスする計画となっている。

このうち、大谷地区では周知の埋蔵文化財包蔵地である楠見遺跡の範囲内に含まれていたため、県教育庁文化財課（現文化遺産課）が平成8、9年度に試掘確認調査を実施した。その結果、中世の柱穴や溝などが検出され、顕著な遺物包含層が存在することが明らかになり、協議の結果、建設工事範囲内を全面発掘調査することとなった。

発掘調査は、平成10年度から平成13年度にかけて計13ヶ月間で約2,180㎡実施した。

1次調査として楠見遺跡西部のA・B地区1,342㎡を平成10年11月～平成11年3月まで実施し、2次調査として中央部から東部のC・D・G地区にわたる3地区480㎡を平成11年11月～平成12年3月にかけて実施した。3次調査は東部F地区の358㎡を平成13年9月～平成13年11月にかけて実施した。

出土遺物等整理は、現地調査期間中に図面・現場写真の整理および遺物洗浄の一部を実施し、平成17年1月から3月に1次整理作業として残りの洗浄、注記、遺物登録台帳の作成、接合作業および遺物実測、遺物・遺構実測図のトレースの一部を実施した。平成17年9月～平成18年3月に2次整理作業として遺物復元作業、残りの遺物実測、遺物・遺構実測図トレースおよび、遺物写真撮影などの報告書作成作業を実施し、本書を刊行した。

表 I-1 発掘調査工程表

		平成10年度			平成11年度			平成12年度			平成13年度			平成14年度			平成15年度			平成16年度			平成17年度		
		4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1
1次調査	A地区																								
	B地区																								
2次調査	C地区																								
	D地区																								
	G地区																								
3次調査	F地区																								
1次出土遺物等整理																									
2次出土遺物等整理																									

※試掘確認調査は平成8、9年度に実施

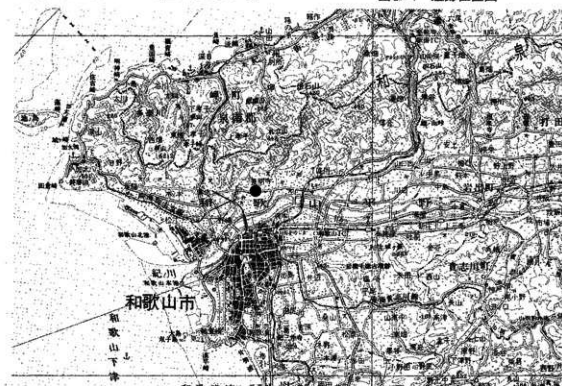
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

楠見遺跡は、紀ノ川の河口から5kmほど遡った右岸に位置する。地形的には、和泉山脈から張り出した背見山山塊の谷筋から小河川により押し流されてきた土砂により形成された狭い扇状地にあたっている。このため全般的に南側に向かって緩やかに傾斜する。紀ノ川の流路が現在の位置に移った時代は江戸時代前半頃で、それまでは大きく流路を変えながら網目状に流れており、楠見遺跡のすぐ南には本流または明瞭な支流があったと推定されている。楠見遺跡より南は紀ノ川の河川堆積により陸地化した地域で、たびたび河川の氾濫に遭う不安定な土地であったものと思われる。この南側の沖積地と北側の扇状地の境界付近は旧紀ノ川の流れによって削り取られた現状地形で約1.5mの段差が認められる。



図Ⅱ-1 遺跡位置図



図Ⅱ-2 遺跡周辺地形図(S=1/200,000)

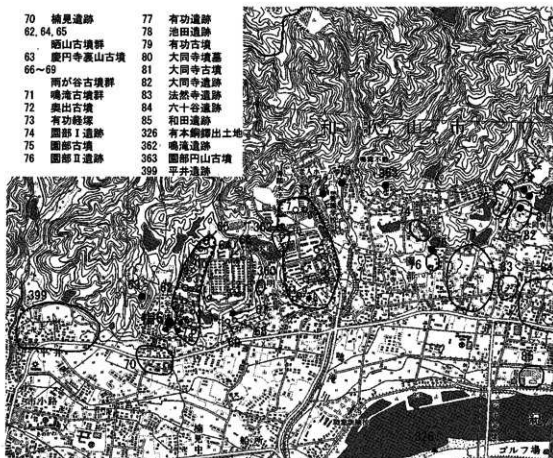
第2節 歴史的環境

地理的環境で述べたように、楠見遺跡周辺は和泉山脈から延びる丘陵、この間を南流する小河川によって形成された狭い扇状地、それ以南の旧紀ノ川による沖積地に分けて考えることができる。遺跡は和泉山脈から延びる丘陵部に古墳群や経塚が、扇状地上に集落が分布し、沖積地ではほとんど遺跡は見つかっていない。

旧石器時代の遺跡は、鳴滝遺跡からナイフ形石器と多数の剥片が出土しているほかには楠見遺跡の東約2kmの位置にある園部からナイフ形石器が出土したとの記録があるのみである。

縄文時代の遺跡は、東約4kmにある直川の明光寺付近で中期前半と後期前半の土器が採集されている。また、今回の調査で縄文後晩期の土器や土坑、スクレイパー等が出土した他、東約3kmにある六十谷遺跡でも晩期の土器片が出土している。旧石器時代、縄文時代とも採集された遺物は少量のため、遺跡の全体像は明らかでない。

弥生時代に入ると扇状地上で生活が営まれるようになる。西方約1kmに位置する平井遺跡や六十谷遺跡でも多くの弥生土器が採集されている。特に六十谷遺跡は遺物から見て弥生時代の前期末に成立し弥生時代の全期間を通して集落が営まれたと考えられる。今回の調査で、楠見遺跡でも前期末頃の土坑や縄文時代晩期～弥生時代前期の可能性のある溝を検出したが、以前



図Ⅱ-3 周辺遺跡図 (S=1/25,000)

にも前期の壺が出土している。この他沖積地でも南約1kmの国有本遺跡で紀ノ川河床から弥生時代～古墳時代の遺物が、この東方では有本銅鐸が出土している。現在のところ沖積地ではこれ以外遺跡は発見されていないが、近世までこの付近は紀ノ川による堆積作用が大きかったためかなり低いレベルに遺跡が存在する可能性はある。

古墳時代前期の遺跡は周辺に見られないが、5世紀前半になると和泉山脈の南へ延びた尾根上に晒山古墳群と六十谷古墳群が造られる。晒山古墳群ではこのあと6世紀前半まで造り続けられる。5世紀後半には大谷古墳が晒山古墳群の丘陵先端（楠見遺跡の北300m）に造営される。大谷古墳は和歌山市木ノ本にある車駕之古址古墳に続く首長墓と考えられ、朝鮮半島との関わりを示す馬甲、馬青や九州産の石材を用いた組み合わせ式石棺が出土したことで有名な古墳である。この他5世紀後半には引き続き晒山古墳群が造られる一方、この東側の尾根では雨が谷古墳群、北東約800mの鳴滝丘陵上では鳴滝古墳群の造営が始まる。6世紀中葉以降になると晒山、雨が谷古墳群ではほとんど見られず、鳴滝古墳群での造営が活発になるが、7世紀代の鳴滝10号墳を最後にこの周辺での古墳の造営は終焉する。

この他古墳時代では鳴滝遺跡、楠見遺跡があるが、後者については既往の調査の項で述べる。鳴滝遺跡は、鳴滝古墳群の範囲内にある丘陵上平坦面に造られた掘立柱建物群である。西側に5棟、東側に2棟が方向を揃えて並び、すべての建物に棟持ち柱がある。梁間4間、桁行4間で最大の建物は10.1×8mを測る。西北端の建物の柱抜き取り穴からは、大量の初期須恵器^Ⅲが打ち砕かれ投げ込まれたような状態で出土している。これらの土器は楠見遺跡出土品と類似する特異な須恵器であった。

古代以降は平井遺跡で奈良時代の遺物が採集されている以外は中世の経塚が雨が谷遺跡、有功経塚で見つかっているのみであり、今回の楠見遺跡での古代～中世にかけての集落の発見は重要な資料となった。

第3節 既往の調査

これまでに関西大学考古学研究室、(財)和歌山市文化体育振興事業団によってそれぞれ調査が行われている(図Ⅲ-1参照)。

関西大学考古学研究室による調査は、1969(昭和44)年に和歌山市立楠見小学校中庭を対象に行われており、今回の調査区の南隣にあたる。調査のきっかけとなったのは鉄筋校舎増築の際で2箇所の異なる地点(東側が落ち込み状、西側が円形ピット)から初期須恵器が出土したためである。調査は、土器が出土した鉄筋校舎の東隣に南北16m、東西6mの調査区を設定(A～Hトレンチ 2m四方を1つのトレンチとする)、遺跡範囲確認のため調査区北方に2×2mの方形調査区(N1,N2)を設定して進められた。

調査の結果、N1,N2では少量の瓦器、土師器、須恵器片が出土したのみで、遺構は検出されていない。A～Hトレンチの土層は、表土、床土の下は瓦器、須恵器、土師器を含む層が3層

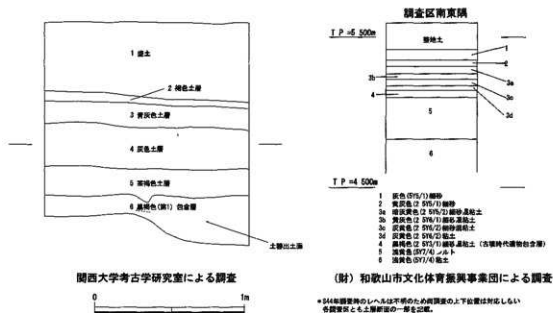
堆積しており、その下に初期須恵器、土師器を含む厚さ15cm～30cmの黒色土層がある。この下がベースの黄色粘土層となる。遺物はこの黒色土層中でも特定のレベルに集中して検出されている。この遺物が出土した浅い落ち込み状の部分は、工事中に見えられた東側の落ち込みにつながるものと考えられており、平面的には東西南北10mの範囲に限られるようである。また、この黒色土層の下に東西に走る溝2条が検出されている。溝の埋土である4層の黒色土からは遺物の出土がなく時期ははっきりしないが、初期須恵器は明らかにこの溝が埋没してからのものと述べられている。

出土した初期須恵器は甕41点、器台8点、高杯9点、杯8点、ハソウ10点、台付異形鉢1点で、所屬不明品を含めると破片数は2960点に及ぶ。この他土師器壺21点、高杯11点、椀2点、瓶1点、把手3点や、須恵器模倣土師器9点、土錘等も出土している。

(財)和歌山市文化体育振興事業団の調査は今回の調査区から北100mほどに位置し、個人住宅建設に伴い35㎡が調査された。江戸時代の耕作土層下が、古墳時代の遺物包含層となり、古代～中世の遺物包含層は存在しない。遺構は古墳時代の溝1条、ピット3基で、初期須恵器が溝、遺物包含層から出土している。

今回の調査区を含めた3地点の調査結果は地形的にそれほどの差があるとは思えないにもかかわらず、大きく異なる様相を示している。特に昭和44年の調査地点は特異な性格を有する可能性があり、今後の調査や地形、土層の対応関係等の検討により総合的な評価が必要である。

注1. 横見遺跡出土須恵器については、これまで初期須恵器と陶質土器両方の名称が使われてきているが、出土量や嘴滝遺跡出土の類似品に焼け歪みおよび腐蝕の融着が見られることを重要視して本書では初期須恵器と呼ぶこととする。



図II-4 既往の調査土層図

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

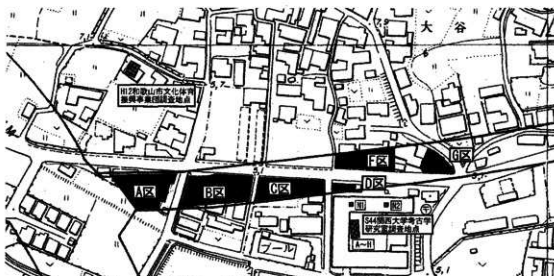
調査区の設定 西から順にA区、B区（以上1次調査）、C1、C2区、D区、G2区（以上2次調査）、D区北をF区（3次調査）と設定し調査を実施した。本書ではC1、C2区をまとめてC区、G2区をG区として報告する。なお、E、G1区は欠番である。

調査地の地区割 調査地の地区割り、調査区北東に位置する直角平面座標第VI系のX=-193 000km、Y=-75 500kmを基点とし、4m毎に割り付けた。地区名は、東西方向については東から西方向に向かってアラビア数字（1, 2, 3, …）を、南北方向については北から南方向に向かってローマ字（A, B, …Y, 2A, 2B…2Y, 3A, 3B…）を使用し、これを組み合わせて呼称した。遺物の取り上げは特別な場合を除き、この区画単位で行った。なお、座標系は日本測地系を採用している。

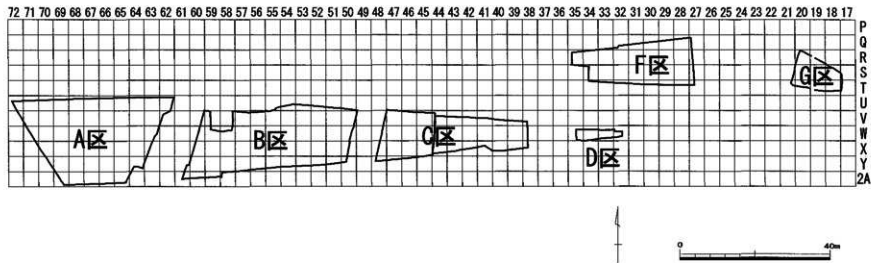
調査方法 A、B区は第5層上面（第1遺構面）直上まで機械で、これ以下を人力により掘削した。C区は東側から掘削を開始し、近世の第1遺構面を調査対象外として第6層上面（第2遺構面）直上まで機械で掘削したが、遺物の出土量が多かったため西半は第5層上面までにとどめ、以下を人力により掘削した。D区、G区はそれぞれ第6層上面、第7層上面までを機械、それ以下を人力掘削した。F区については、近世の第F1遺構面を調査対象外とし、第F2遺構面直上まで機械、それ以下を人力掘削とした。

発掘調査によって出土した遺物は、土器を中心に遺物収装箱（コンテナ）約106箱に及ぶ。調査と並行して応急整理を行っていたがこのたび本格的な整理作業を実施した。出土遺物は本書作成後和歌山県教育委員会に移管した。

なお、調査件名は、1次調査が「98-01-070」、2次調査が「99-01-070」、3次調査が「01-01-070」であり、これを用いて記録類および出土遺物を管理している。



図III-1 調査区位置図 (S=1/2,500)



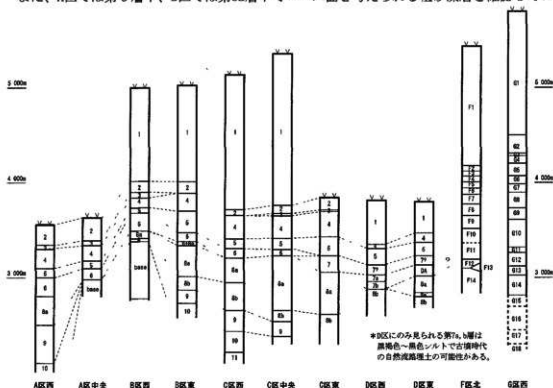
图III-2 調査地区割図 (S=1/1,000)

第2節 基本層序

調査区は東西約230m、南北約40mに広がっており、C区付近から東に向かい徐々に旧地形（平安時代まで）は落ち込み始め、東端のG区では谷状地形となる。このためA～D区とFおよびG区の堆積土層を共通の層序で認識することはできなかった。よって以下ではA～D区とF、G区を分けて記述する。

A～D区では、第1層が盛土、第2層がa, bあるいは2, 2'に細分される耕作土、第3層が床土で、いずれも現代の人為的土層である。第4層は灰色系のシルトで近世の耕作土である。多いところでa, b, cの3面確認できる。第5層は黄灰色系のシルトで室町時代の耕作土だが、平安時代後半～鎌倉時代の瓦器等の細片も多く含む。地区により最大4面確認できる。第6層は黒褐色粘質シルトで鎌倉時代後半～室町時代前半を下限とする遺物包含層であるが、平安時代後期～鎌倉時代前期の遺物も多く含む。C区中央以東では第6層の堆積は見られない。第7層は褐灰色～黒褐色シルトで古墳時代～平安時代の遺物包含層である。基本的にはC区中央以東の第6層が見られない地点に堆積している。第8a層～第12層は縄文時代の遺物を微量含む。第8a層は黄褐色粒を含む灰白色粘質シルトで縄文時代後期～晩期の堆積と思われる、G区（谷状地形のため平安時代の層まで確認）を除くほぼ全地区に見られる。第8b層は黄褐色粒を含む灰色系粘質土、第9層は灰色系粘質シルト、第10層は青灰色系シルト、第11層は黒色シルト、第12層はオリーブ褐色粗砂礫で、第11層までは縄文時代後期の遺物を少量含む。

また、A区では第6層下、B区では第8a層下でベース面と考えられる粗砂礫層を確認してい



図Ⅲ-3 土層柱状図

F区は第F1層～第F4層が近現代の盛土・耕作土で、第F5層～第F11層までが中世の遺物を含む包含層である。第F12層は土色、検出遺構の時期から判断してA～D区の第8a層に対応する可能性が高い。

なお、各地区における土層の詳細については、第3節で述べることとする。

A～D区の遺構面については下に概念図を示す。第1遺構面は第5層上面であり、全地区に存在する。遺構の時期は近世に属する。第2遺構面は第6層上面でありA,B区で検出した。C区にも第6層は存在するが明確な遺構は検出できなかった。遺構の時期は室町時代である。第3遺構面は基本的には第6層除去面であるが、各地区によって様相が異なる。A,B地区では、第6層除去面である第8a層上面の他、一部露出しているベース面で弥生～鎌倉時代の遺構が検出される。C区では第8a層が露出する部分では弥生～鎌倉時代の遺構が、第7層の上面では平安～鎌倉時代の遺構が検出される。また落ち込み部では堆積したA層、B,C層上面でそれぞれ鎌倉時代と平安時代の遺構が、第8a層上面では弥生～平安時代の遺構が検出される。C区の一部とD区で第6層が存在せず第7層が露出する部位では平安～室町時代の遺構が同一面で検出される。第4遺構面は第8b層上面で縄文時代後晩期の遺構が検出される。第5,6,7遺構面はそれぞれ第9層上面、第10層上面、第12層上面に対応するが、自然流路や落ち込み等を検出しているのみで明確な遺構は確認できていない。

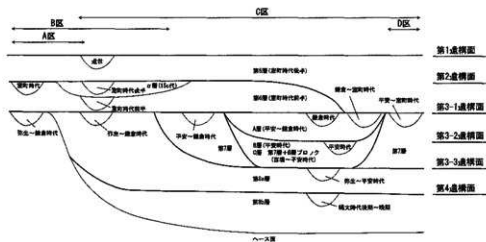


图 III-4 遺構面概念図

第3節 調査の成果

縄文時代から江戸時代までの幅広い時期の遺構・遺物を検出した。近世以降は耕作地となっていたため素掘り溝以外に目立った遺構は存在しない。中世では室町時代の区画溝、井戸、溜橋、焼土坑、掘立柱建物、ビット群や鎌倉時代の溝、土坑墓、掘立柱建物、土釜埋納？遺構、ビット群等多数検出した。古代では平安時代の井戸、水溜、土坑、溝を検出した。その他少数ではあるが古墳時代の土坑、自然流路、弥生時代の土坑、溝、縄文時代の土坑を検出した。以下では土層堆積状況、遺構検出面が異なるため、各地区ごとに記載していく。

各遺構の帰属面については、各遺物包含層が薄く部分的に存在しないところもあることから単純に検出時の面に帰属させることはできない。このため遺構全体図は遺構検出面の他、遺構埋土、出土遺物から判断して帰属する遺構面を推定し作成している。なお、これらの資料で判断できない遺構については可能性のあるすべての面に重複して記載している。主要遺構についての検出面、埋土、出土遺物などを付表1に示す。

1 A区（1次調査）

(1) 調査の概要

第1次調査は、全調査区の西端に位置する。A、B調査区の中央を南北に市道が横切っており、西側の地区をA区、東側の地区をB区とした。実質調査面積はA区669㎡、B区673㎡である。

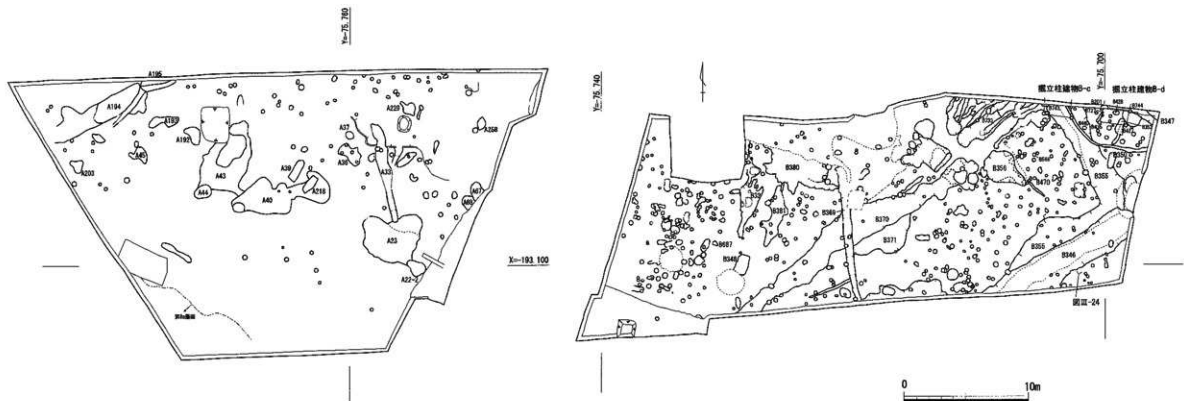
旧地形（弥生時代～室町時代の面）で見ると、B区西半が全調査区中最もレベルが高く、これより東方に向かい徐々に落ち込んでいく。西方へは市道を挟んで40cm程の高低差で落ちた後、緩い傾斜で下がっていく。南北方向にはわずかに南へ傾斜するが距離が短いこともありほとんど高低差はない。

土層は基本層序で示したとおりA区では第2～6、8a、9、10層、B区では第1～6、8a、8b、9、10層が堆積するが、A区の大部分では第6層下で、B区西では第8a層下でベース面を確認することができる。また、A区北東隅とB区中央北では第6層上面からの落ち込みにα層と呼ぶ室町時代の遺物包含層が堆積している。

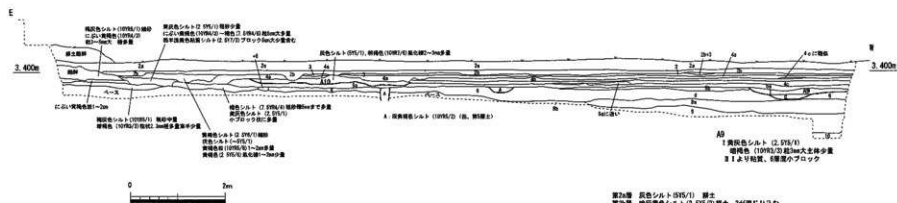
遺構面は、A区では3面（第1～第3遺構面）、B区では7面（第1遺構面～第7遺構面）確認した。第4～第7遺構面についてはB区東1/4程度について面的に掘り下げ遺構検出をおこなった。ただし、第7遺構面を形成する第11層まで遺物の出土はあるものの、第5～第7遺構面は自然流路、落ち込みなどを検出したのみで明確な遺構は確認できていない。

主な遺構は、室町時代の区画溝1条、井戸1基、溜橋1基、焼土坑1基、掘立柱建物1棟、ビット多数、鎌倉時代の土坑墓3基（うち1基は木棺墓の可能性あり）、掘立柱建物2棟、土釜埋納？遺構1基、縄文時代晩期～弥生時代前期の溝1条以上、土坑1基、縄文時代後期～晩期の土坑1基などである。

出土遺物の総数はコンテナに収納してA区18箱、B区62箱で縄文から近世までの遺物を含む



图Ⅲ-7 A、B区第3遗構面 平面图 (S=1/300)



图III-9 A区南壁 土层断面图 (S=1/80)

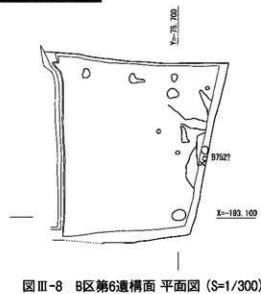


圖 III-8 B區第6遺構面 平面圖 (S=1/300)

[illegible]

が、平安時代末から室町時代の遺物が大部分を占める。

(2) 遺構と遺物

遺物包含層出土の遺物

第5層 (図Ⅲ-27, 図版19, 25) 弥生土器、古墳時代の須恵器など平安時代以前の遺物も少量含むが平安時代末から室町時代の遺物が主体である。平安時代末～鎌倉時代では、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、土師器釜、常滑焼甕、東播系須恵器片口鉢(15)、山茶碗片のほか、白磁(5, 6, 7, 8)や青磁片が出土している。14世紀代の遺物は希薄である。室町時代では、土師器皿、土師器鍋(1)、備前焼播鉢(2, 14)、瓦質土器羽釜・播鉢(4)・甕、播磨系土師器釜(3)、丸瓦、平瓦、中国製染付片、青磁(11, 12, 13)、瀬戸美濃の皿等が出土している。

丸瓦は外面を丁寧に磨き、内側に棒状のタタキ痕が残る。4は瓦質播鉢で口縁が丸みを帯び外面は板状工具によるナデ仕上げである。器壁は厚く、胎土、焼成は瓦と区別がつかないほど類似している。14は口縁を薄板作りにし断面「く」の字状に屈曲させる。口縁端内側のやや下がった位置に稜線を持つが、外面の凹線はそれほど発達していない。中世6期(参考文献3)に含まれると思われる。このほか瀬戸美濃の皿が出土していることと、国産染付の出土がないことから16世紀代の堆積層と考えられる。

第6層 (図Ⅲ-27, 28, 図版19, 20, 25) 平安時代末～鎌倉時代の遺物を主体とするが古墳時代～平安時代の土師器、須恵器(16)も少量含む。中世前半では土師器(26～31, 33～43)、瓦器碗・皿(32)、常滑焼甕(20)、東播系須恵器片口鉢、土師器釜(17, 44, 45)、青磁(18)、白磁(19, 21～24)、備前焼播鉢(25)などが出土している。25は小片のため判断が難しいが精良な胎土と堅い焼きあがりから室町時代まで下る可能性があり混入と考えるべきかも知れない。

常滑焼、白磁、東播系須恵器片口鉢などとともに、瓦器碗も高台がしっかりした平安時代末～鎌倉時代初頭に入るような特徴を示すものが多く見られるが、高台が紐状に退化した形態も一定量含まれる。また14世紀代に入ると考えられるような高台のない瓦器碗は小片のため断言はできないが、可能性のある破片を少量確認している。このほか確実に15世紀以降と考えられる遺物は確認できていないことと、上層の第5層には第6層から出土しない14～15世紀代と考えられる青磁(11～13)、土師器鍋(1)、瓦質土器羽釜が一定量入ることから第6層の堆積時期は14世紀代と考えられる。

第8a, b層 (図Ⅲ-28, 図版20) 土器片(51)および叩石(49)が出土している。51は外面に横方向の筋状の凹みを何条かもつが、押当てたものか掻き取ったものか判断できない。

第9層 サヌカイト片が出土したのみで時期は不明である。

第10層 (図Ⅲ-28, 図版20) 平底の底部片(52)、サヌカイト製スクレイパー(50)、サヌカイト片が出土している。52は器壁が薄く、底部以外の可能性もある。

第1遺構面検出（近世）の遺構と遺物（図Ⅲ-5）

第5層上面での検出であるが、A区では全体図に示すように半分程度はすでに第6層やベース面が露出している。B区でも南西部は第6層が露出していた。

遺構はA、B区間に流れる水路、素掘り溝以外は用途不明の土坑やピットが少量分布するのみである。

素掘り溝 A区では座標北から東へ25°前後、B区では東へ15°前後振った方向で、現在の道路にほぼ平行する。削平によるためかA区東半とB区西半には全く見られない。

掘立柱建物B-a? B区中央やや北東よりに位置する。直線的にピットが並ぶが建物を復元するには至らなかった。ピット内にはすべて焼土が含まれており、2ヶ所で石が据えられている。素掘り溝を切って掘り込まれているためさらに上位の層からの掘り込みの可能性もある。

B1方形土坑（図Ⅲ-28） B区中央付近、第5層上面で検出した方形土坑で、検出面での平面規模約1.3×1.5m、残存深さ約60cmを測る。埋土中から瀬戸美濃皿(54)が出土している。

A1流路（図Ⅲ-28、図版20） 昭和まで機能していた水路で、A、B区間の道路に沿って流れている。室町時代のA7流路（後述）から繰り返し掘りなおされている水路である。

A11土坑（図Ⅲ-29、図版21） 平面が隅円方形の土坑。検出面での規模1辺約1.5m、深さ約0.1mである。粗砂礫を埋土とする遺構で、A16素掘り溝に切られる。18世紀前後と見られる唐津焼大皿(79)や玉縁状口縁を有する鉢が出土している。

第2遺構面検出（室町時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-6、図版4）

A区では西側と北東の一部に第6層が残り、北東隅には落ち込み部にα層が堆積している。それ以外はベース面が露出している。B区では南西隅と中央北の一部で8a層が露出、その上にα層が堆積する状態での検出である。

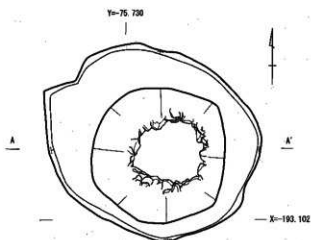
A区では西半に素掘り溝、東半に多数のピット群が分布する。第6層より新しいα層が堆積する部分には土坑や溝が少数ながら存在する。B区では西端にピットが非常に密に分布する地点があり、その南東側には井戸が造られている。中央付近にも東端ほどではないがピット群、素掘り溝が見られる。東端のB21区画溝以東にはピットは見られない。また、若干時期は下がるが第5b層上面から掘り込まれる溜槽がB区中央北に造られている。

A28落ち込み（図Ⅲ-29、図版5、21、25） A区北東隅に位置する第6層上面からの落ち込みで、15世紀代を下限とする遺物を含むα層が堆積している。α層上面ではA24、25溝、A27土坑等を検出した。α層を除去するとベース面が現れるが、この上面でもA26溝、A66土坑等を検出している。

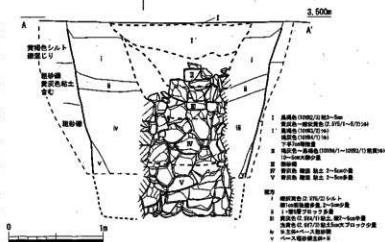
遺物はα層中に瓦器など鎌倉時代以前の遺物も多く含まれているが、瓦質土器壺(70)、備前焼播鉢(71)、青磁碗(72、73)、平瓦（凸面離れ砂付着）など概ね15世紀代に収まる遺物が下限であり、上層の第5層の堆積時期からも室町時代の埋没と考えると矛盾はない。

A26溝 (図Ⅲ-29、図版5, 21, 25)

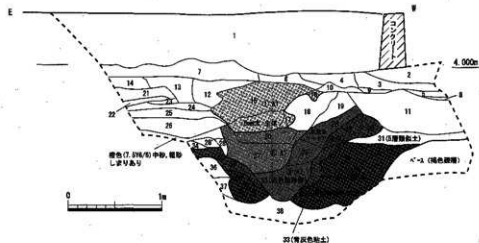
A28落ち込み内にある東
西方向に走る小溝で、埋土
はA28同様α層である。15
世紀代の常滑焼壺(81)、青
磁菱花皿(80)のほか、状態
が悪く実測はできなかった
が漆器皿が出土した。80は
小片のため復元径にある程
度の誤差を含む。



B21区画溝 (図Ⅲ-29、図版
5, 21) B区東端を南北方
向にはする第6層上面検出
の溝で、西に掘立柱建物お
よびピット群が広がるのに
対し東にはB19土坑1基と素
掘り溝以外の遺構が見られ
ないことから、屋敷地を区
画する溝と考えられる。検出
面での幅70~80cm、深さ
15cmの浅い溝であり、瓦器
碗、土師器皿など鎌倉時代



図Ⅲ-12 B14井戸 平面図・断面図(S=1/40)



図Ⅲ-13 A1, A7流路 土層断面図(S=1/40)

の混入と考えられる遺物のみで遺構に伴う遺物はなかった。なお、W51地区の溝内から8割程度残存する瓦器碗(85)が出土しているが、南壁断面で見ても第6層上からの掘り込みであることから下層遺構(例えばB440ピット この付近は後述のように柱抜き取り後に瓦器碗など遺物を据えるピットが多い)の遺物が混入した可能性もある。

A7(A1)流路(図Ⅲ-13, 28, 図版5, 20) A区東端で検出した南流する小河川であるが、平面プランが不明確であったため断割って断面観察後遺構掘削を行った。A1旧水路を含めて繰り返し掘りなおされている。当初の流路は褐色礫層をベースとしているが、このベース土からは15世紀代の瓦質羽釜(69)が出土しており、室町時代以降にできた河川であることがわかる。河川最下層の礫混じり青灰色粘土層、5層類似土、青灰色粘土層から69とほぼ同時期の土師器皿(68)、備前焼播鉢(67)、瓦質羽釜(65)、茶臼(66)等が出土しており、出土遺物から判断するとベース土の堆積と河川堆積にそれほど間隔がなく、礫層という土質を考慮すればベース自体も直前の河川埋土である可能性がある。

この後再び流路となり、その最下層である灰色粗砂礫層から16世紀末～17世紀代の肥前系陶器碗(62)が、その上層かと思われる灰色系シルト層からは17～18世紀前後と考えられる唐津焼(59, 60)が出土している。さらにその後の流路埋土には18世紀前後と考えられる丹波系の播鉢(56)、染付(57)等の遺物が含まれる。近隣の方の話によると、その後も現代に至るまで流路であり続けていたようである。

B14井戸(図Ⅲ-12, 29, 図版4, 21) 主に20～30cm大の礫を使用した石組みの井戸である。石組部内径は上端で60～70cm、下端で90cm、深さ2mで、検出面での掘方は長軸約2.4m、短軸約2.1mである。埋土は5層に分層できるが各層で出土遺物の時期差は認められず、瓦質羽釜(83, 84)、播磨系土師器釜(82)など15世紀代の遺物を下限とする。室町時代の井戸と考えてよいと思われる。

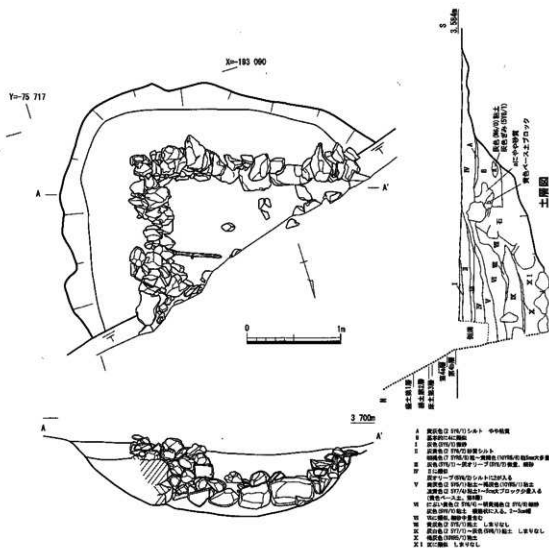
B334溜枧(図Ⅲ-14, 29, 図版4, 21) B区中央北壁に接する場所で一部検出した。10cm～40cm大の礫でつくられた石組み遺構で残存長1.1×1.9mである。調査区外に伸びるため全体像は不明だがその構造から溜枧と考えられる。埋土中から木杭と平瓦(86)が出土している。時期は細かく比定できないが、中世の瓦と考えられる。遺構の時期は、北壁土層図から第5b層上面遺構であることが確認できるため、他の第6層上面検出遺構より若干下る可能性はあるが室町時代に収まる溜枧である。

A66土坑(図Ⅲ-15, 30, 図版5, 22, 25) A28落ち込みの堆積土であるα層を除去後ベース面で検出した土坑で、埋土もα層を主体とする。埋土から30cm大の礫1個とともに茶臼の下臼(88)や青磁碗(87)など鎌倉～室町時代と考えられる遺物が出土している。

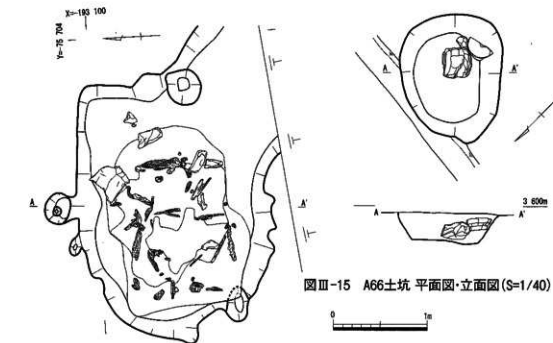
B25焼土坑(図Ⅲ-16, 図版5) B区南東に位置しB21区画溝に切られる焼土坑で、第6層上面で検出した。検出面での平面規模一辺約2×3mの不整形土坑で一部調査区外南に伸びている。底

面はなだらかな傾斜を有し平坦面を形成しない。土坑内約1.2×1.5mの範囲に焼壁、炭化材が多量に遺存していた。炭化材は最下層に、焼壁は上層に多く含まれており、中層には両者ともほとんど含まれていない。底面は火を受けていないため、廃棄土坑の可能性もある。周囲に深さ5～10cm程度のピットが3基土坑を囲むように分布しているが、この土坑に付随するものかどうかは明らかでない。遺物は混入と見られる瓦器、土師器片のみで遺構の時期を示す遺物の出土はなかった。

B368土坑 (図Ⅲ-30、図版5、22) B区中央付近で一部B15落ち込みに切られる長軸約4.5m短軸約1.5mの長楕円形土坑である。第8a層露出部分で検出し、埋土は第5、6層を主体とする。埋土上位から土師器皿(90, 91)、陶器(89)、下位から瓦質こね(播)鉢(92)、甕(94)、土師器皿(93, 95, 96)など室町時代の遺物が出土している。なお、上位出土の89は上層遺物の混入の可能性がある。



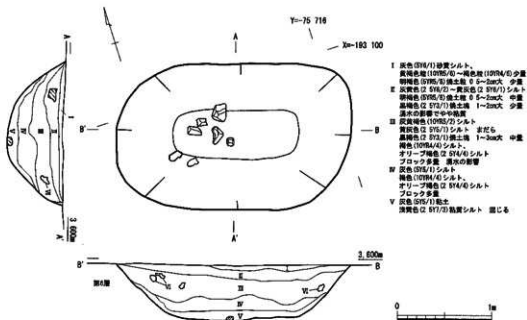
図Ⅲ-14 B334溝枡 平面図・断面図(S=1/40)



図Ⅲ-15 A66土坑 平面図・立面図(S=1/40)



図Ⅲ-16 B25焼土坑 平面図・断面図(S=1/40)



図Ⅲ-17 B26土坑 平面図・断面図(S=1/40)

B19土坑 (図Ⅲ-18, 図版5) B区東端に位置し、一部調査区外に伸びるため全体像ははっきりしないが残存部の最大長4.3m、深さ1.5mを測る土坑で、第8層上面から掘り込まれている。土坑は2段掘りになっており、底から約90cm上で桶底板と側板が出土した。遺構の時期比定をできるような遺物の出土はなかったが、検出面から室町時代の土坑と考えられる。

B26土坑 (図Ⅲ-17) 調査区南中央付近第6層上面で検出した長辺2.5m、短辺1.5m、残存深さ60cmの隅丸方形土坑である。瓦器、焼土塊、礫などが出土したが、検出面から室町時代の遺構と考えられる。

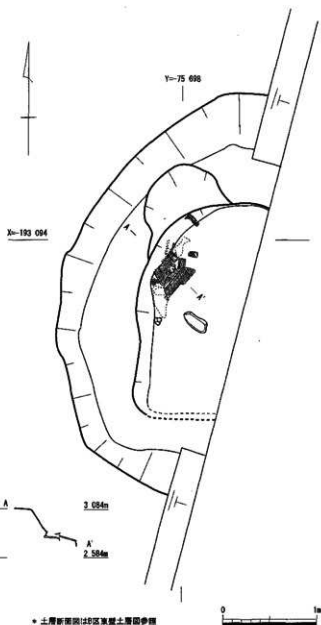
掘立柱建物B-b B21区画溝の西側、東西方向1間×2間の建物である。柱穴埋土はすべて第5層に類似するが、平面図上の復元であり、深さや大きさにばらつきがあるため可能性を示すにとどめる。この建物の内側にもう1棟建っていた可能性があるが第5層上面の遺構に一部を切られははっきりしない。

第3遺構面検出(鎌倉時代)の遺構と遺物(図Ⅲ-7, 図版6)

A区では南西隅に第8a層が一部の間っている以外はベース面が露出している。B区ではすべて第8a層上面での遺構検出である。

A区では中央付近に2基の土壇墓のほか北半にピットを多く検出している。B区では南西部で土壇墓(木棺墓の可能性あり)を検出した。これ以外は全面にピットがかなり密な状態で分布しており、北東部ではピット内に瓦器碗等鎌倉時代前半の遺物が据え置かれたものが目立つ。

B380落ち込み (図Ⅲ-30, 図版22) 第8a層上面から落ち込み、



図Ⅲ-18 B19土坑 平面図・立面図(S=1/40)

測り大きく削平されていた。一部をB14井戸に切られる。

土壌内には人骨、粗い編み物状の繊維質が遺存していた。人骨は頭蓋骨片、上腕骨、肋骨、前腕骨、中手骨、大腿骨、腓骨、脛骨、踵骨などを検出した。骨の出土状況から頭位は北北東で体を東南東に向け、膝下を直角に折った状態で埋葬されたと思われる。遺物は土師器血片(141)、瓦器血片(142)が出土した。細片のため埋土に含まれていた可能性が高く、副葬品として扱うことはできないが、時期については、第6層が上に堆積することとこれらの遺物を含むことから鎌倉時代と考えられる。

また、編み物が土壌底面に敷かれており炭化した状態で検出した。南半に集中して遺存しているが、本来は全面に分布していたと思われる。北半は人骨の残りも悪く原位置もとどめていないことから編み物についても削平などの理由で遺存しなかった可能性が高い。この墓の特徴は立面図からもわかるように、ベース土が脛骨の南でいったん垂直に近い角度で立ち上がった後また南に向けて傾斜を持ちながらレベルを上げており、墓坑内で区画されたような空間を持つ。編み物も人骨が遺存している部分では南北方向の繊維の流れを示すが、この空間では東西方向の流れを示し、一連のものではなく別に敷かれていたと考えられる。土壌墓、木棺墓両方の可能性があるがそれぞれの解釈に問題点があり現状では判断が難しい。

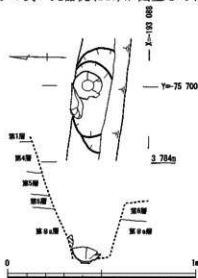
A67土坑 (図Ⅲ-32, 図版10, 24) A66土坑と同様A28落ち込みのα層を除去したベース面で検出した土坑である。埋土はA66と異なり第6層を主体とする。埋土中から瓦器、東播系須恵器片口鉢、土師器のほか元豊通宝(1078年初鑄)(144)が出土しているが、遺構に伴う遺物かどうかははっきりしない。

B350土坑 (図Ⅲ-31, 図版23) 掘立柱建物B-dの南で検出した長方形土坑で、検出面での平面規模は0.5×1.2mである。出土状況ははっきりしないが残りの良い瓦器碗(140)が出土しており、土壌墓の可能性も考えられる。

掘立柱建物B-c (図Ⅲ-32) 南北方向1×1間以上の建物で、B743柱穴などで構成される。B743からは白磁碗(154)が出土している。

掘立柱建物B-d 南北方向1×1間以上の建物で、B201, 427, 744柱穴などで構成される。柱穴出土遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭の建物と考えられる。

B201柱穴 (図Ⅲ-22, 32, 図版9, 24) B区北東の側溝で検出した柱穴である。第6層下、第8a層上面から掘り込まれている。掘方の径約55cmで柱根に相当する部分が径40cmである。柱根底部に瓦器碗1点(145)が据えられていたほか、土師器皿(146)も出土しているが位



図Ⅲ-22 B201柱穴 平面図・断面図
(S=1/20)

置ははっきりしない。中世段階の他例から見ても柱抜き取り後に据えたものと考えられる。

B427柱穴 (図Ⅲ-32, 図版 9, 24)

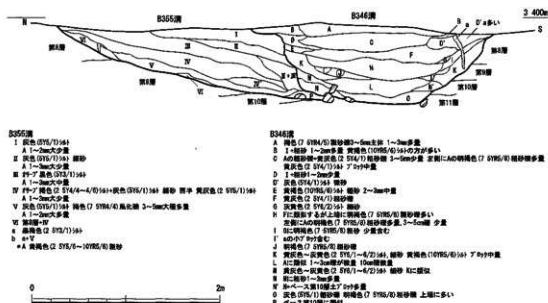
B201の南東に位置する柱穴である。底面に瓦器碗(147, 148)が据え置かれた状態で出土しておりB201同様柱抜き取り後に置かれたものと考えられる。このほか埋土中から瓦器碗、土師器皿片が出土している。

B744柱穴 (図Ⅲ-32, 図版10, 23) B201の東2mに位置する柱穴である。B201, 427同様底面に瓦器小皿(149)、回転糸切りの土師器皿(150)が各1点置かれた状態で出土しており、上記同様柱抜き取り後に据えられたものと考えられる。

B428, 435, 727, 353柱穴 (図Ⅲ-32, 図版 24) 掘立建物B-d付近に位置する柱穴で、出土状況ははっきりしないが土師



図Ⅲ-23 B687ピット 平面図・断面図(S=1/10)



図Ⅲ-24 B346, B355溝 土層断面図(S=1/40)

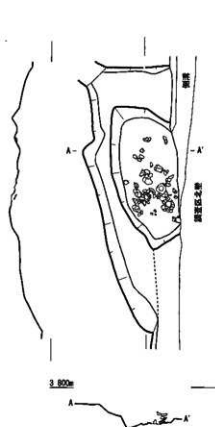
器小皿(159)、瓦器小皿(151～153)、瓦器碗が出土している。瓦器碗は高台がしっかりしておりやや古い特徴を示す。

B687ピット (図Ⅲ-23, 30, 図版22) B区南西第8a層上面で検出した。検出面での長径45cm、短径38cm、残存深さ25cmの不正円形土坑で埋土上層は第6層土である。わずかに底面から浮いた位置に完形の土師器釜(100)が伏せた状態で底に据えられていた。100は鐙がなく、口径に対し器高が低いやや扁平な体部を持つ。体部の形態や調整に新しい要素が見られるが、検出面、埋土から下っても14世紀代の遺構である。

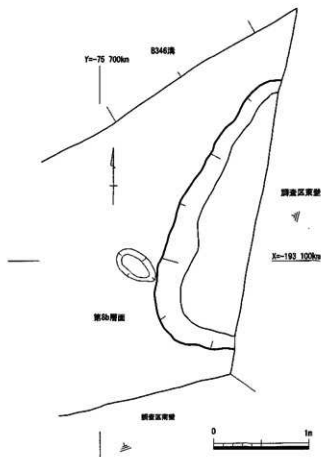
第3遺構面検出(縄文時代晩期～弥生時代前期)の遺構と遺物(図Ⅲ-7, 図版6)

A地区ではベース面で土坑1基(A195)、B地区では第8a層上面で東北東から西南西とこれに直交する方向の溝数条(B346, B355, B370, B347, B349)を検出した。土坑以外遺物の出土量が極端に少ないので断定はできないが、胎土、遺構埋土や第8a層以下の出土遺物等から判断すると縄文時代晩期～弥生時代前期の可能性が高い。

B346溝 (図Ⅲ-24, 32, 図版10, 11, 24) B区南東部で東北東から西南西に向けて流れる溝でB355溝を切る。検出面での幅約2.5m、残存深さ約80cmで断面は角に丸みを持つ逆台形である。



図Ⅲ-25 A195土坑 平面図・立面図(S=1/40)



図Ⅲ-26 B区751土坑 平面図(S=1/40)

埋土は粗砂礫で、ベース土の崩落土と交互に堆積した状況が観察でき、流水のある期間とない期間を繰り返しながら埋没したと考えられる。埋土から縄文時代晩期と考えられる尖底土器(167)の他、縄文または弥生時代と思われる胎土の粗い土器片、サヌカイト片が出土している。上面から30cmまでは一部瓦器片が含まれるが別ピットなどの遺物の混入と考えられる。出土遺物が少ないため時期判断が難しいが、土器の胎土等から判断すると縄文時代晩期～弥生時代前期の範囲に機能した溝の可能性はある。

B355溝 (図Ⅲ-24, 図版10, 11) B区東で南南東に向かって流れたあと東壁付近で直角に折れ曲がりB346溝と同方向に流れる。B346溝によって切られる。場所によって異なるが検出面での幅約2.5m前後、残存深さ40～70cmで断面はなだらかなV字形である。埋土は灰色系のシルト質であることから流水はなく、ある程度の湿潤状態にあったと思われる。遺物はサヌカイト剥片と弥生または縄文時代の土器小片が出土している。第8a層が縄文時代晩期以降の堆積層とすると、B346との切り合いから縄文時代晩期～弥生時代前期の溝である可能性がある。

A195土坑 (図Ⅲ-25, 32, 図版10, 24, 25) A区北壁にかかって検出した土坑である。調査区外に伸びるため全体像は不明であるが残存部最大長2.8m、深さ30cmを測る。底面付近からは弥生時代前期末頃の壺(161, 162, 164)、甕(165, 166)などが出土した。全遺物とも風化が激しいため調整ははっきりしなかったが、166は紀伊型甕でヨコケズリの痕跡がわずかに観察できる。162は長頸の広口壺で頸部にかすかに直線文らしき痕跡が残るが、ヘラか櫛か原体は判別できない。163は、A195と同位置の側溝中第6, 8層間で出土した遺物であることからこの土坑に伴う遺物である可能性が極めて高い。

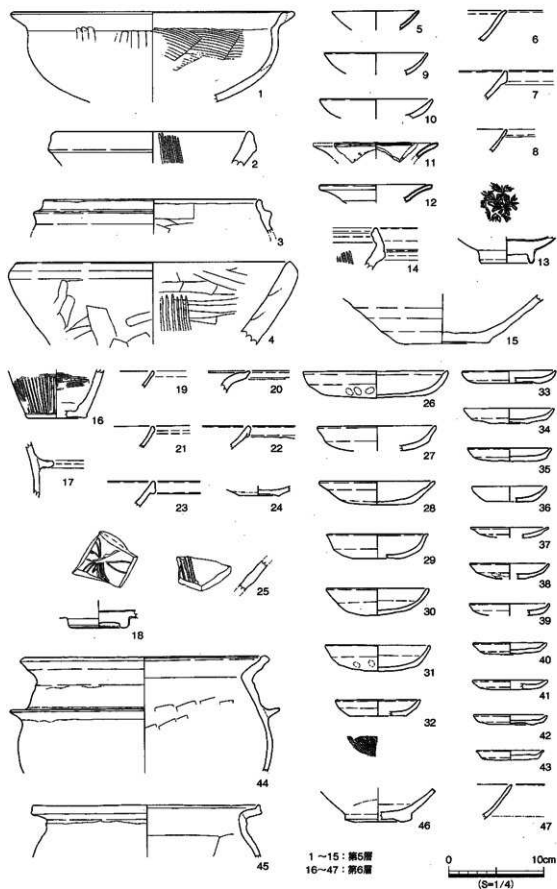
第4遺構面検出(縄文時代後期～晩期?)の遺構と遺物

B区東側1/4ほどについて掘り下げた結果、8b層上面で土坑1基を検出した。

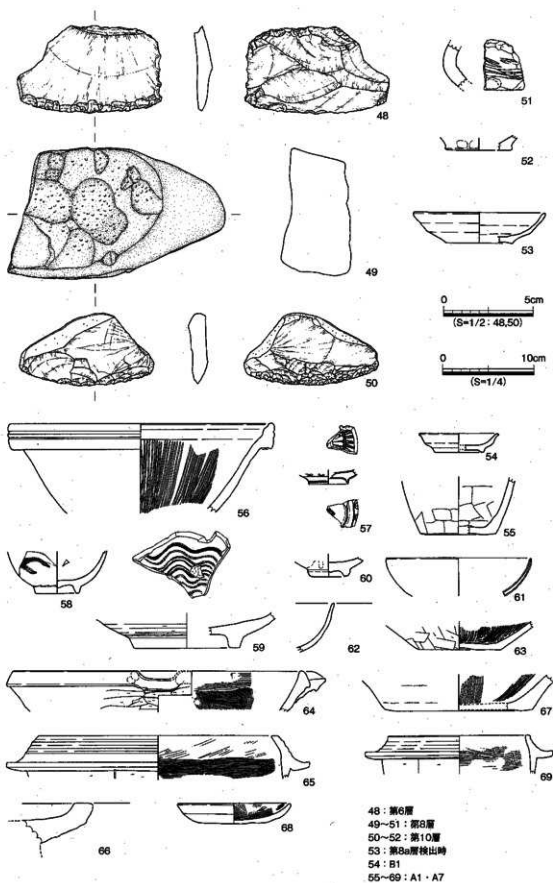
B751土坑 (図Ⅲ-26, 図版11) B区東壁にかかって検出した土坑である。調査区外に伸びるため全体像は不明であるが残存部最大長2.8m、深さ6cmを測る。縄文時代と考えられる土器片が出土している。

第6遺構面検出(縄文時代後期～晩期?)の遺構と遺物

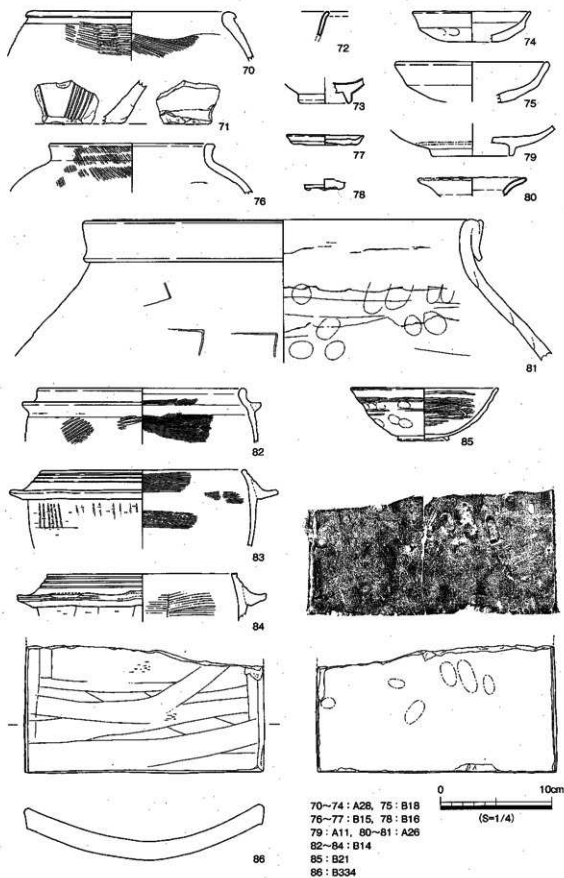
B752土坑? (図Ⅲ-8, 32, 図版22) 東側側溝で検出した。遺構か自然地形の窪みかは判断できない。埋土から縄文土器深鉢片(168)が出土した。



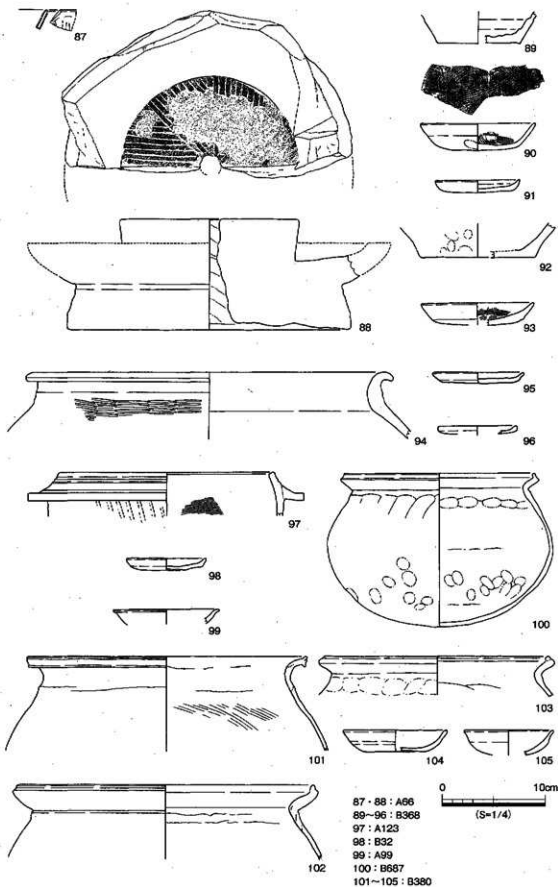
图Ⅲ-27 A·B区遺物包含層出土遺物実測図



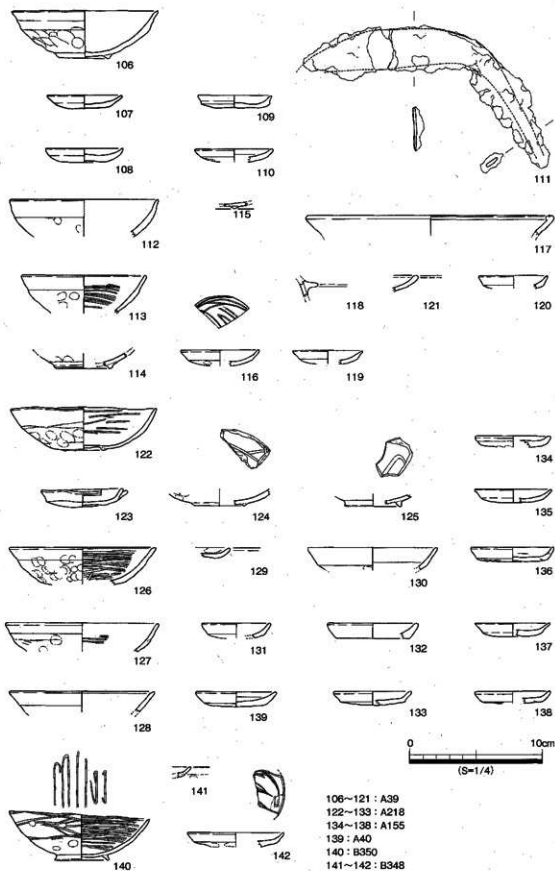
図Ⅲ-28 A・B区遺物包含層、遺構出土遺物実測図



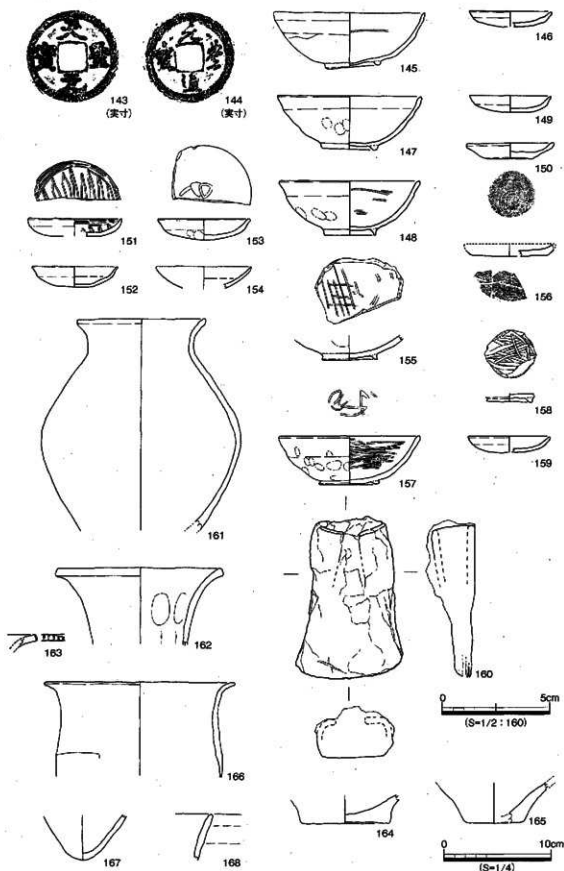
图Ⅲ-29 A·B区遺構出土遺物実測図



图Ⅲ-30 A・B区遺構出土遺物実測図



图Ⅲ-31 A·B区遺構出土遺物実測図



143 : B717, 144 : A67, 145~146 : B201, 147~148 : B427, 149~150 : B744, 151 : B435, 152 : B353, 153 : B428
 154 : B743, 155~156 : B566, 157 : B470, 158 : B733, 159 : B727, 160 : B542, 161~166 : A195, 167 : B346, 168 : B752?

图 III-32 A·B区遺構出土遺物実測図

2 C区(2次調査)

(1)調査の概要

C区は1次調査区の東隣に位置する。調査時はC区を2分して西側をC1区、東側をC2区と呼称している。実質調査面積は371㎡である。

旧地形で見ると弥生時代から室町時代まではA、B区ほどではないが東方に向かい徐々にレベルを下げる。近世に入ると耕作地として利用されるためB区からは一段レベルが下がるが、C区内ではほぼ水平レベルを保つ。

土層は基本層序で示したとおり南側では第1～6, 8a, 8b, 9, 10, 11層が堆積するが、北半および東端では第2～5, 7, 8a, 8b層で第6層に代わり第7層が見られる。第8a層は東端部でレベルを落とすほか調査区北側でも落ち込みが見られる。この落ち込み部に古墳～平安時代の遺物を含むC層(大部分を第7層が占めるがB層ブロックを中量含む)、平安時代の遺物を含むB層、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物を含むA層が堆積し、各層上面で遺構を検出することができる。A, B層はC1区の落ち込みに堆積するが、C2区の落ち込み部の埋土との対応ははっきりしなかった。遺構面は、5面(第1, 3, 4, 6, 7遺構面)確認した。なお、第2遺構面については検出を試みたが確実にこの遺構面に属する遺構は検出することができなかった。第4, 6, 7遺構面については調査区南半を部分的に掘り下げて遺構検出をおこなった。ただし、第7遺構面を形成する第11層まで少量の遺物の出土はあるものの、第4, 6, 7遺構面は自然流路、落ち込みなどを検出したのみで明確な遺構は確認できていない。

主な遺構は、平安時代末から鎌倉時代の多数の溝、土坑、ピット、掘立柱建物4棟、集石遺構1基、平安時代の多数の溝・土坑と井戸1基、水溜2基、古墳時代の自然流路1条以上と土坑2基などである。

出土遺物の総数はコンテナ19箱で縄文時代から中世の遺物を含むが、A, B区に比べ平安時代後期の遺物が多く出土している。

(2)遺構と遺物

遺物包含層出土の遺物

第5層(図Ⅲ-56, 図版26) a, b層に細分して遺物を取り上げているが、A, B区に比べ遺物総数が少ないこともあり、a, b層の各時期を推定することはできなかった。古墳時代の須恵器・土師器など平安時代以前の遺物も少量含むが平安時代末から室町時代の遺物が主体である。平安時代末～鎌倉時代では、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、東播系須恵器片口鉢、山茶碗片のほか、白磁碗(171, 173)・皿(172)が出土している。室町時代では、土師器皿、東播系須恵器片口鉢(170)、瓦、酸化焰焼成の備前焼片等が出土している。いずれも室町時代までに収まる遺物であり、A, B区で述べた16世紀代の堆積という推定に齟齬はない。この他に包含層の時期を示す資料ではないが圭頭又は方頭形の鉄鍬(179)と考えられる遺物が出土している。

第6層 出土遺物は極少量で時期を推定できる遺物はなかった。

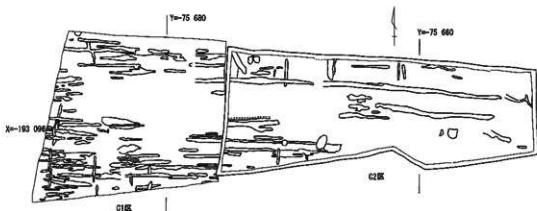
第7層 時期を決定できる遺物は出土していない。C220落ち込みに堆積していたC層（第7層に上層の平安時代の遺物を含むB層がブロック状に混じる）出土遺物を参考にする、大部分が古墳時代以前と考えられる須恵器、土師器であるが、奈良時代～平安時代の土師器杯底部片、黒色土器片の2点のほか古代以降の可能性のある244が含まれる。このことから第7層は古墳時代の遺物包含層である可能性が高いが古墳時代～平安時代に堆積した層としておく。

第8a層（図Ⅲ-56、図版26） 縄文土器口縁部片（175）が出土しているほかは小片のため時期を特定できない。第8a層下の砂礫層からは底部片（174）が出土している。

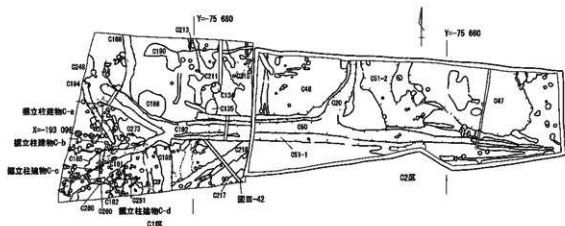
第9層（図Ⅲ-56、図版26） 叩石（185）、サヌカイト製石鏃（182）、サヌカイト片（183）が出土しているが時期は特定できない。

第10層（図Ⅲ-56、図版26） サヌカイト片（184）が出土しているのみである。第10層下からは縄文土器底部片（176）が出土している。

第11層（図Ⅲ-56、図版26） 凹底の縄文土器底部片（177）が出土している。



図Ⅲ-33 C区第1遺構面平面図(S=1/300)



図Ⅲ-34 C区第3-1遺構面平面図(S=1/300)

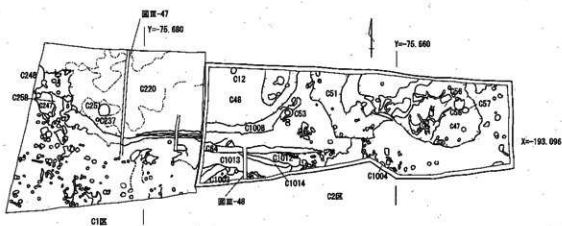


图 III-35 C区第3-2遺構面 平面図(S=1/300)

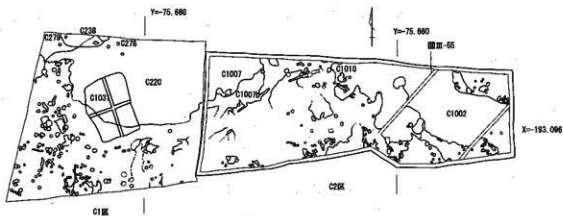


图 III-36 C区第3-3遺構面 平面図(S=1/300)

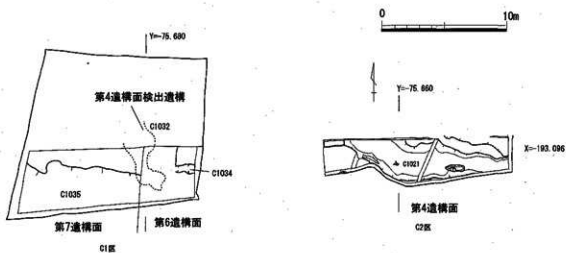


图 III-37 C区第4,6,7遺構面 平面図(S=1/300)

第1遺構面検出（近世）の遺構と遺物（図Ⅲ-33、図版11）

調査区西側のC1区では、第5a層上面で遺構検出を行ったが、東側のC2区については第5層を機械で掘削して第2遺構面から検出を行った。なお第1遺構面平面図は、C1, 2区とも第2遺構面で検出した遺構のうち第4層を主体とする埋土を持つものを記載している。

遺構は東西方向の素掘り溝を全面で検出したのみである。

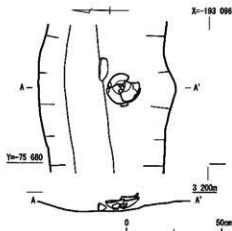
第3-1遺構面検出（平安時代末～鎌倉時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-34、図版12）

C1区北側の落ち込み部ではA層上面、C2区北側の落ち込み部では第7層上面、それ以外では第8a層上面で検出した遺構である。A層上面では平安時代末～鎌倉時代の遺構のみが分布するが、第7層上面では平安～鎌倉時代、第8a層上面では弥生～鎌倉時代の遺構が同一面で検出されるため、埋土や出土遺物で時期分類して報告する。

主な遺構は、東西方向に流れる溝およびそこから分岐または合流するように流れる溝多数、掘立建物4棟、土坑などである。溝以外の遺構は西側のC1区に多く分布する。

C211落ち込み（図Ⅲ-56、図版27） C1区北に位置し、A層上面から落ち込む。出土遺物はほぼA層と同様で平安時代後半の「て」の字状口縁皿、黒色土器碗、土師器碗などを多く含むが12世紀までに収まるような瓦器碗も含む。鎌倉時代前半までには埋没したものと思われる。なお、この落ち込みの直下でA'層を埋土とするC261として検出した溝があるが、C211落ち込みの一部と考えられる。ここからは平安時代以前の遺物に加え瓦器碗(191)、凹石(190)などが出土している。

C20溝、C50溝、C185溝、C192溝（図Ⅲ-41、56、図版13、26） 調査区を西から東へ流れる溝（C192、C50）およびそこに接続する溝（C20、C185：流れの方向不明）である。東西を2分割して調査したため遺構番号が異なるがC50とC192は連続する。遺構検出時の図面によれば南側が第6層上面、北西側がA層上面、北東側が第7層上面での検出であるが、C192溝底から完形に近い瓦器碗(188, 189)が出土している。この遺物は、調査時点ではC192を切るC216ピット出土の可能性も考えられたが、いずれにしても溝埋土下位に瓦器、土師器釜(186)を含むことか平安時代末を上限とし、188, 189の良好な遺存状況から鎌倉時代初頭を下ることはないと思われ、A層上面で検出できる遺構と考えられる。北東側はA層の堆積がないため矛盾はないが、南側は室町時代以降の面（第6層上面）での検出となっている。しかし第6層はC区では部分的で非常に薄い堆積であるため下部の遺構がすでに見えていた可能性があり、出土遺物についても各溝から室



図Ⅲ-41 C192溝 瓦器碗出土状況
(S=1/20)

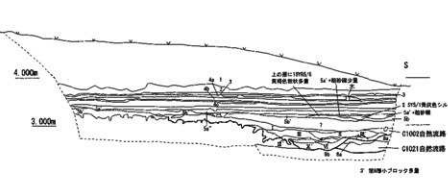
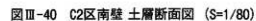


图 III-38 C1区南壁土层断面图 (S=1/80)



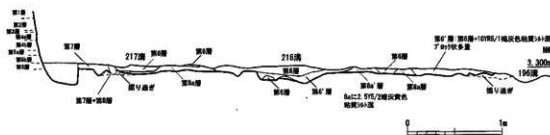
町時代のものは確認できないことからA層上面検出相当の溝とするのが妥当である。

C51-1溝 (図Ⅲ-56, 図版27, 28) C2区南を東西方向にC50溝に沿うように流れC50に切られる。検出面ははっきりしないが、埋土には土師器碗、壺、「て」の字状口縁皿等平安時代後期を中心とした遺物を含むものの、少量の外ミガキを施した瓦器片(193)や鎌倉時代初頭までに収まる土師器釜(194)も混じることから平安時代末～鎌倉時代初頭に最終的に埋没した溝と考えられる。ただし平安時代の遺物量が多いことから平安時代から機能していた可能性もある。

C186, 195溝 調査区西側を南北方向に流れる溝で、それぞれC192溝とC185溝を越えて反対方向に連続していないことや、交わる部分で溝幅が広がることから各溝に接続するものと考えられる。検出面はC186がA層上面、C195が第6層上面であるが、C185, 192と同様の理由でA層上面相当の溝と考えられる。遺物は、瓦器、土師器釜等に混じり平安時代の土師器壺、「て」の字状口縁皿等が出土している。

C217溝、C218溝 (図Ⅲ-42, 57) 調査区中央南で北東-南西方向の並行する2本の溝を第8a層上面で検出した。流れの方向は不明である。C217はC1003につながると考えられていたが、C1003は瓦器を含まず、平安時代のC1013溝に切られる。これに対し、C217, 218は埋土を鎌倉時代の遺物包含層第6層としており、別の溝と考えるべきである。遺物はC218からは瓦器片が1点の他須恵器片や古墳時代と思われる高杯3点(223～225)、土師器把手(226)が出土している。これら古墳時代の遺物は同一地点から出土していることから別遺構の遺物の可能性もある。C217からの遺物の出土はなかった。平安時代以前の遺物を主体とするが、瓦器片が混じること、第6層を主体とする埋土であることから鎌倉時代に埋没した溝と考えられる。

C134, 135土坑 (図Ⅲ-44, 56, 図版13, 26, 29) C1区東より南北に並ぶ楕円形土坑でA層上面で検出した。それぞれ長軸0.8m×短軸0.7m、長軸1.6m×短軸0.8mを測る。深さは約3cmと浅く、底一面に多量の炭が敷き詰められたような状態で検出されており壁面は焼けていた。出土遺物はC134から土師器皿(195)、土師器碗、「て」の字状口縁皿などが、C135からは鉄製品(196～198)、瓦器片、土錘や平安時代の遺物が少量出土しているのみである。195は平底で内面と外面の一部が黒化しているが2次的なものか焼成時のものか判断できない。この地点は第6層の堆積があったかどうか不明のため、層位的には平安時代末から第5層の堆積時期である



図Ⅲ-42 C217, 218溝 土層断面図 (S=1/40)

室町時代までの長い期間の可能性があるが、周辺の状況と出土遺物から考えると平安時代末から鎌倉時代の可能性が高い。

C190土坑 C1区北部にある最大長約3mを測る不整形土坑で、A層上面で検出した。出土遺物は、埋土中から瓦器、土師器、瓦、須恵器片などが出土しているが、遺構に伴う出土状況ではない。この土坑は一部第6層が上に堆積していることから平安時代末～鎌倉時代の遺構である。

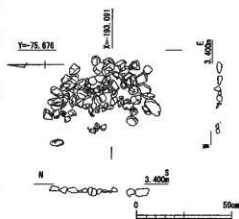
C215集石 (図Ⅲ-43、図版13) C1区北東端で～20cm大の礫が0.8m×1.0mの範囲にかたまって出土した。A層上面の検出である。出土遺物はないが、検出面から平安時代末～鎌倉時代の遺構である。

掘立柱建物C-a C1区西隅で検出した東西方向1間×1間以上の建物である。

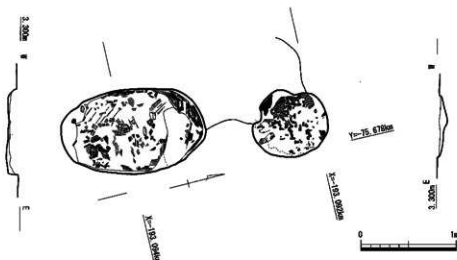
掘立柱建物C-b 上記C-aの南で検出した東西方向1間×1間以上の建物である。

掘立柱建物C-c 上記C-2に重複して検出した東西方向1間×1間以上の建物でありC260柱穴などで構成される。

C260柱穴 (図Ⅲ-46, 57, 図版13, 27) C1区南西部に位置し、第8a層上面で検出したピットである。3段掘りになっており、上段は長軸70cm、短軸35cmの楕円形で残存深さ4cm、中段は長軸40cm、短軸20cmの楕円形で深さ12cm、下段は直径20cmの円形で深さ15cmである。ピット底付近からは土師器釜(199, 200)、土師器皿(203)、瓦器碗(201)、石器(202)などの遺物



図Ⅲ-43 C215集石
平面図・立面図 (S=1/20)



図Ⅲ-44 C134, 135土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

が比較的残りの良い状態で出土した。数が多いことや土器片も大きく磨耗も少ないことから埋没時の流れ込みとは考えにくく、遺構に伴う遺物と考えるほうが適当である。埋土の状況ははっきりしないので即断できないが、形状から考えて柱穴の可能性があり、柱抜き取り後に土器が据え置かれたと思われる。

199, 200はしっかりした罫をもち、口縁端部は丸みを残す面を形成する。203は回転糸切りの皿で、201は密に外ミガキを施す。202は用途不明だが表面全面に朱と思われる付着物が見られる。これらの遺物は202を除き概ね12世紀代に収まる時期であり、柱が建っていた時期もほぼ同時期と考えてよいであろう。

掘立柱建物C-d C1区南西隅で検出した南北方向1間×1間以上の建物でありC182, C281柱穴などで構成される。

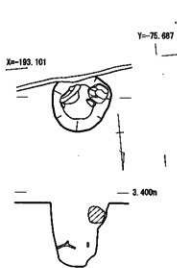
C182柱穴 (図Ⅲ-45, 57, 図版13, 27) 土師器釜(204)が埋土中から出土した。12世紀代に収まる遺物と考えられる。

C281柱穴 (図Ⅲ-57) 11-12世紀代に収まる瓦器碗(207)が埋土中から出土した。

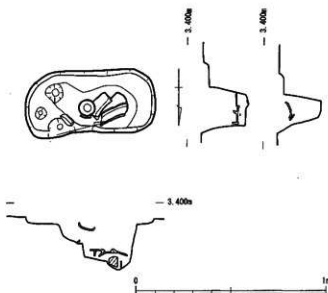
第3-2遺構面検出(平安時代後期)の遺構(図Ⅲ-35, 図版14)

C1区北側の落ち込み部ではB層またはC層上面、C2区北側および東側の落ち込み部では第7層上面、それ以外では第8a層上面で検出した遺構であり、多数の溝と井戸1基、土坑、ピット等が分布する。北半はC1, C2区とも落ち込みが多く見られる。

C47, C51-2, C48落ち込み (図Ⅲ-57, 図版28) C2区北東から北西にかけて順に並び、いずれも第7層上面から落ち込む。C48上層には古手の瓦器片をごく少量含むが、それ以外からは



図Ⅲ-45 C182柱穴
平面図・立面図(S=1/20)



図Ⅲ-46 C260柱穴 平面図・立面図(S=1/20)

平安時代後期の土師器皿(209～213, 217, 219)・碗(208)、黒色土器碗(218)や須恵器(214)、土鍾(215, 216)が出土し瓦器を含まない。C48はC220落ち込みと連続すると思われるが、土層の対応ははっきりしない。C51-2落ち込みは調査当時C51-1溝につながると考えていたが、出土遺物の時期も異なるため別遺構として取り扱っている。検出面や出土遺物から平安時代後期にほぼ埋没したが、一部鎌倉時代前期まで窪みとして残っていたと考えられる。

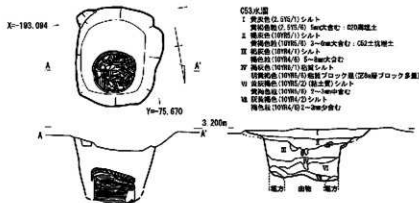
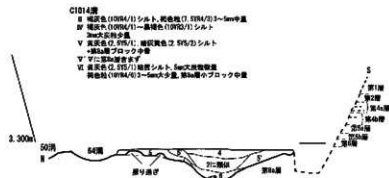
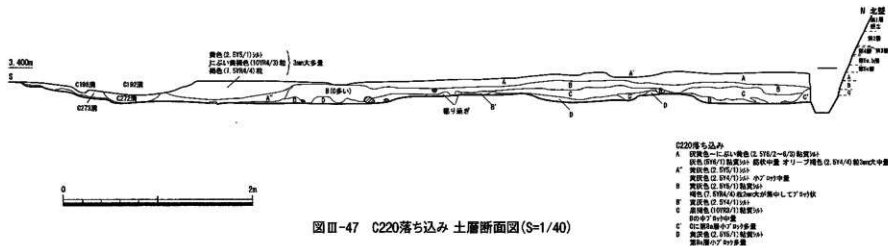
C220落ち込み (図Ⅲ-47, 58, 図版15, 27～29) C1区北側にあり、A層を除去後第8a層上面で検出した。上からB層、C層、D層の順に堆積しており、最上層には部分的な窪みにA層の堆積が残っていた。A層には鎌倉時代初頭までの瓦器片が少量含まれるが、土師器皿(228～234)・甕(227)等平安時代の遺物を主体とする。B層からは平安時代後期の土師器皿(235, 241～243)・碗(236, 238)、黒色土器碗(237)、須恵器が出土し、瓦器は含まれていなかった。土師器皿は「て」の字状口縁(230～232, 241, 242)、口縁部が直線的または内湾気味に立ち上がり回転ナデを施すタイプ(228, 229, 234)、口縁が大きくひらきながら外反するタイプ(235)、口縁が短く立ち上がり底面が平坦でヘラ切りするタイプ(233, 243)に分かれる。この他B層からは不明土師器(240)が出土している。形状から造り付け甕の付属品の可能性もあるが他例に比べてやや薄い。

C層は第7層にB層ブロックが含まれる。奈良時代から平安時代の土師器杯、黒色土器のほか土師器壺(244)、磨石(246)や古墳時代の須恵器(245)・土師器が出土しているが大部分が古墳時代の遺物である。D層から遺物は出土しなかった。以上からA層：平安時代末～鎌倉時代初頭、B層：平安時代後期、C層：古墳時代～平安時代の堆積と考えられる。

C64溝 (図Ⅲ-57, 図版15) C50, 51溝に沿って東西方向に流れる溝で、第8a層上面の検出である。出土遺物は、黒色土器碗(220)、土師器碗(221, 222)などで瓦器等中世の遺物は含まないことから平安時代末までに埋没した溝と思われる。

C1003溝 (図Ⅲ-68, 図版28, 29) 当初C217溝につながる溝で鎌倉時代の第6層を主体とする埋土と考えていたが、後述の平安時代のC1012, 1013, 1014溝に切られること、出土遺物は平安時代以前の土師器甕(250, 251)・鉢？(249)、黒色土器碗(247)等のほかに瓦器など中世遺物を含まないことから平安時代末までには埋没した溝と考えられる。C217溝はC218と平行して流れ、第6層を主体とする埋土であることから鎌倉時代としたが出土遺物はなかった。このためC1003に連続する溝で平安時代まで遡る可能性もある。

C1012溝、C1013溝、C1014溝 (図Ⅲ-48, 58, 59, 図版15, 29, 31) 第8a層上面の検出である。調査時点では別の溝として掘削したが、堆積状況から1条の溝の可能性が高い。出土遺物は、土師器皿(257～259, 265, 269～273)・碗(254, 255, 264, 267)・甕(256)、土鍾(260～263, 275～287)、黒色土器碗(252, 253, 266, 268)など平安時代後期を下限とする。このうち259, 270～273は「て」の字状口縁、257, 269は大きく外反気味にひらく口縁、258は回転糸切りまたはヘラ切



りで直線的に短くひらく口縁をもつ。このほか時期を特定できなかったが白磁小片が1点出土している。

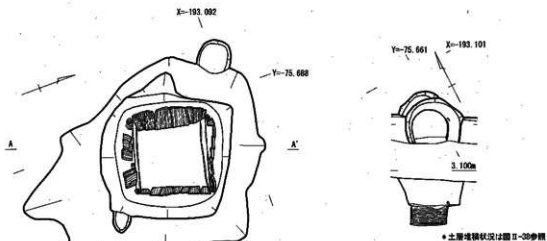
C247井戸 (図Ⅲ-51, 59, 図版15, 29, 31) 調査区西端第8a層上面で検出した方形木組井戸である。残存部上端幅約1.2m、下端幅0.9m、残存深さ約2mを測る。埋土は9層に分層でき、上層(I層)、中層(Ⅱ～Ⅳ層)、下層(V・Ⅵ層)、最下層(Ⅶ層)にわけて遺物の取り上げを行っている。上層からは土師器皿(288～292)・甕(293)(注:291, 292, 293は上層出土の可能性が高いが断定はできない)、中層からは土師器皿(297)・椀(294～296, 298)、平瓦(300)、土鍾(299)、下層からは縄文土器片、最下層からは土師器片が出土している。これら遺物の特徴は鎌倉時代に多く見られる格子タダキの平瓦があるにもかかわらず瓦器等中世遺物の出土がないこと、そして「て」の字状口縁皿がないことである。なお、最下層の遺物は小片であったため、井戸の時期を直接推定することはできないが、構造や周辺も含めた出土遺物から見て平安時代の井戸と考えられる。

C258土坑 (図Ⅲ-60, 図版30) C247井戸との前後関係ははっきりしないが、一連のものかもしれない。出土遺物は平安時代の「て」の字状口縁土師器皿(302)・土師器甕(301)で、このほかは土師器片のみであった。301は頸部内面に明瞭な稜線をもつ点、体部外面を粗いハケ調整する点、胎土が粗い点においてC247出土の293とは異なる。

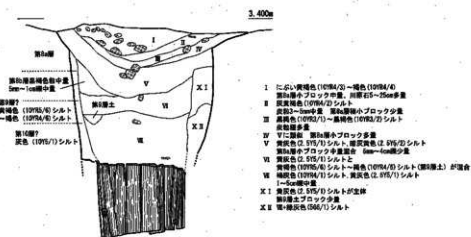
C53水溜 (図Ⅲ-49, 60, 図版15) C2区中央やや西寄りでC20溝に切られる形で検出した。掘り方は検出面で長辺約1m、短辺約0.8mの隅丸方形で残存深さは約70cmである。底には直径45cm程度の曲物が据えられていた。掘方には土師器椀(303)や黒色土器椀(304)など平安時代後期の遺物のみで瓦器等中世遺物を含まない。一方埋土からは平安時代以前の遺物もあるが瓦器片もごく少量含んでいる。鎌倉時代のC20溝に切られることから平安時代後期～鎌倉時代の間に収まる。出土遺物を積極的に時期決定の根拠とすれば平安時代に造られ鎌倉時代にかけて埋没した水溜と考えられるが、掘方の出土遺物量はそれほど多くないため平安時代後期～鎌倉時代の幅で捉えておく。

C1004水溜 (図Ⅲ-50, 図版15) C2区南壁側溝で検出した水溜で、C53と同様底に直径40cmの曲物が据えられていた。掘方は残存部最大長60cm、残存深さ約50cmを測り、平面形は円形又は楕円形になると思われる。遺物は土師器1片が出土したのみで時期を確定することはできなかった。第8a層上面(第6層除去面)で検出していることから弥生時代～鎌倉時代の範囲に絞られるが、C53水溜と類似した構造を持つことから、平安時代後期～鎌倉時代の水溜と考えられる。

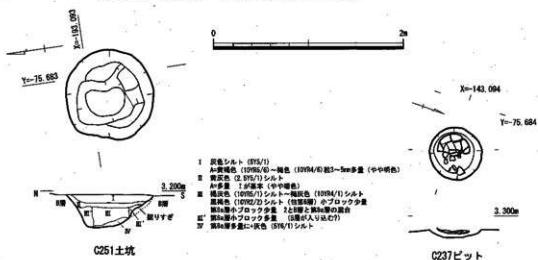
C251土坑 (図Ⅲ-52, 60, 図版15, 29) C1区中央付近で検出した直径1m、残存深さ35cmの円形土坑である。検出面ははっきりしない。A層を主体とする埋土で、黒色土器や「て」の字状口縁土師器皿は含まれていなかったが、土師器皿(306, 307)・甕(305)等平安時代の遺物が出土し



図Ⅲ-50 C1004水溜 平面図・断面図
(S=1/40)



図Ⅲ-51 C247井戸 平面図・断面図 (S=1/40)



図Ⅲ-52 C251・237土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

ている。瓦器等中世の遺物は含まれていなかった。埋土がA層主体であることから瓦器出現直前の土坑であると考えられる。

C12ピット (図Ⅲ-60) C2区北西で検出したピットである。C48落ち込み埋土上面から掘り込まれているが、埋土中に瓦器はなく平安時代後期の土師器皿(310, 311)・碗(308)等が出土した。310は外反して大きくひろく、311は「て」の字状口縁皿で、308は口縁端部内面に明瞭な沈線状の窪みを持つ。瓦器片を含むと考えられるC48上層埋土堆積前の遺構と考えられる。

C213ピット C1区北西部で検出したピットである。第6層を除去した面で検出しているがどの面上なのかははっきりしなかった。しかし、平安時代の土師器碗や黒色土器片を含む瓦器等中世遺物を含まないことから考えてB層又はC層上面で検出できる遺構と思われる。

C237ピット (図Ⅲ-52, 60, 図版15, 30) C251土坑の南西約1mに位置する直径約30cm、残存深さ5cmのピットでA層を埋土とし、土師器皿(312, 313)など平安時代後期の遺物を含む。

第3-3遺構面検出(弥生時代～平安時代)の遺構と遺物(図Ⅲ-36, 図版14)

全面第8a層上面で検出した遺構で、調査区東に自然流路、土坑1基、北西端に溝1条、土坑1基がある。

C279溝 C1区北西隅、第8a層上面で検出した溝でC238土坑に切られる。B346溝の延長で縄文時代晩期～弥生時代前期の溝の可能性はある。

C1002溝 (図Ⅲ-55, 60, 図版16, 30) C2区東の第8a層上面で検出した北西から南東に流れる自然流路である。遺物は上層(第I層)、中層(第II層)、下層(第Ⅲ～V層)、最下層(第VI層)、最々下層(第X層)に分けて取り上げており、中層から土師器高杯(315, 316)、須恵器高杯(317)、下層から須恵器杯(318)、最下層・最々下層から土師器甕片(319)が出土している。下層の318杯は中層出土片と接合する。須恵器は初期須恵器で土師器についても同時期に含められることから古墳時代中期に埋没を始めた自然流路と位置づけることができる。

C238土坑 (図Ⅲ-54, 60, 図版16, 30) C1区北西隅で検出した土坑で北側調査区外へ延びており、残存部最大長3.7m、残存深さ約5cmを測る。検出面は第8a層から第7層かはっきりしなかったが埋土からは5世紀代の須恵器杯身(320)・ハソウ(321)、土師器甕(322～325)が出土していることから古墳時代中期に属すると考えられる。竪穴住居跡の可能性も考えられたが柱穴等平面形状以外の要素は確認できていない。

C1010土坑 (図Ⅲ-53, 図版16) C2区北側中央付近で検出した不整形土坑で、検出面での最大長80cm、深さ3cmを測る。第8a層上面で検出した。この土坑内には約15cm大の甕が数個と須恵器甕片が置かれていた。調査時点では配石遺構と呼称していた遺構である。C1002につながるC1002b内に造られていることから古墳時代中期の遺構と考えられる。

C1031土坑 C1区中央で検出した約3×6mの方形土坑である。遺物は出土しなかった。竪穴住居跡の可能性も考えられたが柱穴等は検出されていない。

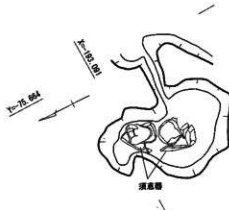
C278ピット(図Ⅲ-60, 図版30) C220落ち込み内の埋土(BかC層)を除去した第8a層上面で検出した遺構である。ピット内からは土師器杯(326)が出土している。

第4遺構面検出(縄文時代)の遺構と遺物(図Ⅲ-37, 図版16)

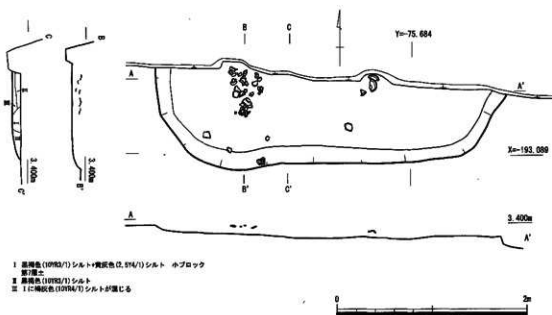
調査区南東部の一部のみを掘り下げて遺構検出を行い、自然流路1条を検出した。

C1021自然流路(図版16) 調査区

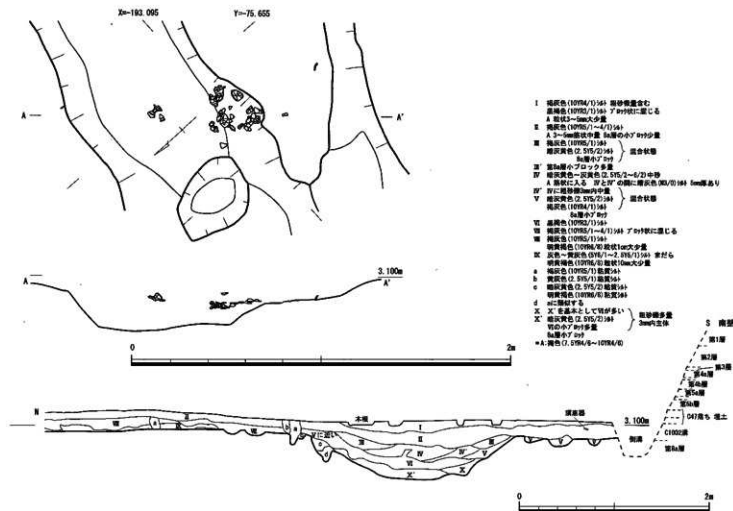
南東隅で西北西から東南東へ流れる自然流路である。検出面は第8b層上面である。縄文土器の可能性のある土器片が出土しているが、時期の否定は困難である。しかし、層位的に縄文時代後期～晩期に属すると考えられる。



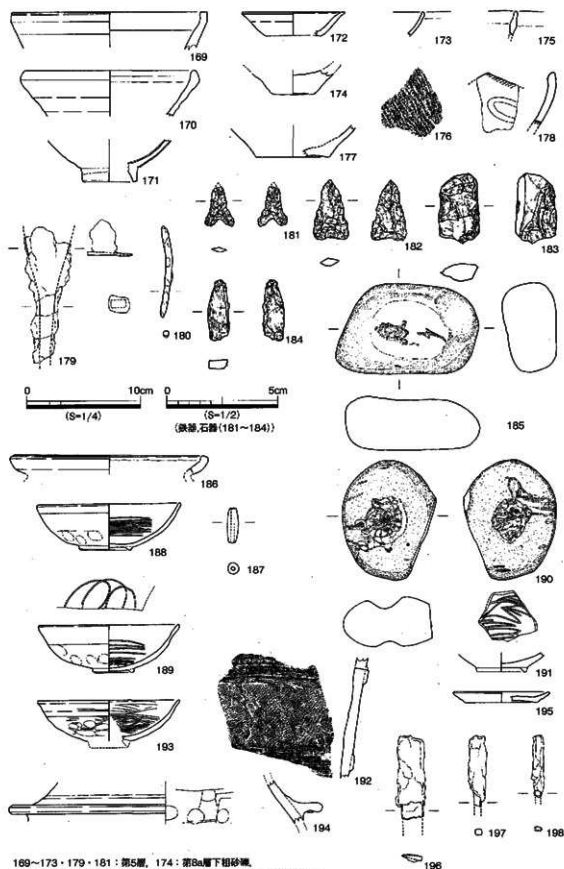
図Ⅲ-53 C1010土坑 平面図・立面図(S=1/20)



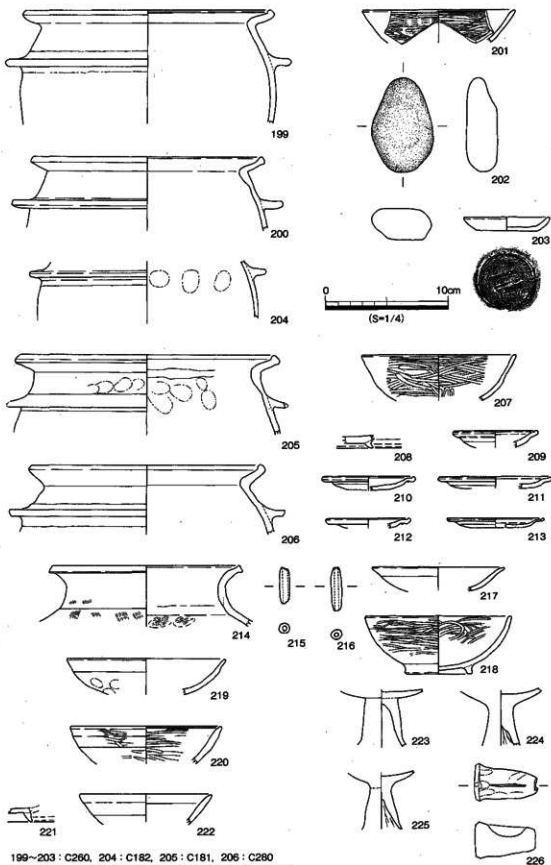
図Ⅲ-54 C238土坑 平面図・断面図(S=1/40)



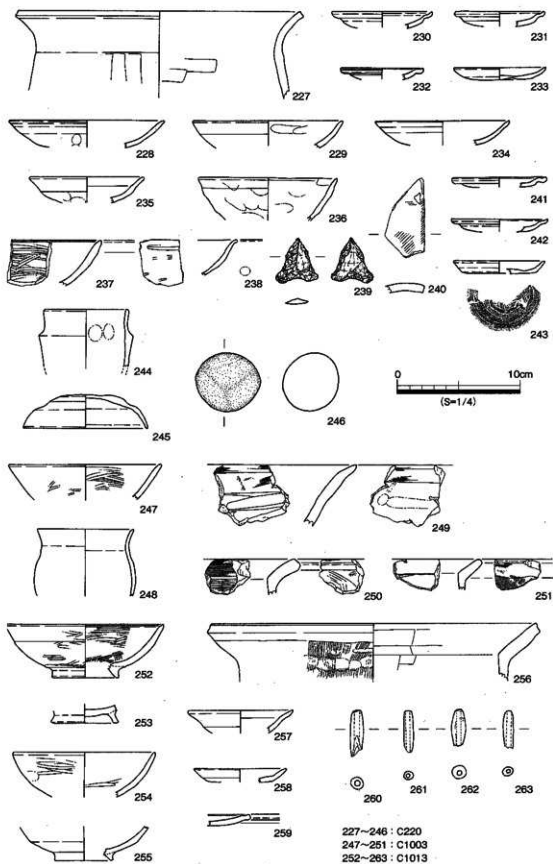
図Ⅲ-55 C1002溝 平面図 (S=1/20)・土層断面図 (S=1/40)



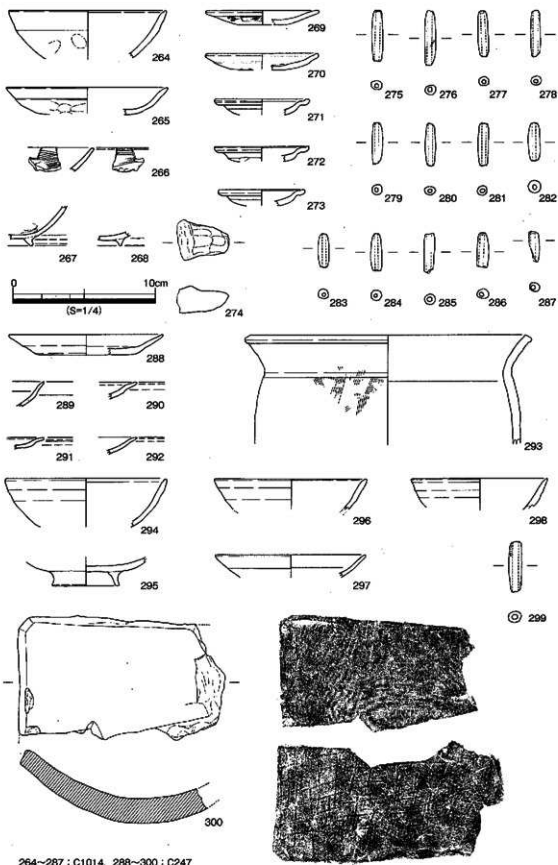
圖Ⅲ-56 C區遺物包含層、遺構出土遺物



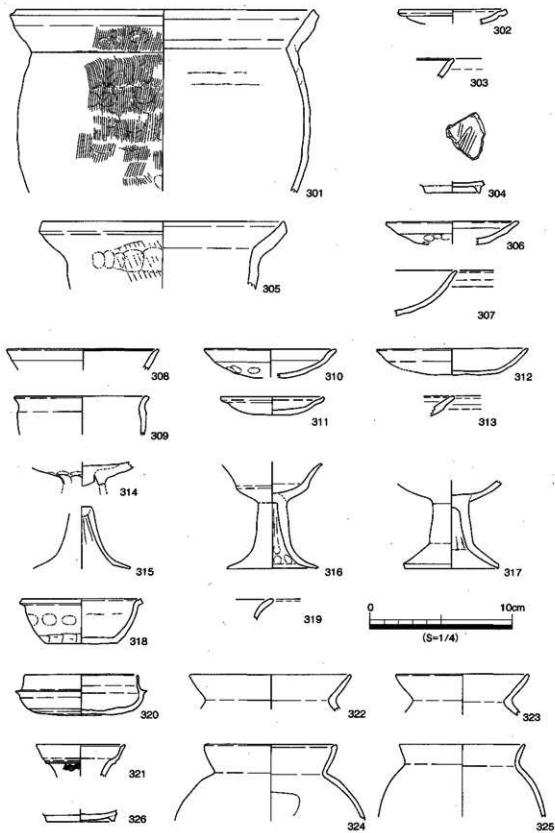
图Ⅲ-57 C区遺構出土遺物実測図



图Ⅲ-58 C区遺構出土遺物実測図



图Ⅲ-59 C区遗物出土文物实测图



301~302 : C258, 303~304 : C53, 305~307 : C251
 308~311 : C12, 312~313 : C237, 314~319 : C1002
 320~325 : C238, 326 : C278

图Ⅲ-60 C区遗物出土文物实例图

(1) 調査の概要

土層は基本層序で示したとおりで、C区東端と同様第6層はなく第7層が堆積する。この下は、この地区特有の古墳時代と考えられる土層第7a、b層、DA層（DA層は調査時点でA層としていたがC区におけるA層とは異なるため前にDを付す。）が堆積する。また、東端を除き第8a層の堆積は見られない。

遺構面は、調査時点で4面(第1,3-2,3-3,4遺構面)確認しており、各面で落ち込み、土坑、ピットを検出した。時期を明確にする遺物の出土はなかったが遺構面間に堆積する層は20cm程度あり、下面が露出するような状況ではないので各面での検出遺構

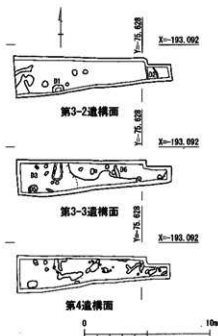


圖 III-61 D区各道橫面 平面圖(S=1/300)

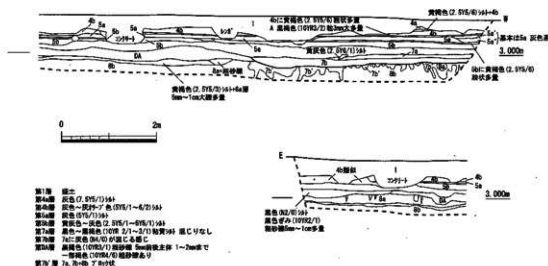


图 III-62 D区南壁十层断面图(S=1/80)

をそのまま記載する。なお近世の第1遺構面は機械で除去した。

出土遺物の総量はコンテナにして1箱足らずときわめて少ない状況であった。古墳時代から奈良時代にかけての須恵器も出土しているが、その量はきわめて少ない。大部分は中世、鎌倉時代の瓦器・土師器の碗・皿類である。

(2) 遺構と遺物

第3-2遺構面検出（平安時代～室町時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-61）

第7層上面で検出を行ったが、方形土坑1基と東端部で東側へ傾斜を持つ落ち込みを確認したのみである。

第3-3遺構面検出（古墳時代～平安時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-61、図版17）

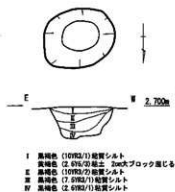
第8a層上面での検出であるが、第8a層が露出しているのは北東部分のみで南西側に地形が落ち込んでいる。この北東部分でビットや土坑を検出したほか南西落ち込み部埋土上面で多数の小ビットを検出した。

D3落ち込み（図Ⅲ-64、図版31） 南西方向への落ち込みで南側中央より東ではDA層（黒褐色粗砂礫層）が堆積した後、西半では第7a、b層（黒褐色粘質シルト）が堆積している。遺物はほとんどなく、土師質の須恵器杯身(327)が出土しているほかは土師器、埴輪片のみである。この落ち込みはC1002自然流路の延長部分と考えられる。C2区東端で検出したC1002自然流路の堆積土を見ると、流路中心部は深く緩いV字形断面を呈し何層もの土層が堆積するが、両肩付近は上層の第7層と区別のつきにくい黒褐色粘質シルト層が浅く広い範囲に堆積している。この落ち込みの堆積状況に類似しており、やや幅が広いもの流路の屈曲部と考えれば理解できる。

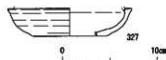
D5円形土坑（図Ⅲ-63、図版17） D3落ち込みの底面で検出した長径75cm、短径60cm、深さ約30cmの楕円形土坑であり、埋土は5層に分層できるがすべて黒褐色シルト質であった。遺物は土師器片が1点出土したのみで時期の比定はできなかった。

第4遺構面検出（縄文時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-61、図版17）

第8b層上面で検出したビットや不整形土坑である。深いものでも10cm程度である。東側の遺構埋土は第8a層+粗砂礫、中央の遺構はやや黄味がかった黒褐色シルトに分かれる。2種類の埋土が存在するが範囲が明確に2分されることや形状から自然の窪みである可能性もある。遺物の出土はなかった。



図Ⅲ-63 D5土坑 平面図・断面図 (S=1/40)



図Ⅲ-64 遺物実測図 (S=1/4)

4. F区 (3次調査)

(1) 調査の概要

F区は、旧県道粉河加太線を挟んでD区の北隣に位置する。調査面積は358㎡である。

旧地形（弥生時代～鎌倉時代の面）でD区と比較すると約30cmほど高いが、単純に均一な傾斜がついているとすると傾斜角度はわずか2度足らずでほぼ平坦面と言ってよい。

土層は基本層序で示したとおりA～D区の土層との対応関係をつかむことができなかったため土層番号の前にFを付けて区別しているが、遺構や包含層に含まれる遺物や大まかな土層の特徴から考えると第F12層が第8a層に対応すると思われる。

盛土の下には造成直前まで使われていた水田の耕作土(第F1層)、さらにその下層には近世の水田跡と思われる層が二層(第F3・4層)存在している。第F5, 6層：灰オリーブ(5Y5/2)シルト、第F7層：オリーブ褐(2.5Y4/4)シルト、第F8層：黄灰(2.5Y4/1)シルト、第F9層：暗オリーブ褐(2.5Y3/3)シルト、第F10層：黒褐(2.5Y2/3)シルト、第F11層：黒褐(2.5Y1/3)シルトで以上は量的には多くないが中世以降の遺物包含層である。ただし各層とも縄文土器・須恵器など古い時期の遺物が混在している。とくに第F10・F11層は古い遺物が多く、当初、古墳時代以前の堆積かと考えていたものであるが、この中からも少量ながら鎌倉時代の瓦器の破片が出土している。第F12層以下は礫層と砂質土が複雑な堆積を見せており、遺構面としては確認できなかった。なお、この層から出土する遺物は縄文あるいは弥生時代のものに限定されている。

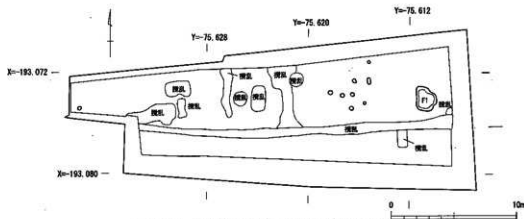
遺構面は、4面（第F1～第F4遺構面）確認した。第F1遺構面は近世のため機械で除去した。

出土遺物はコンテナ2箱であった。縄文時代～室町時代の遺物が少量出土している。

(2) 遺構と遺物

第F2遺構面検出（鎌倉時代～室町時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-65, 図版17）

第F9層上面で検出した遺構である。この面では攪乱が多く、遺構として確認できたものは調査区東半部で検出した径20cmほどのピットと長辺約1.5mの不整形の土坑1基のみである。遺構からの出土遺物はほとんどなく、その所属時期を確定するのは困難であるが、包含層の状況



図Ⅲ-65 F区第F2遺構面 平面図(S=1/300)

等から中世の可能性が高いものと考えられる。

第F3遺構面検出（鎌倉時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-66、図版17）

第F10層上面で検出した遺構である。この面も遺構密度は低く、径20～30cm前後のビット20余基を検出しているにすぎない。時期的には上面と同様に中世と考えられる。

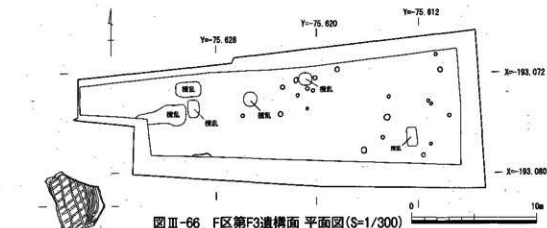
第F4遺構面検出（弥生時代～鎌倉時代）の遺構と遺物（図Ⅲ-67、図版17）

第F12層上面で検出した遺構である。比較的遺構は多く、径10～30cmのビットが約50基、不整形土坑8基を調査区全面で検出した。

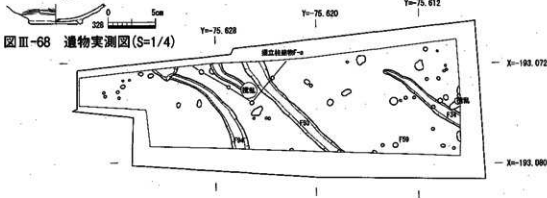
掘立柱建物F-a（図Ⅲ-68、図版31） 調査区中央の北側で唯一建物になると思われる並びが認められた。規模については調査区外に延びているため全容は不明である。この建物を構成する柱穴のひとつから平安時代末ないし鎌倉時代初めと思われる瓦器碗(328)が出土している。

F59ビット（図版17） 調査区東側南端で検出したビットである。弥生時代の壺・甕が出土している。

F34, 93, 94溝（図版17） 調査区を北西から南東に流れる幅50～70cmほどの溝を3条検出した。このうちF34溝は削平を受けたようで、北側で途切れる。埋土から縄文土器片が出土している。F93, 94は深さは30cmほどとしっかりとした溝である。出土遺物はなく時期については不明である。



図Ⅲ-66 F区第F3遺構面 平面図(S=1/300)



図Ⅲ-67 F区第F4遺構面 平面図(S=1/300)

4. G区 (2次調査)

(1) 調査の概要

G区は、F区東端から約13m東へ離れた旧県道粉河加太線の北側に接する場所に位置する。東西2地区に分割して調査を実施した。調査時点ではG2区としていたが本書ではG区として報告する。実質調査面積は81㎡である。

土層は基本層序で示したとおり、A～D区やF区の土層との対応関係をつかむことができなかったため土層番号の前にGを付けて区別している。

盛土(第G1層)、現代水田耕作土(第G2層)の下には近世の耕作土と思われる層が二層(第G4, G5a層)存在している。第G7d層以上は室町時代以降の遺物を含み、第G8層～第G11層までは平安時代末から鎌倉時代の遺物を含む。第G12層～第G16層までは平安時代後期の遺物を含むことを確認したが、それ以下は安全面を考慮掘削を断念した。

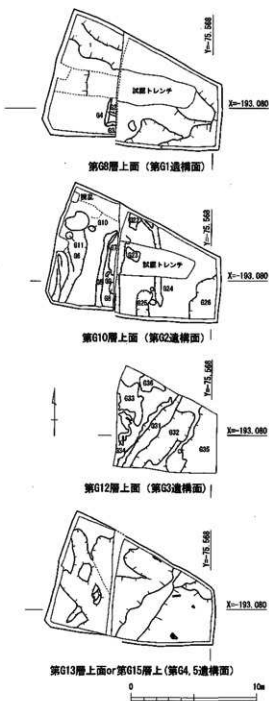
旧地形はT.P.=2.7m付近に堆積する第G15層まで平安時代の遺物を含むことから少なくとも平安時代までは西の調査区に比べかなり落ち込んでおり、また鎌倉時代以降も軟弱な堆積層であることから住居を構えるような安定した地盤ではなかったと思われる。

遺構面は、調査時点で5面(第G1～第G5遺構面)確認しているが、第G2遺構面で検出した水溜以外は溝や落ち込みなどで明確な遺構は検出できなかった。

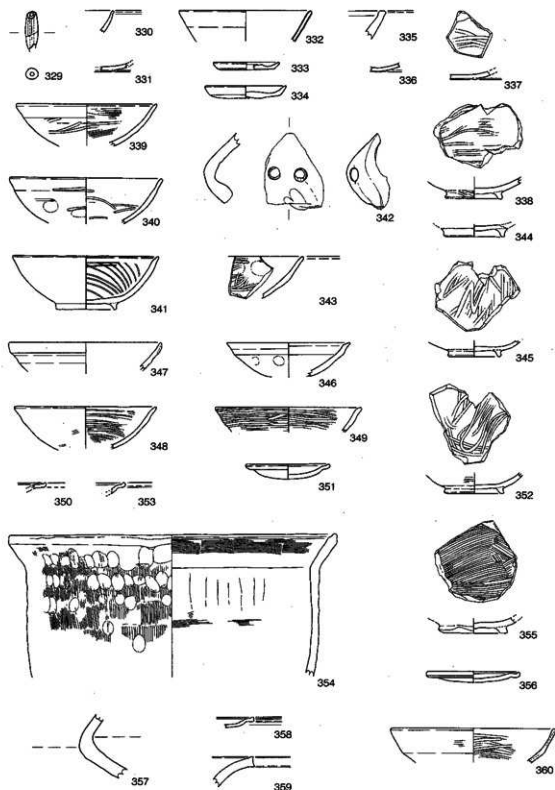
(2) 遺構と遺物

遺物包含層出土遺物(図Ⅲ-72, 図版31, 32)

第G8層・土師器皿(333, 334)、瓦器碗(331)等が出土している。瓦器碗の形態から鎌倉時代後半の埋没と考えられる。また、第G8, 9層間の土層からも同時期の瓦器碗(336)や土師



図Ⅲ-69 G区各遺構面 平面図(S=1/300)



329 : 第G7b層, 330~334 : 第G8層, 335~336 : 第G8・9層同
 337 : G24, 338 : G6, 339~345 : 第G10層, 346 : G5
 347~352 : 第G11層, 353 : G31, 354~356 : 第G12層
 357~358 : 第G14層, 359 : 第G14~15層, 360 : 第G16層

図Ⅲ-72 G区遺物包含層、遺構出土遺物実測図

第四章 土壌分析の成果

第1節 はじめに

今回の調査で遺構・遺物が確認できた古墳時代、平安時代～室町時代について花粉、珪藻分析を実施した。遺跡周辺全体の古環境を復元することを目的とし個別遺構の埋没状況などは今回の分析の対象外とした。分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

第2節 分析資料

分析は、1. 時期が確定している資料、2. 極力湿潤状態で酸化による分解が少ないと思われる資料、3. 上下層からの混入（ベース土の崩落、人為的埋土）がない資料、4. 洪水などで一時に埋没していない資料を選択して実施した。

表Ⅳ-1 分析資料一覧表

地区	遺構	種類	分析 品	土質	花粉	珪藻	時期
G	南壁	第7b層	4	にぶい黄～黄褐シルト、青灰色シルト	○	○	室町時代～近世
		第10層	5	褐灰シルト	○	○	平安時代末～鎌倉時代初頭
		第12層	6	暗灰黄粘質シルト	○	○	
		第14層	7	灰色粘質シルト	○	○	平安時代
		第16層	8	灰色粘土	○	○	
C	C1002	I層	9	褐灰シルト、黒褐シルト	○		古墳時代中期
		II層	10	褐灰シルト	○		
		IV層	11	砂礫	○		
		VI層	12	黒褐シルト	○	○	
B	B334	10層	1	褐灰粘土	○		室町時代
		11層	2	灰粘土	○	○	
	B19	IV層	3	青灰色粘土	○	○	

以下分析方法、結果・考察は株式会社パレオ・ラボの調査報告を抜粋して掲載した。なお、層名、遺構名等一部について本書と一致させるため記述を改めている。

第3節 花粉分析

(1) 分析方法

花粉化石の抽出は、試料約2～4gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレバート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレバート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物孢子は花粉・孢子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

表IV-2 花粉化石産出一覧表

属名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
ヤシ科	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
モミ科	<i>Abies</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ツグ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-
マツ属(常緑葉用)	<i>Pinus subgen. Diploxyon</i>	7	14	14	-	-	9	2	27	-	-	-	-
マツ属(常緑葉用)	<i>Pinus (Usanensis)</i>	8	9	2	2	-	9	7	16	-	-	-	-
コノヤシ科	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
スズ属	<i>Cryptomeria</i>	2	2	4	1	-	1	1	10	-	-	-	-
イサギ科-イヌギヤク-ヒノキ科	<i>T.</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヤマモミ科	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
カマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	1	-	2	-	-	-	-	3	-	-	-	1
カシノ科	<i>Corylus</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	4	4	3	-	-	-	-	6	-	-	-	1
コナラ属アカカシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	1	2	-	-	-	8	3	44	1	-	-	2
クリ属	<i>Castanea</i>	2	-	-	-	-	1	3	6	-	-	-	-
シノノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	1	1	-	28	7	75	-	-	1	1
シノノキ-ツグヤシ科	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	1	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	3	2	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメボシ科	<i>Halimolobos</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ムクロコ属	<i>Sapindus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ブドウ科	<i>Vitis</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マダニビ属	<i>Actinidia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ科	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ツツジ科	<i>Eriocaulon</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマズミ科	<i>Viburnum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本													
ヨモギ科	<i>Scirpitaris</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	51	80	60	9	-	1	2	70	-	1	-	2
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	2	1	1	1	-	1	3	45	-	-	-	-
イボタノキ科	<i>Amaranthaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	4	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤシ科	<i>Bumel</i>	-	1	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミチヤナギ科	<i>Polypodium sect. Aricularia</i>	5	1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギダマ科-ウナギコ科	<i>Polypodium sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
他のタコ科	other <i>Polypodium</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ツバキ科	<i>Fagaceae</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	9	10	6	-	-	1	4	2	-	-	-	-
ヤブコウ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツ科	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
他のカンボク科	other <i>Ranunculaceae</i>	3	6	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アザミ科	<i>Cruciferae</i>	19	14	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハナ科	<i>Rosaceae</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモミ科	<i>Leguminosae</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキ科	<i>Urticaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	6	4	1	-	-	-	1	5	-	-	-	-
シソ科	<i>Labiatae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
オオバコ科	<i>Plantago</i>	2	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ科	<i>Arcoriaceae</i>	2	1	9	-	-	10	3	48	1	2	1	-
他のユキノ科	other <i>Tubuliflorae</i>	5	2	3	-	-	-	-	4	-	-	-	-
タンポポ科	<i>Liguliflorae</i>	1	5	7	-	-	-	-	-	-	-	-	3
シダ植物													
単細胞型孢子	<i>Holoete spore</i>	2	1	3	-	-	1	16	1	12	1	-	1
三細胞型孢子	<i>Triolet spore</i>	11	12	21	1	1	20	2	19	-	1	-	2
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	38	38	32	3	0	51	23	216	1	0	1	8
草本花粉	<i>Herbaceous pollen</i>	119	88	134	10	9	15	13	208	0	2	2	6
シダ植物孢子	<i>Spores</i>	13	13	26	1	3	42	3	31	1	1	1	5
花粉・孢子総数	<i>Total Pollen & Spores</i>	169	149	212	16	12	108	29	457	2	3	4	16
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	4	6	11	3	1	17	6	12	3	2	3	4

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを指す

(2) 分析結果と考察

[古墳時代中期試料(C1002(流路)-I, II, IV, VI層)の古植生および古環境]

産出した花粉化石は非常に少なく、古植生の推定はできなかった。樹木では、落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シノノキ属、草本ではイネ科、ヨモギ属、タンポポ科が当時の植物相であったと言うに止めざるを得ない。なお、花粉化石は水成堆積物であれば良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石が保存されていないことから、少なくとも安定したC1002は、常時水が溜まっているような流路では

なく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境が示唆される。

[平安時代～鎌倉時代試料(G区壁-第G10, 12, 14, 16層)の古植生および古環境]

16層の花粉組成から、シイノキ属、アカガシ亜属を主体にヤマモモ属などが混じる照葉樹林が優勢であったと推定される。また、針葉樹としては、マツ属複雑維管束亜属をはじめ、スギ属が主要素であり、一部二次林化が進行していたのであろう。16層の堆積期は、イネ科、カヤツリグサ科を主体に、抽水植物のオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などが混じる水位の低い湿地ないし水溜りが存在していたと推定される。これら抽水植物はいわゆる水田雑草であり、水田が存在していた可能性もあるが、それにしてはイネ科の出現率がやや低いように思われる。栽培状況については、12層からソバ属が産出しており、ソバの栽培地の存在が予想される。なお、16層以外の土層は、花粉化石の保存状況が良好ではなく、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものではないだろう。

[室町時代試料(B334(溜枒)10, 11層およびB19-IV層)の古植生および古環境]

室町時代試料の樹木花粉数は豊富とは言えないので、組成が幾分歪んでいる可能性がある。しかし、マツ属複雑維管束亜属が多産する傾向があり、平安時代～室町時代のG2区-16層で多産していたシイノキ属、アカガシ亜属が極めて少ないという特徴が見られる。このことから、照葉樹林が大幅に縮小し、マツ属複雑維管束亜属から成る二次林が更に進行した可能性が考えられる。主要素は、スギ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属であり、アカメガシワ属、蔓性のブドウ属、マタタビ属なども二次林や林縁の要素として混じっていたであろう。B334やB19の周囲には、ギシギシ属、ミチヤナギ節、アカザ科-ヒユ科、オオバコ属、ヨモギ属、タンポポ重科などが繁茂する路傍ないし畑地のような環境が存在していたと推定される。多産するイネ科は、属まで絞り込むことは困難であるが、明らかな水湿地性草本は産出せず、乾き気味の場所に生育する分類群が目立つことから、ススキ・シバなどの草地優占種を含む可能性が多分に考えられる。栽培状況については、ソバ属の産出から(B334-10層)ソバの栽培地の存在が推定され、有用植物を多く含むアブラナ科もナタネなどが栽培されていた可能性がある。

第4節 建蔵分析

(1)分析方法

- 1 試料を湿潤重量で約1g程度取り出し、秤量した後にトルーパーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- 2 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。
- 3 ピーカーに残った残渣は遠心管に回収した。
- 4 マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥し

表IV-3 補見遺跡堆積物中の珪藻化石産出表(種群は安藤(1990)に基づく)

分 類 群	種群	G2区					C2区					B区				
		第7層	第10層	第12層	第14層	第16層	第8層	第10層	第12層	第14層	第16層	第7層	第10層	第12層	第14層	第16層
<i>Achnanthes hungarica</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10				
<i>Amphora montana</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>A. ovalis</i> var. <i>libyca</i>	W	-	-	-	-	4	-	1	-	-	-	-				
<i>Bacillaria paradoxa</i>	W	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-				
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	-	-	-	3	-	9	-	-	-	-				
<i>C. silicula</i>	W	-	-	-	-	11	-	1	-	-	-	-				
<i>C. tenuis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>C. spp.</i>	?	-	-	-	-	5	-	7	1	-	-	-				
<i>Cocconeis placentula</i>	W	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-				
<i>Cymbella aspera</i>	O	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-				
<i>C. nimta</i>	W	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-				
<i>C. naviculiformis</i>	W	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-				
<i>C. tumida</i>	W	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-				
<i>C. spp.</i>	?	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-				
<i>Diploneis finnica</i>	Y	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-				
<i>D. ovalis</i>	Y	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-				
<i>D. yutubensis</i>	Y	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-				
<i>D. spp.</i>	?	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-				
<i>Epithemia targida</i>	Y	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2				
<i>Eunotia pectinalis</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-				
<i>Frustulia vulgaris</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>G. angur</i>	W	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-				
<i>G. clevei</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>G. gracile</i>	O	-	-	-	-	1	-	16	13	-	-	-				
<i>G. parvulum</i>	W	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	1				
<i>G. pseudosagur</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6				
<i>G. spp.</i>	?	-	-	-	-	9	-	4	10	-	-	-				
<i>Gyrusigma</i> spp.	?	-	-	-	-	20	-	-	-	-	-	3				
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	-	-	-	-	4	-	81	18	-	-	-				
<i>Helosira ambigua</i>	W	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-				
<i>Navicula confervacea</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5				
<i>N. cryptocephala</i>	W	-	-	-	-	3	-	6	4	-	-	-				
<i>N. cuspidata</i>	W	-	-	-	-	3	-	5	4	-	-	-				
<i>N. eigeiensis</i>	O	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-				
<i>N. mutica</i>	Q	-	-	-	-	-	-	2	5	-	-	-				
<i>Navicula populi</i>	W	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-				
<i>N. tokyoensis</i>	Y	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-				
<i>N. viridula</i>	Y	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	5	-	2	-	-				
<i>Heidium tridita</i>	O	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-				
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	10	1	1	1	-				
<i>Hantzschia amphibia</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-				
<i>H. palea</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4				
<i>H. paleacea</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
<i>H. tryblionella</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>H. umbonata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3				
<i>H. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	9	-	-	-	7				
<i>Pinnularia scrosphearia</i>	O	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-				
<i>P. borealis</i>	Q	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2				
<i>P. gibba</i>	O	-	-	-	-	-	-	1	-	24	93	-				
<i>P. interrupta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>P. microtauron</i>	W	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	6				
<i>P. subcapitata</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1				
<i>P. viridis</i>	O	-	-	-	-	-	-	21	-	6	-	-				
<i>P. spp.</i>	?	1	-	2	-	5	1	4	7	-	-	-				
<i>Rhopalodia gibba</i>	Y	-	-	-	-	3	-	3	-	-	-	-				
<i>R. gibberula</i>	Y	-	-	-	-	7	-	-	1	1	-	-				
<i>Stauroneis acuta</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	2	1	-	-				
<i>S. phoenicentaron</i>	O	-	-	-	-	-	-	15	-	-	-	-				
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	1				
<i>Sarirella angusta</i>	W	-	-	-	-	-	-	3	-	4	-	-				
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	3	-	4	-	-				
<i>Synedra elia</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
<i>Unknown</i>	?	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1				
湖沼沼沢地 (N)		-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-				
湖沼沼沢地付着生 (O)		-	-	-	-	52	-	-	-	-	-	51				
陸 域 (Q)		-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	85				
広 布 種 (W)		-	-	-	-	70	2	51	44	-	-	-				
不 明 (?)		1	-	2	-	79	3	31	27	-	-	-				
注 藻 般 数		1	0	2	0	207	5	218	208	-	-	-				

た。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

- 5 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

(2) 分析結果と考察

楠見遺跡より採取した堆積物試料を用いて珪藻分析を行った結果について考察する。

G2区西壁からは珪藻化石が非常に希薄で、第G16層をのぞいては珪藻化石を検出することがほとんどできなかった。第G16層における堆積環境は、湿地もしくは沼沢地環境と推定された。それ以降では珪藻化石を十分には検出できなかった。珪藻は水生植物であるため、水分のない所には生育できない。第14層より上位で珪藻化石が検出されなかった理由として、乾燥した陸域環境であったことが考えられる。また同試料を用いておこなった花粉分析においても第16層以外では花粉の保存状態が悪いことが確認されている。花粉は水分のある環境下では良好に保存されるものの、乾燥した環境下では保存されにくい。このことを考慮すると第14層以降は乾燥した陸域環境であったと考えられる。

C2区のSD1002からも珪藻化石はあまり検出されなかった。同じ試料を用いて行われた花粉分析においても花粉化石はほとんど検出されず、水の存在する環境下ではなかったと考えられる。SD1002は自然流路と考えられているが、今回の分析から水は流れていなかったと考えられる。

B区のB334溜樹11層の堆積環境はジメジメとした陸域環境と推定され、常時水に浸っている環境下ではないと考えられる。

B区のB19井戸内IV層の堆積環境は湿地もしくは沼沢地環境と推定された。また、本試料からは好酸性種が高い割合で検出されている。地下水は一般的にやや酸性であることから矛盾はない。

第V章 総括

中世墓（屋敷墓）について

鎌倉時代の土坑墓A39, 218, B348の3基を検出した。埋葬姿勢についてみると、いずれも膝を折り曲げた状態で出土しており、副葬品についてはB348は遺存状況が悪かったためはつきりしないが、A39は瓦器碗1点、土師器皿4点、鉄鎌1点、A218も瓦器碗1点が頭部付近に副葬されていた。また、立地についても単独又は2基程度で群集はせず、掘立柱建物は復元できなかったもののピット群の分布状況から居住地に隣接して造られていると思われる。

このような埋葬状況は、県内に見られる中世前期の屋敷墓と概ね同じ範疇でとらえることができるが、B348の埋葬方法は編み物状の敷物、南端部に別空間を有する点で特異である。調査担当者は埋葬方法について、人骨は火を被けていないこと、編み物は焼失しているとの観察結果から、繊維質の編み物を土坑底面に敷いた後、編み物をいったん土坑内で焼き、その後遺体を埋葬した土坑墓と考えている。

現地での観察状況は以上のとおりであるが、南端部の別空間をどのように考えるかが問題となってくる。ここで仮に木棺墓と考えた場合、南端部の土の盛り上がり部を木棺の小口部分、南端部の編み物を木棺上に置かれたものと見ることができるが、この場合は南端部の盛り上がった土を盛土とし、編み物を焼失ではなく経年による炭化と見なければならない。また、編み物に対し木質が全く残っていないことにも疑問点が残る。いずれにしても類例等を参考にしながら編み物や南端部の空間等特異な事象を明らかにした上で判断しなければならない。

「て」の字状口縁土師器皿について

今回の調査で出土遺物に見られる特徴の1つは「て」の字状口縁土師器皿の出土が目立つ点である。土師器皿の数量を比較する場合、各個体で時期判別することは難しいため、遺構出土遺物を対象にして口縁部破片数をカウントした。なお、登録番号ごとに同一個体の破片は1点としてカウントしたが明らかな場合を除き別登録番号遺物との同一個体認識はしていない。遺構は平安時代後期を対象としているが、微量の瓦器を含むC220落ち込みA層も対象とした。

表V-1 「て」の字状口縁土師器皿出土比率（平安時代後期の遺構）

	「て」の字状口縁 径10cm前後	その他口縁				金資料数	「て」の字状口縁数 *100/(金量-大皿) (%)	「て」の字状口縁数 *100/(金量-大皿) (%)
		大(径14cm 以上)	小(径10~ 11cm前後)	不明	糸切り ヘラ切り産			
C220(A層) (B層)	9	3	0	4	1	17	53	64
C64	5	1	1	3		10	50	58
G1003				1		1	0	0
G1013,1014	10	2	3	3	1	19	53	59
O47	1			2	3	3	33	33
C51-2	6	4	1	7		18	33	43
C48	1	1				2	50	100
C247		3	3	5		11	0	0
C258	1					1	100	100
C251		3	1			4	0	0
G12	3	1	2	1		7	43	50
C237	1	1	1			3	33	50
合計	37	19	12	27	2	97	38	47

表V-1に示すように出土数10点以上のC220落ち込みA, B層, C1013, 1014溝を見ると、全皿数に占める割合はいずれも50%以上を、径の異なる大皿を除いた場合の割合は60%近くを占める。C51-2落ち込みではやや割合が下がるがそれでも30～40%前後を占めている。全体で見てもそれぞれ約40%、50%と非常に高い比率を示す。C247井戸については全く含まれていないが、端部を内側に丸めないものの外反部は類似した形状をなすものは存在する。なお、「て」の字状口縁の場合、形状的に強度が高く口縁部が残りやすい可能性と今回細片のカウントが多い点は注意して取り扱う必要がある。

次にこれら資料の時期についてであるが、全遺構とも「多段ナデ技法」が省略化されつつある時期付近に位置づけることができるが、少し細かく見ると、C1013, C1014溝では省略化が進み口縁部付近をナデのみの資料が目立つ。C220落ち込みでは口縁部付近をナデのものも見られるが明瞭な2段ナデの資料も多く存在する。C51-2落ち込みは資料が少ないが、218の黒色土器A類を見ると明瞭な稜線は持たないものの外面2段ナデで内外面とも比較的密に磨く。C247は上層で確認できる資料はないが、中層には2段ナデの明瞭なものが多数を占める。一括資料でないので即断はできないがC1013, 1014に比べC51-2, C247は若干古い遺物を含むようである。

この時期の遺物が出土する県内の遺跡はそれほど多くないが、出土量の多い和歌山市鳴神地区遺跡、秋月遺跡、有田川町野田地区遺跡、田辺市稲成遺跡の報告書を見る限り「て」の字状口縁皿はなく、その他でも散発的な出土がほとんどである。ただし、まとまった出土量ではないが紀の川市粉河寺遺跡では一定量含まれているようである。一方瓦器の出現直後の資料を見ると、和歌山市西田井遺跡、海南市岡村遺跡等から出土している。岡村遺跡での出土比率は不明だが西田井遺跡では非常に高い比率で「て」の字状口縁皿が出土する。当遺跡出土品に比べると同様の形態も存在するがやや屈曲が緩く退行した印象を受けるものが目立つ。西田井遺跡では瓦器出現前の資料には「て」の字皿は含まれていないが、当遺跡よりやや古い様相を示すようである。今回対象としたC区出土遺物はこれより後、瓦器出現直前に位置づけることができる。

このように同時期の資料である鳴神、秋月、野田地区、稲成遺跡資料と比べれば特異な様相を示すと言えるが、西田井、粉河寺遺跡と比べれば同様の状況を示す可能性は十分あり、わずかな時期差によるものか遺跡あるいは地域差によるものか資料の増加を待って判断しなければならない。特に地域差については、紀中・紀南地域の資料を比較材料としてよいかの検討を要する。出土量が少ない中での結論であることは十分考慮しなければならないが、C区の他遺構やG区の出土状況を併せて見ると、少なくとも桶見遺跡では瓦器出現直前から「て」の字皿の使用が始まっていたと思われる。ただし、「て」の字皿の使用開始は、C247やC51-2の少量のデータや西田井遺跡の平安時代後期資料をもとに考えれば瓦器出現前とはいえそれほど遅らない可能性がある。

この時期頃からこの辺りに平井津が存在したことが文献で確認でき、京都系の土師器ともいえる「て」の字状口縁皿が多く出土する現象はこのことと無関係ではないかもしれない。

昭和44年調査結果との関係（図V-3参照）

C、D区の古墳時代に関連する遺構や流路を再度確認しておく、C1区北西隅のC238土坑とC2区の南東方向に流れる自然流路そしてD区南西の落ち込みのみである。なお、D区の落ち込みは第Ⅲ章でC1002の左岸肩部の可能性を考えた。このうち昭和44年調査地点に関係があるものはC1002自然流路である。そのまま延長すればN1トレンチ付近を流れると推定される。

上記の推定をもとに土層について見ると、A～Hトレンチはベースとされる黄色土層の上に初期須恵器を大量に含む黒色土が堆積している。C2区南壁・D区南壁土層との対応関係を見ると、黄色土層＝黄色粘質シルト（第8a層）、黒色土＝黒褐色粘質シルト（C1002埋土上層）又は第7層と考えられる。

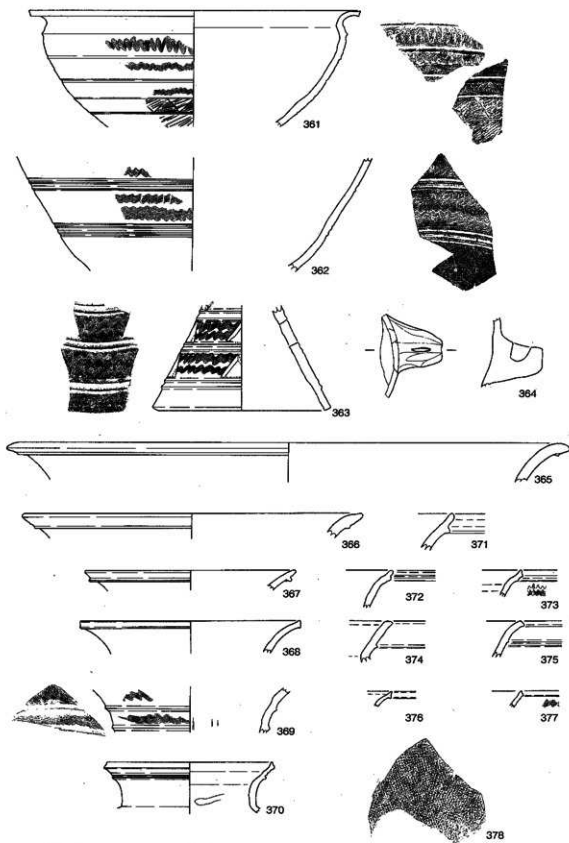
N2トレンチは明黄灰色粘土層の上に灰色礫混じり層、黒色礫混じり層、黒褐色粘質土層が堆積し、これより上は中世以降の遺物包含層となる。D区南壁土層と比較すると明黄灰色粘土層＝第8aor8b層、黒色礫混じり層＝DA層、黒褐色粘質土層＝第7or7a、b層に対応すると思われる。灰色礫混じり層については、東へ徐々に落ち込みがきつくなり始める地点のため固有の堆積土、あるいはC2区第8b層上面で検出したC1021自然流路の堆積土である可能性も十分考えられる。

このようにA～Hトレンチ、N2トレンチは、推測の域をでないものの概ね今回の調査地点と土層を関連付けることができるのに対し、N1トレンチは灰色角礫層の上に黒色粘土、灰色粘土、褐色土混じり灰色粘土、灰色小礫、黄色粘土、黄色混じり灰色粘土、灰色粘土、黄灰色粘土が堆積しており、A～H、N2トレンチ、C、D区いずれの土層とも異なる状況を示している。第7層の堆積が確認できないのは理解しづらいが、他区に比べ堆積層が多く各層とも薄い堆積を示すことから河川堆積土の可能性が考えられる。別流路等他の要因も当然考えられるが、配置から見てC1002の自然流路内とする方が自然である。

以上と今回の調査結果を合わせて考えると、C1002自然流路を境に南西側ではS44調査区やC220落ち込みなどで多くの初期須恵器が出土するのに対し北東側では極端に遺物量が少なく生活の痕跡はほとんど見られない状況が想像される。

初期須恵器について（図V-1、2、図版32～35）

今回の調査では遺構の時期を示す位置から出土した古墳時代の須恵器はC238土坑とC1002自然流路のみであったが、古代・中世の遺物包含層や遺構から少量の初期須恵器が出土したためここでまとめて報告する。なお、残り10%程度の小片から径を復元している場合も多く、実測図にはある程度の誤差を含んでいると思われる。残存率については遺物観察表や写真図版で確認できる。



361 : A区第6層, 362・372・375 : B区第5層, 363・365・368・376 : C220
 364 : C273, 366 : C48, 367 : C1031?, 369 : B15, 370 : C区第5層
 371 : A7, 373 : C区第6層, 374 : B区第6層, 377 : C183, C192, C196

0 10cm
 (S=1/4)

図V-1 出土須恵器実測図

361～363は器台である。361は大きく外反する口縁と端部にシャープな面を持つ点が特徴的で、杯部下半にはヘラ描きの鋸歯文を施す。やや雑な印象を受ける。残存部最下段のヘラ描きは鋸歯文と断定できないが、鋸歯文としてもその上とはピッチが異なる。文様帯の区画は最上段は突線であるが、下に下がるにつれ凹線状となり、最下段はヘラ描き沈線である。362の杯部はやや浅めになるかもしれない。文様帯の区画は一部低い突線によるがほとんどが凹線である。杯部下半にはカキ目を施す。363は直線的にひろがる脚部で三角形透かし穴を3段以上6列（残存部から推定）配置する。裾部の形状から筒形器台の可能性もある。399は小片であるが傾きや形状から蓋または筒形器台の裾から筒部への屈曲部に相当する可能性がある。ただし、蓋とするとやや径が大きすぎるようである。屈曲部には鋭い突帯2条以上が、ほぼ平坦な面には簾状文が施される。外面には淡緑灰色の釉がかかる。

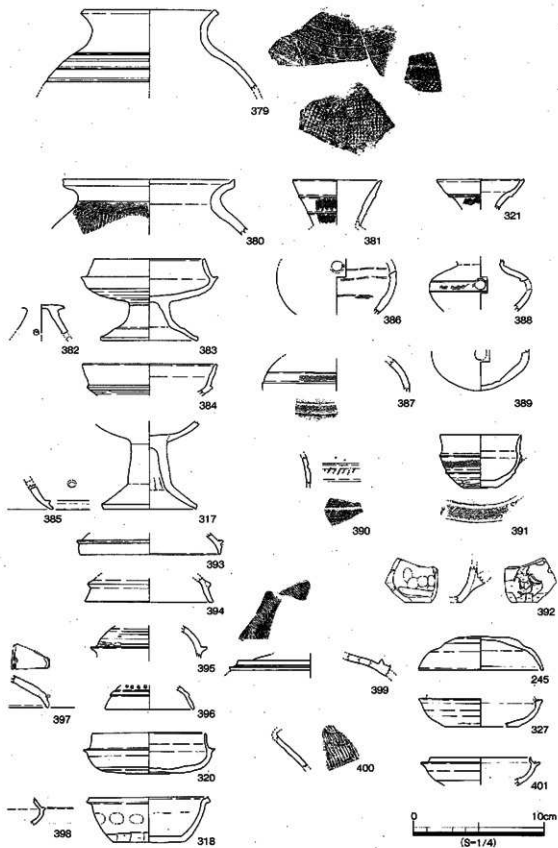
365～380, 400は甕又は壺である。端部を丸く収め、端部外面やや下に突帯を持つタイプ、端部に面を作り外面に低い突帯を持つタイプ、端部に面を作るが突帯のないタイプがある。368については平安時代まで下るかもしれない。379は体部下半を接合することができなかったが、体部上半に細かい縄縵、下半に格子タタキ痕がつけられ、縄縵文の上から螺旋状？に磨り消している。380は体部上半に粗い縄縵タタキが施されている。400は褐色で薄いつくりの体部上半片であるが、縦方向の平行タタキを螺旋状？に磨り消す。378は格子タタキのある甕の体部であるが焼け歪み、須恵器の融着が見られる。

317, 382～385は高杯である。383は短脚であるが裾部に低い突帯（段に近い）が付き、317は脚柱部と裾部の境界が明瞭で稜をなし部分的に段が付く。384は無蓋の高杯としたが蓋になる可能性もある。382, 385は円形透かしがある。

386～389はハソウである。386, 389は体部下半に砂粒の動きが見えるが静止ヘラケズリにしては単位がはっきりしない。388は当たりが浅くはっきりしないが波状文を2段つける。390は小片のためはっきりしないがハソウ体部の一部となる可能性がある。391, 392はコップである。両者とも底部を静止ヘラケズリするが、392の方が直線的に立ち上がる。391は長く直線的に立ち上がる口縁、丸みを帯びた体部で口縁径に比べ底部径が小さい。

393～397は蓋である。393, 395は細く大きく突出した明瞭な突帯をもつ。395は突帯より上を幅4～5mm程の狭い単位でナデ、稜縁が明瞭である。部分的に静止ヘラケズリが見られる。396は小形で突帯は低く傾斜も緩い。突帯上方に刺突文を施す。397は突帯を欠損するが天井部近くに波状文が施されている。調整は回転ヨコナデと思われるが単位は1～2mm幅と細かい。

320, 398は杯身で立ち上がりは長く、受け部はシャープで水平に伸びる。体部は受け部より外へ膨らむことはない。318は口縁を短く外反させ端部にシャープな面をつくる杯である。体部外面下半は静止ヘラケズリ、中央付近はユビオサエで凹凸が激しい。それ以外は回転ヨコナデ調整で仕上げる。体部に火捺のような痕がつく。



379: C219·269, 380: C44, 381·394·399: A区包舍層, 382·384·385·390·395: B区溝6層, 383: C272
 386·389·397: C220, 387: B区溝5層, 388: D区溝6層, 391: B583, 392: C183, 393: C区包舍層, 396: C区側溝
 398: C47, 400: F区包舍層, 401: C183

图V-2 出土須恵器実測図

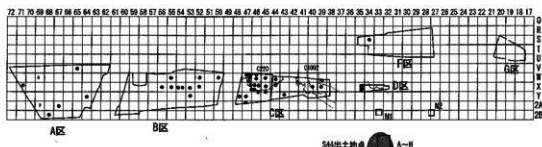
時期については一括遺物でないことと初期須恵器であるため個々について比定することは困難であるが陶器出土遺物を参考（参考文献23）にすれば、245, 327, 401を除いて概ねⅠ-3段階までに収まる資料といえる。ただしこの範囲内においてもかなりばらつきがあるような印象がある。壺、甕については小片が多いが、端部を丸くおさめる口縁の甕はⅠ-1～2段階である。縄漣タタキ+螺旋状磨り消しの379は日本には類例が少なく時期を推定することは難しい。高杯については長脚で透かし穴のない317はON231窯に類例がありⅠ-1段階に収まると思われる。383は短脚で新しい要素を示すが裾部に低い突帯を持つ。コップは392に比べ391は丸みを持ち口縁が長い点で新しくⅠ-3段階くらいであろうか。蓋の393, 395は突帯が明瞭な点に古い要素をもちⅠ-1段階に属する。396については突帯は低く滑らかであるが刺突文様が、397には波状文が施されている。蓋についてはすべてⅠ-1段階におさまる資料である。杯身は320, 398とも新しくⅠ-3段階前後である。318は珍しい器形で判断に迷うが、径は異なるものの大庭寺遺跡から器形に加え底部ヘラケズリや指頭痕跡などの調整も類似した須恵器が出土している。Ⅰ-1段階に属する可能性が高い。

次に胎土、焼成について見ると、数種類に分けることができる。

- ①胎土粗く1mm程度の長石目立つ〔焼成：断面赤灰色で硬質（371, 397）、断面青灰気味で硬質（373, 380, 386, 392）、灰白色でやや軟質（362, 365～367, 393, 399）〕
- ②胎土比較の密、黒色粒多く含む〔焼成：断面青灰気味で硬質（383, 385）、断面青灰気味・表面黒色で硬質（374, 384）、灰色でやや軟質（317, 364, 379, 381）〕
- ③胎土密〔焼成：断面赤灰色で硬質（369, 378, 387, 396）、断面薄赤灰又は外灰・内赤灰のサンドイッチ構造で硬質（320, 382, 388, 390, 391）、断面青灰気味で硬質（377, 394, 395）、断面青灰～極薄赤灰・表面黒色で硬質（361, 363, 372, 375）、灰色でやや軟質（318）〕

胎土、焼成と時期・器種については特に関連は見当たらない。あえて言えば胎土の粗いものに大形品が多い傾向にあるかもしれない。少なくとも多様な焼き具合、胎土の須恵器が混在している状況が確認できる。

次に出土地点について見ると、ほとんど遺構からの出土ではないので意味は半減するが、C1002自然流路左岸が3点、流路内あるいは上で4点、右岸C220落ち込みを中心とする地点に21



図V-3 初期須恵器出土位置

点、B区中央付近に9点、B区北東端に1点、A区全体に散在して7点出土している。上層出土遺物も含む特徴的な分布を示している。第1はC1002左岸（東側）からはほとんど出土がなく右岸（西側）に集中する点、第2は流路内あるいは流路上にはほとんどなくC220付近、B地区中央付近に分布の中心がある点である。なお、以上は掲載遺物についてのみの分析であり、壺体部片など他にも実測不能な破片は存在するが、全量実見した印象では上記の傾向から大きくは外れない。

第1点については左岸側はすぐに落ち込むためか古墳時代にはほとんど利用されていないことが推測される。第2点については流路の機能時に取ってC220付近に集中して集められていた（廃棄も含めた）可能性がある。仮に流路埋没後の自然堆積時に紛れ込んだのであれば流路上にもあった落ち込み部にC220と同等の分布があってもおかしくない。B地区中央付近についても当時の遺物集中を示す可能性はあるがはっきりしない。C238土坑（C220内）出土土器と接合する遺物が存在する。C220周辺と昭和44年調査時とは出土量に大きな差があるが類似した出土状況といえるかもしれない。C220については北側調査区外へ伸びるためより多くの初期須恵器が集中していた可能性は十分ある。

このほか須恵器窯体片と思われるものが4点出土している。スサが入り、表面に濃緑色、黄緑色の釉が付着するものがある。釉は1面だけでなく何箇所にも付着するものが1点あり、窯体から落下したかあるいは焼台等として使われていたものかもしれない。ただし、少量ながら245、401など古墳時代後期以降の須恵器の出土もあるためこれらの窯体片が初期須恵器に関係するものかどうかは断定できない。しかし、378の焼け盃や近隣の鳴滝遺跡での焼け盃のある窯の状況から当地付近での初期須恵器生産の可能性が考えられる。

土壌分析結果について

ここで今回実施した土壌分析について簡単にまとめておきたい。

古墳時代中期についてはC1002自然流路の埋土を花粉分析4点、珪藻分析1点を実施したが花粉、珪藻化石ともに非常に少なく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境で常時滞水状態ではなかったとされている。発掘調査におけるC1002の検出状況を見てみると、平面形態では大きく蛇行し断面形もなだらかで自然流路と考えるのが妥当である。土層地積状況については、最下層X'層が粗砂礫を含む暗灰黄色シルト、その上にVI層：黒褐色シルト、IV層：暗灰黄～灰黄色中砂、II層：褐灰色シルト、I層：褐灰・黒褐色シルトの自然堆積で中砂や3mm以内の砂礫を含む層が介在することから緩やかな流水の時期があり、その間にシルト質の堆積が示すような流水のない時期があったと考えられる。このシルトは黒灰色系で完全な還元状態ではないが十分な酸化もされていないある程度水分を含んだ状態で堆積と観察できる。

これらの分析結果と調査結果両者を考えた場合、砂層では流水があったが花粉・珪藻化石とも流出し、シルト層では予想以上に乾燥した時期があったため酸分解した可能性がある。砂層

でも花粉化石については残存する可能性があるため分析対象としたが、いずれにしても周辺環境の復元に有効な結果を得ることができなかった。

平安時代～室町時代を対象にしたG区壁資料についても、第G16層（平安時代）を除いて花粉・珪藻化石ともほとんど検出されなかった。灰色系のシルトを対象としたが上記と同様予想以上に乾燥していたため残存しなかった可能性がある。

平安時代と室町時代についてはやや距離は離れるがG区壁第G16層（平安時代）とB334溜枡、B19土坑（室町時代）で良好な結果を得ることができた。平安時代はシノキ属、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が優勢であったのに対し、室町時代になると草木が増加し、樹木では少量の検出であるが照葉樹林よりマツ属複雑管束亜属など針葉樹からなる二次林の比率が高くなる。B区とG区の距離の影響を考慮しなければならないが、このことは平安時代末から鎌倉時代に開発に伴い照葉樹からなる森林植生が急激に破壊され平坦地に草木が増加した可能性を示している。

遺跡の変遷について

第2章では各地区ごとに各時代の遺構について記述したが、最後に調査区全体で各時期の遺構変遷を概観してみたい。

縄文時代についてはB、C区で土坑、ピット、落ち込み、自然流路を検出したが確実に人為的に掘削された遺構は確認できなかった。

縄文時代晩期～弥生時代になると標高の高く地盤の安定しているA区とF区に土坑やピットが造られB区には自然流路が流れる。またC区には堅穴住居跡の可能性もあるC1031方形土坑が造られるが確証はない。A、B、F区では遺構面の直上が鎌倉時代末の堆積層であることから削平により遺構が消失した可能性はあるが遺物の出土量から考えてもそれほど密度は高くなかったと考えられる。時期については前期までの資料のみでそれ以降の遺物は確認できていない。

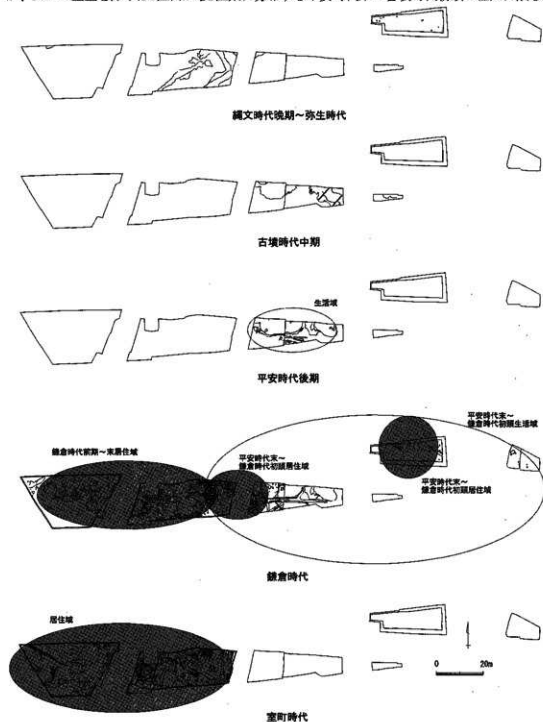
古墳時代になっても前期に属する遺構、遺物は見られない。古墳時代中期になるとC～D区にかけて自然流路と土坑があり一定量の初期須恵器が出土するが弥生時代と同様な分布ではなさそうで、生活の痕跡ははっきりしない。また縄文から古墳時代までは少なくともG区付近で急激に落ち込み谷状地形になっていたと考えられる。

このあと平安時代まで遺構・遺物とも検出されない空白期間となる。平安時代後期になるとC区に多数の自然流路ができ井戸、水溜、土坑などが造られ遺物量も多くなる。しかし古墳時代を含めてややレベルが低く自然河川が流れるようなC区に遺構・遺物が多く、地盤の安定しているA、B区には確認できない。この時期になるとG区付近の谷部も急速に堆積が進みC区付近と同レベルとなる。

平安時代末～鎌倉時代になるとC区西からA、B区にかけて掘立柱建物、屋敷墓（土墳墓）、土坑などが造られ急激に遺構密度が高まり、居住域として利用されるようになる。C区は西端を

除き前時代と変わらず流路が形成されるような低地で水溜や土坑以外は検出されない。

遺構・遺物の分布から細かく見ると、平安時代末～鎌倉時代初頭頃にC区西端からB区東端部にかけてとF区が居住域となり、その後鎌倉時代前期以降にはA、B区に居住域の中心を移す。この時期の特徴として柱抜き取り後に瓦器碗や土師器皿が据えられた柱穴をあげることができるが、B687の土釜を除けばC区西からB区東に分布する平安時代末～古墳時代初頭の柱穴に限られ



図V-4 楠見遺跡変遷図

るようである。

室町時代に入ってもA、B区は変わらず居住域として利用されている。この時期になると井戸や水溜は前時代までのC区やG区のような流路近くではなく建物付近のB区に造られている。

以上のような平安時代～室町時代への変遷は、平安時代以降照葉樹林が減少し草木が増加するという土壌分析結果を開発に伴う森林破壊とする解釈に一致する。また、平安時代から鎌倉時代にかけて少なくともC区では連続して遺構が造られることから隣接するA、B区で大規模な削平により遺構が失われた可能性は少なく、平安時代末になってC区西端から西へ向かいA区まで順に開発が行われたと考えるほうが自然である。この後、江戸時代になると耕作地として利用されるようになる。

このように今回の調査では、当初予想していた古墳時代中期の遺構・遺物はほとんど発見されなかったが、中世集落の存在を確認できたことは大きな成果であった。

参考文献

1. 荻田香融他1971『補見遺跡の調査』『和歌山市における古墳文化―熊山、紀綱寺谷古墳群・補見遺跡調査報告―』和歌山市教育委員会
2. 藤森勝則2002『補見遺跡発掘調査』『和歌山市内遺跡発掘調査概報』和歌山市教育委員会
3. 栗岡実2000『備前桃畑の稲年について』『第3回中近世備前桃研究会資料』中近世備前桃研究会
4. 中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』
5. 錦所俊夫1995『大阪府南部の瓦質土器生産(1)』『日置狂遺跡』大阪府教育委員会
6. 川口修実2002『和歌山県における中世前期の墳墓』『紀伊考古学研究第5号』紀伊考古学研究会
7. 北野隆亮2006『和歌山平野における瓦器の分類と変遷―紀伊型瓦器碗の認識とその評価―』『紀伊考古学研究第8号』紀伊考古学研究会
8. 全国シンポジウム「中世窯業の諸相―生産技術の展開と稲年」実行委員会編2005『全国シンポジウム 中世窯業の諸相―生産技術の展開と稲年発表要旨集・資料集』
9. 森田勉1982『14～16世紀の白磁の分類と稲年』『貿易陶磁研究NO. 2』日本貿易陶磁研究会
10. 上田秀夫1982『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究NO. 2』日本貿易陶磁研究会
11. 武内雅人1986『和歌山県における9～11世紀の土器―紀伊にみられる律令的土器様式の終焉と中世的土器様式の成立―』『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
12. 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の稲年』
13. 武内雅人他1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書 一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会
14. 渋谷高秀他1985『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書 海南新渡路建設に伴う関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会
15. 永光寛1990『稲成遺跡―一般国道42号(田辺バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』財団法人和歌山県

文化財センター

16. 仲原知之2002『粉河寺防災事業に係る発掘調査』『重要文化財粉河寺大門修理工事報告書』和歌山県、粉河寺
17. 土井孝之1991『西田井遺跡発掘調査報告書—一般国道24号（和歌山バイパス）建設に伴う発掘調査—』財団法人和歌山県文化財センター
18. 植田法彦1994『和歌山県海南市 海南市内遺跡発掘調査概報—平成5年度—』海南市教育委員会
19. 西口陽一編1994『野々井西遺跡・ON231号線跡近畿自動車道松原さみ線建設工事に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第86輯）大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
20. 富加見泰彦・山上雅弘編1990『須恵・大庭寺遺跡Ⅱ』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第50輯）大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
21. 藤田憲司他1995『須恵・大庭寺遺跡Ⅳ』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯）大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
22. 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
23. 中村浩2001『和泉陶器出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
24. 和歌山市史編纂委員会1991『和歌山市史』和歌山市

付表 1 遺構検出状況一覧表

[illegible]

遺構名	調査 区画	地区名	層 位	遺 物	遺構層上	調査開始位置	遺構上層を うしなう	切り出し	遺構時期	本来の出土層	備 考
9355溝	日区	250, 791- 52	埋土中	縄文or弥生土器、漆器	固有埋土	第3a層上層	第4層	8344(10秒 間)、40秒 土器等に 見られる	縄文時代終 期～弥生 土器時代 前期	第2遺構面 (第3a層上層)	埋土は上層ピット
9356土坑	日区	905	埋土中	土師器 1	?	第3a層上層	第5層	91 (4層竹)に 見られる	縄文時代 前期	第2遺構面 (第3a層上層)	
		905-56 135-56	上 0- 20cm	陶器、瓦器、土師器、土師器、漆 器、漆器、漆器 (3つすかし)							
		905-56 135-56	下 -20- -40cm	瓦器土師器、漆、陶器、瓦器 1、土 師器、粘土地、漆器							
		905-906 1	上層	瓦器土師器、瓦器、土師器							東部ベルト
		905-906 6	層	瓦器、土師器、漆器							
		905-906 V、後層		瓦器、土師器							
9380溝ち込み	日区	957, 796- 57	埋土中	瓦器、土師器、土師器、土師器、 土師器(4層竹)、土師器、漆器、 漆器、漆器、サマカイト片	第4層	第3a層上層	第5層	5.6層土 器等に 見られる	縄文～弥生 時代初期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9427柱穴(埋 入)	日区	950	埋土中	瓦器、土師器	第4層	第3a層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9428ピット	日区	950	埋土中	瓦器、土師器	第4層	第3a層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9436柱穴(埋 入)	日区	951	埋土中	瓦器	第4層	第3a層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9457ピット	日区	758	埋土中	土師器	第4層	第3a層上層	第5層		縄文～弥生 時代初期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9727ピット	日区	951	埋土中	瓦器 1、土師器 2	第4層	第3a層上層	第5層	9725 (4.8 層) を含む	平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9743柱穴(埋 入)	日区	951	埋土中	白磁	第4層	第3a層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9744柱穴(埋 入)	日区	950	埋土中	瓦器 1、瓦器、土師器	第4層	第3a層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
9791土坑	日区	790-2450	埋土中	縄文 7	固有埋土	第3a層上層	第3a層		縄文時代	第3遺構面 (第3a層上層)	
伝書層	日区	第3層		瓦器、土師器、漆器、漆(6層竹へ 着く)、土器、白磁、青磁、瓦器、瓦 器、漆器、漆器、漆器、漆器	-	-	-	-	-	-	
伝書層	日区	第3層		瓦器、土師器、漆器、漆器、漆器、 漆器、漆器、漆器、漆器、漆器	-	-	-	-	-	-	
伝書層	日区	第3層		縄文土器	-	-	-	-	-	-	
伝書層	日区	第3層		縄文土器、漆器、サマカイト	-	-	-	-	-	-	
伝書層	日区	第3層		縄文土器、サマカイト	-	-	-	-	-	-	
伝書層	日区	第3層		縄文土器、サマカイト	-	-	-	-	-	-	
伝書層	日区	第3層		瓦器、土師器、漆器、漆器、漆器、 漆器、漆器、漆器、漆器、漆器	第4層	第3a層上層	第4層?	なし	第3遺構面 (第3a層上層)		
972ピット	日区	944	埋土中	土師器、ての字磁、土師器、土師器 2	固有埋土	944埋土 上層?	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
972溝	日区	942	上	瓦器(120)、土師器、白磁片	?	第3層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
		943	下	瓦器、土師器							
		941	下	土師器、ての字磁、土師器、漆器、 漆器、漆器 (鳥子タタキ)	固有埋土	第3層上層	第5層		平安時代	第3遺構面 (第3a層上層)	
947溝	日区	943, 948, 949	埋土中	土師器片、漆器片							
948溝	日区	943, 944, 944	埋土中	土師器片	固有埋土	第3層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
		941-942, 943, 944	上	瓦器片(512'4)、土師器、ての字 磁、漆器							
		943	下	土師器片、漆器片							
950溝	日区	741-741 144, 744	埋土中	土師器、土師器、漆器	?	第3層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
		744-744	上	土師器片							
		741-43, 44, 741, 43-44	下	瓦器(512'4)、土師器、土師器							
951-2	日区	942, 741- 42	埋土中	瓦器土器、土師器、土師器、ての字 磁、土師器、漆器、漆器、漆器、漆 器、漆器	?	第3層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
951-1	日区	741-42	埋土中	瓦器、土師器、土師器、土師器、 漆器、漆器、漆器、漆器、漆器、漆 器、漆器	?	第3層上層	第5層		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	
953水溝	日区	743	埋土中	瓦器、土師器、石	固有埋土	第3a層上層	953溝埋土 上層?		平安時代末 ～鎌倉時代 前期	第3遺構面 (第3a層上層)	埋土は鎌倉時代
		743	上 0-40 cm	瓦器、土師器、漆器							
		743	下	瓦器片、土師器片、石							
		743	最下	土師器片 1							
		743	最下	土師器片、土師器、ての字磁、瓦器土 器片、漆器片							

通称名	調査年度	地底高	層位	遺物	発掘土層	調査時代抽出	遺物上層を穿る土層	切り合い	遺物時期	年代の抽出	備 考
C64溝	C2区	342、344	埋土中	土師器、土師器破、黒色土師	?	第3a層上面?	第4層?		平安時代後期 ～鎌倉前期	第3-2遺物層 (第3a層上面)	
C134土坑	C1区	345	埋土中	土師器破、ての字土、土師器破	第4層埋土	第4層上面	第5層?		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C135土坑	C1区	345	埋土中	瓦器、土師器、ての字土、土師、須恵器、鉄、灰、石 (磁瓦? 磁瓦?)	第4層埋土	第4層上面	第5層?	178、179 (4番地土) 中 8世紀時代末等の、切られる。	平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C132土坑	C1区	344?	埋土中	瓦器、土師器、土師器破、石	第4層埋土	第4層上面	第6層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C281土坑	C1区	344?	埋土中	瓦器、土師器	第4層埋土	第4層上面	第6層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C133溝	C1区	346-47	埋土中	瓦器 (内13'4")、土師器、赤きり土師器破、須恵器片	第4層上面	第5層	180に切られる		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	第3層埋土? 土師器が見えていた可層位か
C136溝	C1区	347-347'	埋土中	瓦器、土師器片、土師器片、赤きり土師器破、ての字土	第4層上面	第5層?	184に切られる		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C130土坑	C1区	346	埋土中	瓦器、土師器、瓦、須恵器片須恵器、瓦、石	第4層上面	第4層			平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C132溝	C1区	345-46-47	埋土中	瓦器、土師器、土師、土師、須恵器、須恵器?	第4層上面	第5層			平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	第3層埋土? 土師器が見えていた可層位か
C132溝内 (C28a? 47)	C1区	345	黒底面	瓦器	第4層	?	C132埋土		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C135溝	C1区	346	埋土中	瓦器、土師器、土師、赤きり土師器片	第4層上面	第5層	180に切られる		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	第3層埋土? 土師器が見えていた可層位か
C213溝も	C1区	345 345上 346	埋土中 下 下	磁手、ての字土、黒色土師、土師器破、土師器破? 石 瓦器、土師器破	4層	第4層上面	第4層	134、135に切られる	平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C213ピット	C1区	346	A層	土師器片、黒色土師片、土師器破	A層	?	第4層	211に切られる	平安時代後期 ～鎌倉時代	第3-2遺物層? (第4層上面)	
C215黒灯	C1区	345	?	土師器 (内13'4")、須恵器片 (黒手? 4層)	第7層	第4層上面	第4層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	黒土と赤土層間 ない?
C217溝?	C1区	第4層	なし		第4層	第4層上面	第4層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C218a溝	C1区	345-46	第4層	土師器片 (二口土師?)、須恵器	第4層	第4層上面	第4層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C218b溝	C1区	346	第4層	土師器片	第4層	第4層上面	第4層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C216溝	C1区	345	埋土中	瓦器、土師器、土師器破、土師器高杯、磁手、須恵器	第4層	第4層上面	第4層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C220溝も	C1区	445-46-47、345-46-47 446-47 445-46-47、346 445-46、346 446-46、346 C層	A層 B層 C層	瓦器、土師器片、黒色土師、ての字土、土師器破、土師器破、須恵器 土師器、土師器破、土師器破、黒色土師、ての字土、土師器破、須恵器、須恵器 土師器、黒色土師、土師器破、須恵器片	第4層	第4層上面	第4層		平安時代後期	第3-2遺物層 (第4層上面)	
C227pit	C1区	346	A層	土師器破、土師器片	A層	第4層上面	A層		平安時代後期	第3-2遺物層? (第4層上面)	第3-2遺物層の 可能性あり。
C235土坑	C1区	347	埋土中	土師器片、土師器破、須恵器、土師器	A層	第4層上面	C層	0279に切られる	平安時代後期	第3-2遺物層 (第4層上面)	
C247土坑	C1区	346	埋土中	土師器片、土師器破、土師器破	第4層埋土	第4層上面	A層?		平安時代後期	第3-2遺物層 (第4層上面)	
		347	上 B-20 cm	土師器破、ての字土、土師器片							
		347	中 C-20-30 cm	土師器破、土師器、瓦、土師、須恵器							
		347	下 F-50-100cm	縄文土師器							
C251土坑	C1区	346	埋土中	土師器片							
		346	埋土中	土師器片							
C251土坑	C1区	346	埋土中	土師器片、土師器破、黒、土師器片、土師器破、須恵器	A層?	第4層上面	A層		平安時代	第3-2遺物層 (第4層上面)	
C258土坑	C1区	347	埋土中	土師器、ての字土、土師器破、	第4層埋土	第4層上面	A層?		平安時代後期	第3-2遺物層 (第4層上面)	
C260土坑 (C260?)	C1区	347	埋土中	瓦器 (内13'4")、土師器破、土師器、赤きり土師器破、須恵器、白磁土、赤きり	第4層埋土	第4層上面	第4層		平安時代末 ～鎌倉時代	第3-1遺物層 (第4層上面)	
C229溝	C1区	346	埋土中	縄文-弥生土師器片	第4層埋土	第4層上面	C層?	C228に切られる	縄文時代晩期 ～弥生時代前期?	第3-2遺物層 (第4層上面)	
C1002b溝も	C2区	340、41、41.4	埋土中	土師器、高杯片、開口土、須恵器片	第4層埋土	第4層上面	第7層?		鎌倉時代	第3-2遺物層 (第4層上面)	

遺構名	調査 区画	地蔵名	層 位	遺 物	遺構成立	調査時期と位置	遺構上層を覆う土層	切り合い	遺構時期	本次の出土品	備 考
C1002溝	C 2 区	840, 120-40	遺土中	土師器片、土師器蓋の脚、灰杯、灰皿器	固有遺土	第3a層上面	第7層		古墳時代	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
		840-41, 120-40, 120-40	上	土師器片、灰蓋器片							
		120-39-40, 120-39	中	土師器、土師器蓋、灰、灰蓋器片、灰蓋器片、灰蓋器片							
		120-39-40	下	土師器片、灰蓋器片、灰蓋器片、灰蓋器片							
C1003溝	C 2 区	120-40	最下	土師器蓋片、土師器蓋口縁							
C1004本層	C 2 区	144	第1層?	土師器片、土師器蓋、黒色土師	固有遺土	第3a層上面	第6層		平安時代後期	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
C1010土坑 (21000坪)	C 2 区	842	遺土中	土師器、灰蓋器、石	?	第3a層上面	第7層		古墳時代	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
C1012溝	C 2 区		遺土中	なし	固有遺土	第3a層上面	第6層	084に切りあ	平安時代後期	第3-2遺構層 (第3a層上面)	C1012, 1014と同一
C1013溝	C 2 区	142-44	遺土中	土師器、土師器蓋、土師器蓋、白焼土、ての平皿、黒色土師	固有遺土	第3a層上面	第6層	084に切りあ	平安時代後期	第3-2遺構層 (第3a層上面)	C1002との関係?
C1014溝	C 2 区	142, 44	遺土中	土師器、ての平皿、土師器蓋、土師器蓋、ての平皿、土師器蓋、青	固有遺土	第3a層上面	第6層	084に切りあ	平安時代後期	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
		144	下	土師器、灰蓋器							
		144	最下	灰、土師器、灰杯、灰皿器							
C1021溝	C 2 区	120-40	灰砂層	縄文土器片?	固有遺土	第3a層上面	第6層		縄文時代後・晩期?	第4遺構層 (第3a層上面)	
C1031土坑	C 1 区	146	?	土師器、灰蓋器	固有遺土	第3a層上面	C層	C200に切りあ	古墳?	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
惣倉庫	D区	—	第1層	土師器、灰蓋器	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	D区	324-35	第7a, b層	土師器、灰蓋器片 (注147)、焼物	第7a, b層	第3a層上面	第7層		古墳時代	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
惣門部土坑	D区	326	遺土中	土師器	固有遺土	第3a層上面	第7a, b層		古墳時代	第3-2遺構層 (第3a層上面)	
惣倉庫	F区	—	第12層	土師器、土師器、瓦、鉄片	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	F区	—	第13層	土師器	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	F区	—	第14, 11層	土師器	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	F区	—	第13層	灰土? 縄文?	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫-F-1	F区	—	第12層	瓦器類	固有遺土	第3a層上面	第6層?		縄文時代	第7-4遺構層 (第712層上面)	
F34溝	F区	728, 528	遺土中	縄文土器?	固有遺土	第3a層上面	第6層?		弥生時代~縄文時代	第7-4遺構層 (第712層上面)	
F38土坑	F区	728	遺土中	弥生土器	固有遺土	第3a層上面	第6層?		弥生時代	第7-4遺構層 (第712層上面)	
F39溝	F区	531	遺土中	弥生土器?	固有遺土	第3a層上面	第6層?		弥生時代~縄文時代	第7-4遺構層 (第712層上面)	
F34溝	F区		遺土中	なし	固有遺土	第3a層上面	第6層?		弥生時代~縄文時代	第7-4遺構層 (第712層上面)	
惣倉庫	G区	—	第17層	瓦器、土師器、陶器、土師	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第18層	瓦器、土師器、青磁、土師、灰蓋器	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第19層	瓦器、土師器	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第110層	瓦器、土師器、黒色土師、埴輪、青、灰、粘土	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第111層	土師器、白焼土、黒色土師、ての平皿、灰蓋器、埴輪	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第112層	土師器、ての平皿、黒色土師、木	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第113層	土師器、灰蓋器、灰土	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第114層	土師器、灰蓋器、ての平皿、埴輪、木	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第115層	土師器、黒色土師? 埴輪?	—	—	—	—	—	—	
惣倉庫	G区	—	第117層	土師器、灰蓋器、木	—	—	—	—	—	—	
G11水溝	G区	721	遺土中	なし	固有遺土	第3a層上面	第6層		縄文時代	第7-4遺構層 (第712層上面)	

付表2 出土遺物觀察表

属性: cm () 内注標準値

[illegible]

建造 番号	建築番号 / 建築名称	通称 土層名	地盤 調査区	地盤 調査	口径/ 径/深	特徴・形状等の特徴	採出 土	色調(内/外/断面) (地/層別/断面)	備考
27	国27-27 国27-27	包合層 第1層	A63 A区	土砂層	(3.2)/ 1.1	わずかに外見しながらかく内はひらく。丁寧なつく。	200	黄(0.97)/黄(0.97)/黄(0.97)	焼成土、粘土質、赤色粒状とどなし。
30	国28-27 国28-27	包合層 第1層	B67 A区	土砂層	(3.6)/ 1.6	口縁外周よりコナデで仕上げが緩みなり(底部と厚みから)となるが、底部外周もナツルが認められる。	200	黄(0.97)/黄(0.97)/黄(0.97)	焼成土、粘土や砂、赤色粒状を含む。
30	国28-27 国28-27	包合層 第4層	B62 B区	土砂層	(3.6)/ 1.2	口縁内周に立ち上がる。外周もナツルが認められる。	250	内外断面とも 黄(0.97)	焼成土、粘土質、赤色粒状を含む。
40	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A49 B区	土砂層	7.0/ 1.1	口縁、底部を全めて内周部を量する。底部外周はユビオサエによる凹凸あり。	800	内(0.97)/外(0.97)/断面(0.97)	焼成土、粘土や砂、石、炭、黒色・赤色粒状を量含む。
40	国28-27 国28-27	包合層 第4層	B52 B区	土砂層	(7.0)/ (0.6)/1.2	底部から口縁部にかけて滑らかなつながる。外周部も含めて丁寧にナツルを上げる。突きさく復元後に誤差を量む。	150	黄(0.97)/黄(0.97)/黄(0.97)	焼成土、粘土質、赤色粒状を量含む。
40	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A57 B区	土砂層	(7.0)/ (0.6)/1.2	口縁部はひらく。外周部はユビオサエ。	800	内外断面とも 黄(0.97)	焼成土、粘土質、赤色粒状を量含む。
40	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y52 B区	土砂層	(7.0)/ (0.6)/1.2	断面平均値を量る。口縁外周よりコナデにより内周外周部ともナツルを上げる。	250	内外断面とも 黄(0.97)	焼成土、粘土質、赤色粒状とどなし。
44	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A51 B区	土砂層	(25.2)/ 1.1	口縁部は断面を形成しない。比較的大きな目。網。	口縁250	黄(0.97)/黄(0.97)/断面(0.97)	焼成土、粘土質、石、炭、黒色・赤色粒状を量含む。
44	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A54 B区	土砂層	(24.0)/ 1.1	断面よりコナデ。口縁部上方に板状し、重なりを形成する。	口縁250	内外断面とも 黄(0.97)	焼成土、粘土質、石、炭、黒色・赤色粒状を量含む。
46	国28-27 国28-27	包合層 第4層	B51 B区	白磁	//	見込みに凹凸あり。表面はぼくぼく。	断面250	灰白(0.97)/灰白(0.97)/灰白(0.97)	焼成土、粘土質、白磁粒状を量含む。
46	国28-27 国28-27	包合層 第4層	B59 B区	白磁	//	口縁わずかに内周部。増えたい。	口縁150	灰白(0.97)/灰白(0.97)/灰白(0.97)	焼成土、粘土質、白磁粒状を量含む。
46	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A49 B区	石砂 250/40	//	表面とも調整。	定形	—	ヤスカイト。
46	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y51 B区	石砂 250/40	//	上下面とも粒状あり。	ヤ	—	砂。
50	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A50 B区	石砂 250/40	//	表面とも調整。	定形	—	ヤスカイト。
51	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A52 B区	石砂 250/40	//	断面とも調整。	小片	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土や砂。
52	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y50 B区	石砂 250/40	//	断面として作成した。やや凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
53	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面250ナツルにより凹凸あり。断面は凹凸あり。	150	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
54	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A53 B区	土砂層	(8.4)/ 1.2	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	300	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土や砂。
55	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A54 B区	土砂層	(8.0)/ 1.2	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土や砂。
56	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y63 B区	土砂層	(27.0)/ 1.2	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土や砂。
57	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A54 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
58	国28-27 国28-27	包合層 第4層	A54 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
59	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
60	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
61	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
62	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
63	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
64	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
65	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
66	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
67	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
68	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。
69	国28-27 国28-27	包合層 第4層	Y64 B区	土砂層	(14.0)/ 2.4	断面に凹凸あり。断面は凹凸あり。	断面250	灰(0.97)/灰(0.97)/灰(0.97)	焼成土、粘土質。

遺物 番号	埋蔵物 番号	遺物名 土器名	3D 図解	特徴 形状	口徑/底 径	特徴・形状等の特徴	埋蔵 深度	色調 (内/外/断面) (内/底/口縁)	備考
70	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W63 A65	瓦葺土器 器	(36.4)	断面した口縁を一段折り曲げ縁部を丸く収める。外側は 直い外。内面は33°位上上げる。	口縁15	褐色(口縁)/灰(内/底)一様 (33/30/30)	焼成後、土壌。若葉、赤 色。灰色地味。E-2期(340中)
71	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W62 A65	瓦葺土器 器	//	断面直。縁は直縁。	底径30	灰(口縁)/灰(内/底)一様 (2.5/30/30)にぶい縁(2.5/30/4)	焼成後、土壌。
72	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W64 A65	瓦葺土器 器	//	口縁わずかに外反し丸く収める。	口縁小	付-F 灰(口縁)/灰(内/底) (36/30)	焼成後、土壌や中。14世紀
73	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W64 A65	瓦葺土器 器	(5.4)	断面直。口縁を一段折り曲げて直内面直中までかかる。 小のたのまはつけない。表面は上から上り立ち上る。	底径30	付-F 灰(口縁)/灰(内/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌。15世紀
74	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W64 A65	瓦葺土器 器	(12.2)	全周丁寧なつくり。	25	灰(口縁)/灰(内/底)一様 (36/30)。黄灰(口縁/底) (7.5/30/2)	焼成後、土壌。赤褐色中量 含む。
75	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W64 A65	瓦葺土器 器	(16.8)	直いつくり。見込み部に一段折れ付。	20	にぶい黄灰(口縁/底)/黄灰 (10/30/2)にぶい縁(口縁/底) (7.5/30/2)	地味。土壌や中。石灰、長 石。灰色・赤褐色中量 含む。
76	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	(17.2)	直縁。口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	内外断面とも灰白(口縁/底) (36/30)	焼成後、土壌や中。
77	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	(3.2) (6.8/1)	内面ハ調整。	15	内外断面とも灰白(口縁/底) (36/30)	焼成後、土壌。黒色中量 含む。
78	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	//	直いつくり。	底径30	灰(口縁)/灰(内/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。15世紀
79	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	//	断面直。口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	底径25	付-F 黄(口縁/底)一様 (36/30)にぶい縁(口縁/底) (2.5/30/2)	焼成後、土壌。赤褐色 中量含む。
80	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	(11.2)	断面直。口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌。15世紀
81	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	(40)	断面直。口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
82	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.5	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
83	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
84	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
85	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
86	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
87	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
88	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
89	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
90	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
91	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
92	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
93	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
94	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
95	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
96	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
97	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
98	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
99	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。
100	国庫-29/ 図庫21	A28 a 器	W67 A65	瓦葺土器 器	21.6	口縁部まで直中までかかる。内面直ナナ。	口縁20	付-F 灰(口縁/底)一様 (36/30)	焼成後、土壌や中。石灰、長 石。赤褐色中量 含む。

通称 番号	学級番号	通称名 土層名	地区 区分	地層 番号	口径/深 度(米)	地層・地質的特徴	備考	色票(内/外/底) (照度/照度)	備考
105	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	0.4/1.0	内層直下コナず。口縁わずかに外展する。	口縁20%	内層黒色とも底(75%)	構成成、粘土やや砂、石英、赤土、赤色砂中量含む。
106	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	15.4/3.2 (7.4)	外展が少なく、断面三角形の陥りけり具合、内部に粘性のある付着物あり。	A47 内層	内層黒色とも底(94%)→灰白(4%)	構成成、構成中や砂、粘土質、土2割
107	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	8.0/1.4	口縁連続的にひらく。粘性のある付着物あり。	定形	内層赤とも底(97%)	新断面成、中や砂の細かい粘土、赤色、赤色砂中量含む。
108	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	8.2/1.8	口縁やや内湾状に立ち上がる。粘性のある付着物あり。	定形	内層赤とも底(97%)	新断面成、構成成、粘土やや砂、赤色砂中量含む。
109	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.8/1.3	口縁連続的に立ち上がる。底面との境界に段を形成する。	A47 内層	内層赤とも底(97%)	新断面成、構成成、粘土やや砂、赤色砂中量含む。
110	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	0.1/1.0	108と類似した形状。陥りが多いが風化弱く堅固しない。	20% 内層	内層黒色とも底(97%)	新断面成、構成成、粘土やや砂、赤色砂多量含む。底面付近では厚板状、加圧を要している。
111	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		// 先端部欠失。	90%		新断面成、底面状態良好。
112	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	15.5/1.2	底面との境界不明瞭。	口縁10%	灰白(10%)→初層底(7.5%)/底面(7.5%)→底面(7.5%)	構成成、粘土質、灰白白→ピンク色。
113	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	13.0/1.0	外展が少なく、小片のため底面下に風化進む。	口縁10%	灰白(10%) / 底面(90%) / 底面(90%)	構成成、粘土土質。
114	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.0/1.0	断面形状の比較的にしっかりした黄土。	底面30%	灰白(30%) / 底面(70%) / 底面(70%)	構成成、粘土土質。
115	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		// 断面三角形の鋭い黄土。	小片	灰白(90%) / 底面(10%) / 底面(10%)	構成中や砂、粘土やや砂、土2割→底面1割
116	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	0.2/1.0	底面から口縁部にかけて薄く滑らかになつたり、明確な底面がない。	20%	灰白(90%) / 底面(10%) / 底面(10%)	構成中や砂、粘土土質。
117	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	0.5/1.0	口縁部短く陥り過ぎる。小片のため底面下に風化進む。	口縁10%	にぶい層(7.5%) / 底面(7.5%) / 底面(7.5%)	石英、長石、チャート、黒色砂、片岩含む。
118	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		// 小片のみ。	小片	にぶい層(7.5%) / 底面(7.5%) / 底面(7.5%)	石英、長石、チャート、赤土、赤色砂中量含む。
119	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.4/1.0	口縁わずかに下がり、陥り部は浅い。	10%	灰白(90%) / 底面(10%) / 底面(10%)	構成中や砂、粘土土質。
120	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.2/1.0	口縁連続的にひらく。小片のため底面下に風化進む。	10%	内層黒色とも底(97%)	構成成、粘土土質。
121	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		口縁部を膨らましめぬ。小片のため底面下に風化進む。	小片	内層黒色とも底(97%)	構成成、粘土やや砂、石英、長石含む。赤色砂ほとんどなし。
122	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	15.2/1.2 (7.4)	陥りに膨らましめぬ。外展が進む。内部に粘性のある付着物あり。	A47 内層	内層黒色とも底(97%)	新断面成、構成中や砂、粘土やや砂、土2割→底面1割
123	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	8.5/1.2	口縁部(口縁部)断面大きく下がり口縁部にひらく。口縁丁寧なコナず。	定形	内層黒色とも底(97%)	構成成、粘土土質。灰白色。新断面成より10cm上で粘土、黒に作り変換する可能性がある。
124	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		// 底面、断面三角形の鋭い黄土。	底面30%	灰白(30%) / 底面(70%) / 底面(70%)	構成成、粘土やや砂。
125	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.0/1.0	断面三角形のしっかりした黄土。	底面30%	灰白(30%) / 底面(70%) / 底面(70%)	構成成、粘土やや砂。
126	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	13.0/1.0	口縁部内部に段を形成する。中や砂を含む。口縁外縁にコナずにより凹む。	口縁10%	灰白(10%) / 底面(90%) / 底面(90%)	構成成、粘土土質。
127	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	14.0/1.0	口縁部鋭くひらく。外展がわずかに陥り部を形成する。	口縁10%	灰白(10%) / 底面(90%) / 底面(90%)	構成成、粘土やや砂。
128	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	13.0/1.0	口縁先はわずかに外展内部面に段を形成する。	口縁10%	灰白(10%) / 底面(90%) / 底面(90%)	構成成、粘土やや砂。
129	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		// 内部ナズ、外周ユビエツで凹みあり。	口縁10%	にぶい層(7.5%) / 底面(7.5%) / 底面(7.5%)	構成成、粘土やや砂、赤色砂少量含む。
130	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	12.0/1.0	口縁部内層赤とも底(97%)	口縁10%	底面(97%) / 底面(97%) / 底面(97%)	構成成、粘土土質。赤色砂中量含む。
131	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.0/1.0	口縁丁寧なコナず。	口縁20%	灰白(20%) / 底面(80%) / 底面(80%)	構成成、粘土やや砂。
132	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367		底面は平準で表層部の地層がある。小片のため底面下に風化進む。	口縁10%	にぶい層(7.5%) / 底面(7.5%) / 底面(7.5%)	構成成、粘土土質。赤色砂多量含む。
133	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	0.4/1.0	口縁部の丁寧なコナずのため口縁・底面の境界線不明。	30%	底面(97%) / 底面(97%) / 底面(97%)	構成成、粘土やや砂。赤色砂多量含む。
134	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	7.0/1.0	外展の鋭いコナずとサエ、ナデによる鋭く陥入あり。	10%	底面(97%) / 底面(97%) / 底面(97%)	構成成、粘土土質。赤色砂ほとんどなし。
135	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	8.2/1.4	口縁と底面境界不明瞭な部分と底面直上の部分あり。	50%	底面(97%) / 底面(97%) / 底面(97%)	構成成、粘土土質。赤色・黒色砂中量含む。
136	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	8.6/7.3 1.6	口縁は鋭いコナずで底面に立ち上がる。	30%	底面(97%) / 底面(97%) / 底面(97%)	構成成、粘土土質。赤色砂中量含む。
137	国一-367	A30 国一367	A37 国一367	A37 国一367	0.8/1.0 1.4	口縁部は連続的にひらく。口縁と底面の境界部分に段を形成する。	40%	内層黒色とも底(97%)	構成成、粘土やや砂。赤色砂中量含む。

番号 呼称	路線 品名	地区	種別	口内/口外	特徴・成形の特徴	種別	色調(内/外/両面) (色調/両面/両面)	備考
139 国産-317 国産-317	A1502 国産-317	土師器	(口内/口外)	産前中に成帯、口縁は内湾状に立ち上がる。	100	灰白(90%) / 灰白(90%) / 黄灰(2.9%)	焼成良。胎土微。赤色顔料多。	
140 国産-318 国産-318	A40 国産-318	土師器	(口内/口外)	産前中に成帯へ落ちるにつながらる。	300	内湾状(7.9%) / 成帯(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成良。胎土微。赤色顔料中量。	
141 国産-319 国産-319	B50 国産-319	瓦葺	(口内/口外)	中や外にひびが走る角状成帯。見込みに平行線状の帯。内湾と外湾とを長く。丁寧なつくり。	400	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成良。胎土微。赤色顔料多。	
142 国産-320 国産-320	B40 国産-320	土師器	(口内/口外)	口縁部コナナシ	小片	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成良。胎土微。赤色顔料多。	
143 国産-321 国産-321	B40 国産-321	瓦葺	(口内/口外)	口縁部丁寧なコナナシ。	100	灰白(9.9%) / 灰白(9.9%) / 灰白(9.9%)	焼成良。胎土微。	
144 国産-322 国産-322	B71 国産-322	瓦葺	(口内/口外)	胎土	焼成	—	天覧光量100%	
145 国産-323 国産-323	A67 国産-323	瓦葺	(口内/口外)	胎土	焼成	—	元量適量100%	
146 国産-324 国産-324	B61 国産-324	瓦葺	(口内/口外)	新帯の裏面。外側面を注意のため。	900	灰白(9.9%) / 灰白(9.9%) / 灰白(9.9%)	焼成良。胎土や微。赤色顔料多。口縁部。	
147 国産-325 国産-325	B61 国産-325	瓦葺	(口内/口外)	口縁部と胎土を不連続。口縁部コナナシにより産	400	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成良。胎土や微。赤色顔料中量。	
148 国産-326 国産-326	B47 国産-326	瓦葺	(口内/口外)	口縁部と胎土を不連続。外側に外湾の曲線あり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。口縁部。	
149 国産-327 国産-327	B47 国産-327	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
150 国産-328 国産-328	B47 国産-328	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
151 国産-329 国産-329	B47 国産-329	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
152 国産-330 国産-330	B47 国産-330	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
153 国産-331 国産-331	B47 国産-331	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
154 国産-332 国産-332	B47 国産-332	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
155 国産-333 国産-333	B47 国産-333	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
156 国産-334 国産-334	B47 国産-334	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
157 国産-335 国産-335	B47 国産-335	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
158 国産-336 国産-336	B47 国産-336	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
159 国産-337 国産-337	B47 国産-337	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
160 国産-338 国産-338	B47 国産-338	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
161 国産-339 国産-339	B47 国産-339	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
162 国産-340 国産-340	B47 国産-340	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
163 国産-341 国産-341	B47 国産-341	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
164 国産-342 国産-342	B47 国産-342	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
165 国産-343 国産-343	B47 国産-343	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
166 国産-344 国産-344	B47 国産-344	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
167 国産-345 国産-345	B47 国産-345	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
168 国産-346 国産-346	B47 国産-346	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
169 国産-347 国産-347	B47 国産-347	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
170 国産-348 国産-348	B47 国産-348	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
171 国産-349 国産-349	B47 国産-349	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
172 国産-350 国産-350	B47 国産-350	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	
173 国産-351 国産-351	B47 国産-351	瓦葺	(口内/口外)	口縁部微大く仕上げ。外側はコナナシにより丁寧なつくり。	900	横紋(9.9%) / 横紋(9.9%) / 灰白(2.9%)	焼成中や微。胎土微。	

建群番号 / 建築番号	建築名 (建築番号)	地区区分	用途	口/窓/廊 / 形状・形状等の特徴	残存	色調(外/内/断面) (色調/材質)	備考
174	佐倉藩 建築第26 号 (下)	141	国土地 主 官?	1/4.3	建群から立ち上がりなくそのままだにひらく。風化しない。窓部わずかに凸む。	壁 0.596m/2 ～ 0.114m (1.596m/2/窓 0.996m/2)内外露 と同等	焼成土や砂、粘土層。
175	佐倉藩 建築第26 号	148	国土地 主	//	口縁と思われる小片。風化のため断面不明。	小片 焼成土(0.996m/2)/風質(0.996m/2)/ 風質(0.996m/2)	焼成土、粘土層。
176	佐倉藩 建築第26 号	148	国土地 主	//	縦に割文。	小片 灰土(0.597m/2)/灰土質(0.996m/2)/ 内露(0.996m/2)	焼成土、粘土や砂、中層から 灰土層まで
177	佐倉藩 建築第26 号	148	国土地 主	1/0.7.2	凹面。	断面部 灰土(0.597m/2)/灰土(0.597m/2)～ 0.996m/2/窓 0.996m/2	焼成土、粘土や砂。
178	佐倉藩 建築第26 号	148	国土地 主	//	波状口縁、口縁や下に太い溝。断面に割文通す。	小片 灰土(0.996m/2)/灰土(0.597m/2)/ 灰土(0.597m/2)	焼成土、粘土層。
179	佐倉藩 建築第26 号	148	国土地 主	//	金網はなぜ断面?	?	矢張り一部欠損の可能性あり。
180	佐倉藩 建築第26 号	148	国土地 主	//	3mmでやみ通す。	?	通入と思われる。
181	佐倉藩 建築第26 号	144	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
182	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
183	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
184	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
185	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
186	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
187	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
188	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
189	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
190	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
191	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
192	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
193	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
194	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
195	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
196	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
197	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
198	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
199	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
200	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
201	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
202	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
203	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
204	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
205	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
206	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
207	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
208	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
209	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
210	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
211	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
212	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
213	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
214	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
215	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
216	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
217	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
218	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
219	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
220	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
221	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
222	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
223	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
224	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
225	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
226	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
227	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
228	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
229	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
230	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
231	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
232	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
233	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
234	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
235	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
236	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
237	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
238	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
239	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
240	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
241	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
242	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
243	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
244	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
245	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
246	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
247	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
248	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
249	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
250	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
251	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
252	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
253	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
254	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
255	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
256	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
257	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
258	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
259	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
260	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
261	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
262	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
263	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
264	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
265	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
266	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
267	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
268	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
269	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
270	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
271	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
272	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
273	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
274	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
275	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
276	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
277	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
278	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
279	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
280	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
281	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
282	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
283	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
284	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
285	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
286	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
287	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
288	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
289	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
290	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
291	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
292	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
293	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
294	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
295	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
296	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
297	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
298	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
299	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
300	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
301	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
302	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
303	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
304	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
305	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
306	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
307	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
308	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
309	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
310	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
311	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
312	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
313	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
314	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト製	0.996	—	—
315	佐倉藩 建築第26 号	147	石橋 橋長 2.1	ササカイト			

[illegible]

通称 番号	戸建番号 区分番号	通称 土地名	地味 図面区分	種類 用途	口徑/ 供/排水	仕様・設備等の特長	通称 区分	色紙 (内/外/背面) (通/断絶/背面)	備考
272	272-09 区分31	C1014 増土中	Y44 O&E	土留壁 土留	(10.0) //	ての平口口縁。口縁部壁面傾斜。	白紙15%	にぶい壁 (5796/4)/底面壁 (2. 5797/4) ~ にぶい壁 (5797/4)/ にぶい壁 (5796/4)	横成良、陸土留。赤色顔料多量含む。
273	273-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	(8.0) //	ての平口口縁。やや深めの筋にのなるか?	白紙10%	底面 (5797/2)/底面 (5797/2)/にぶい壁 (5796/4)	横成良、陸土留。赤色顔料少量含む。
274	274-09 区分31	C1014 下層	Y44 O&E	土留壁 土留	//	外周全面に保付壁。	白紙の手 み	/底面 (5797/2)/底面壁 (2. 5797/4)	横成良、陸土や中層。石灰、長石、赤色顔料少量含む。
275	275-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長5.4 外側1.0 ~1.2	貫注土留。	黄紙	内外壁とも にぶい壁 (5797/2) ~ にぶい壁 (2. 5797/4)	横成良、陸土や中層。片岩あり、赤色顔料なし。
276	276-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長5.9 外側1.0 ~1.2	貫注土留。	黄紙	内外壁とも貫注壁 (2. 5797/2) ~ 底面 (2. 577/1)	横成良、陸土や中層。片岩あり、赤色顔料なし。
277	277-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長4.9 外側1.0 ~1.1	貫注土留。	白紙	内外壁面とも にぶい壁 (5797/2)	横成良、陸土や中層。赤色顔料なし。
278	278-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長5.9 外側1.0 ~1.1	貫注土留。	黄紙	内外壁とも にぶい壁 (5796/4) ~ にぶい壁 (5797/2)	横成良、陸土や中層。片岩あり、赤色顔料なし。
279	279-09 区分31	C1014 増土中	Y44 O&E	土留壁 土留	全長4.3 外側1.1	貫注土留。	黄紙	内外壁とも にぶい壁 (5797/2)	横成良、陸土や中層。赤色顔料なし。
280	280-09 区分31	C1014 増土中	Y44 O&E	土留壁 土留	全長5.5 外側1.0 ~1.1	貫注土留。	黄紙	内外壁とも にぶい壁 (5797/2)	横成良、陸土や中層。赤色顔料なし。
281	281-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	高井基 外側1.0 ~1.1	貫注土留。	白紙?	内外壁面とも 貫注 (2. 576/1)	横成や中層。陸土や中層。赤色顔料なし。片岩含む。
282	282-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長4.9 外側1.3	貫注土留。	黄紙	内外壁面とも 貫注 (5796/2) ~ 底面 (5796/1)	横成良、陸土留。赤色顔料少量含む。
283	283-09 区分31	C1014 増土中	Y45 O&E	土留壁 土留	全長5.0 外側1.1 ~1.2	貫注土留。	白紙	内外壁面とも 貫注 (5796/1)	横成良、陸土留。赤色顔料なし。
284	284-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長4.1 外側1.2	貫注土留。	黄紙	内外壁面とも 貫注 (2. 576/1)	横成良、陸土留。赤色顔料なし。
285	285-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	高井基 外側1.2 ~1.3	貫注土留。一部欠損。	白紙?	内外壁面とも 貫注 (5796/2) ~ 底面 (5796/1)	横成や中層。陸土や中層。赤色顔料なし。片岩含む。
286	286-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長5.7 外側1.0 ~1.2	貫注土留。一部欠損。	白紙?	内外壁面とも 貫注 (2. 577/1) ~ 貫注 (2. 576/1)	横成や中層。陸土や中層。赤色顔料なし。
287	287-09 区分31	C1014 増土中	Y43 O&E	土留壁 土留	全長5.3 外側1.0 ~1.0	貫注土留。一部欠損。	白紙?	内外壁面とも にぶい壁 (2. 5797/2) ~ 底面 (2. 576/2)	横成良、陸土や中層。赤色顔料なし。
288	288-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(18.0) / (18.0) 2.1	窓部からの立ち上がり滑らか。丁寧なつくり。内面一部は不足で灰色。	白紙	底面 (5797/4) ~ 底面 (10796/1)/底面 (5796/4) ~ にぶい壁 (2. 5797/4)/底面 (5796/4) ~ 底面 (10796/1)	横成良、陸土や中層。赤色顔料少量含む。
289	289-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	//	口縁外足すもやや深めの筋。丁寧なつくり。内面一部は不足で灰色。	白紙	内外壁面とも 貫注 (5796/4) ~ 底面 (10796/1)	横成良、陸土留。赤色顔料少量含む。
290	290-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	//	ての平口口縁のように内面に深さがあるが口縁部壁面内面への張り出しがない。外側面外縁ユビとズレはなし。コナリ。	白紙	横成 (10795/1)/横成 (10795/1)/横成 (10795/1)	横成良、陸土留。赤色顔料とどなし。
291	291-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	//	ての平口口縁のように内面に深さがあるが口縁部壁面内面への張り出しがない。丁寧なつくり。内面に張り付。	白紙	底面 (10795/2) ~ 47/2) ~ にぶい壁 (10797/4) ~ 底面 (5796/4)/内面と外側 (2. 5796/4)	横成良、陸土や中層。赤色顔料少量含む。
292	292-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	//	口縁外足すもやや深めの筋。丁寧なつくり。コナリ。	白紙	底面 (2. 5796/4) ~ 底面 (5796/4)/内面と外側 (2. 5796/4)	横成良、陸土留。赤色顔料少量含む。
293	293-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(25.0) //	口縁部は内面部分に立上げに際して、外側は底面コナリ。内外壁ともかすかにコナリと若干の隙隙があるが、コナリとしたりは隙隙がほとんどない。	白紙15%	にぶい壁 (2. 5797/4) ~ 底面 (5796/4)/底面 (5796/4) ~ 底面 (5796/4)	横成良、陸土や中層。石灰、長石、赤色顔料少量含む。
294	294-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(17.0) //	窓部には貫注のつくり。窓部外縁コナリ。内面と若干の隙隙。	白紙20%	内外壁面とも貫注 (2. 5797/4) ~ 2. 577/2)	横成良、陸土留。赤色顔料少量含む。
295	295-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(16.0) //	口縁部は内面部分に立上げに際して、外側は底面コナリ。内外壁ともかすかにコナリと若干の隙隙があるが、コナリとしたりは隙隙がほとんどない。	白紙15%	にぶい壁 (5796/4)/にぶい壁 (2. 5797/4) ~ 底面 (5796/4)/底面 (5796/4) ~ にぶい壁 (2. 5797/4)	横成良、陸土留。赤色顔料とどなし。
296	296-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(16.0) //	口縁部は内面部分に立上げに際して、外側は底面コナリ。内外壁ともかすかにコナリと若干の隙隙があるが、コナリとしたりは隙隙がほとんどない。	白紙15%	にぶい壁 (2. 5797/4) ~ 底面 (5796/4)	横成良、陸土留。赤色顔料少量含む。
297	297-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(14.0) //	口縁部は内面部分に立上げに際して、外側は底面コナリ。内外壁ともかすかにコナリと若干の隙隙があるが、コナリとしたりは隙隙がほとんどない。	白紙20%	内外壁面とも貫注 (5796/4) ~ にぶい壁 (10796/2)	横成良、陸土や中層。赤色顔料少量含む。
298	298-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	全長5.3 外側1.3 ~1.4	一部欠損不足のため灰色。	黄紙	内外壁面とも貫注 (2. 5797/4) ~ 底面 (5796/4)	横成良、陸土や中層。赤色顔料なし。
299	299-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	//	窓部には貫注のつくり。窓部外縁コナリ。内面と若干の隙隙。	白紙?	窓部には貫注のつくり。窓部外縁コナリ。内面と若干の隙隙。	横成良、陸土や中層。石灰、長石、赤色顔料少量含む。
300	300-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(21.0) //	ての平口口縁。縁部の上へへの張り出し小さい。	白紙40%	内外壁面とも貫注 (5796/4) ~ にぶい壁 (2. 5797/4)	横成良、陸土留。赤色顔料とどなし。
301	301-09 区分31	C247 1層	Y47 O&E	土留壁 土留	(11.2) //	口縁部は内面部分に立上げに際して、外側は底面コナリ。内外壁ともかすかにコナリと若干の隙隙があるが、コナリとしたりは隙隙がほとんどない。	白紙	内外壁面とも貫注 (5796/4) ~ 底面 (5796/4)	横成良、陸土や中層。赤色顔料少量含む。

[illegible]

[illegible]

演奏番号	楽曲番号	楽曲名	作曲者	楽器	口笛/篠笛	笛・笙・尺八等の特徴	演奏者	色紙(内/外/横断/縦断/両面)	備考
371	演奏番号371	A7 楽譜371	194	尺八	尺八	口笛横断や内折し、外折や下にぼんやりした演奏が特徴、確かなリズム。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/横断(尺八)	横断尺八、節土中音。石炭、灰石を含む。
372	演奏番号372	包含部楽譜372	195	尺八	尺八	口笛横断や、くめの、下で音が響く、一部土鼓の音(尺八)になる。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、黒色の色紙を含む。
373	演奏番号373	包含部楽譜373	196	尺八	尺八	口笛下に尺八、その下に尺八奏法。黒化強い。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音。石炭、灰石を含む。
374	演奏番号374	包含部楽譜374	197	尺八	尺八	口笛横断内折時に横断に外折する、大ふれり、断奏、外折の一面が色紙に響く。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
375	演奏番号375	包含部楽譜375	198	尺八	尺八	尺八の上下に尺八奏法されるが横断のくめが強い、断奏、一部尺八奏法。	小内	尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
376	演奏番号376	包含部楽譜376	C239 A 楽譜376	尺八	尺八	口笛横断下に尺八。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音。
377	演奏番号377	包含部楽譜377	C183, 19 2, 196 楽譜377	尺八	尺八	口笛横断下に尺八。尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音。
378	演奏番号378	包含部楽譜378	A21 楽譜378	尺八	尺八	節土中音、尺八、尺八奏法、尺八。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
379	演奏番号379	包含部楽譜379	C219 楽譜379	尺八	尺八	口笛横断(内折)横断を奏する。尺八と中音の両方、尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
380	演奏番号380	包含部楽譜380	C44 楽譜380	尺八	尺八	口笛横断を奏する。尺八と中音の両方、尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
381	演奏番号381	包含部楽譜381	包含部楽譜381	尺八	尺八	口笛横断を奏する。尺八と中音の両方、尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
382	演奏番号382	包含部楽譜382	包含部楽譜382	尺八	尺八	口笛横断を奏する。尺八と中音の両方、尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
383	演奏番号383	包含部楽譜383	C772 楽譜383	尺八	尺八	(11. 4/8) 尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
384	演奏番号384	包含部楽譜384	包含部楽譜384	尺八	尺八	(10. 7/8) 尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
385	演奏番号385	包含部楽譜385	包含部楽譜385	尺八	尺八	(14. 1/8) 尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
386	演奏番号386	包含部楽譜386	包含部楽譜386	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
387	演奏番号387	包含部楽譜387	包含部楽譜387	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
388	演奏番号388	包含部楽譜388	包含部楽譜388	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
389	演奏番号389	包含部楽譜389	包含部楽譜389	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
390	演奏番号390	包含部楽譜390	包含部楽譜390	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
391	演奏番号391	包含部楽譜391	包含部楽譜391	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
392	演奏番号392	包含部楽譜392	包含部楽譜392	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
393	演奏番号393	包含部楽譜393	包含部楽譜393	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
394	演奏番号394	包含部楽譜394	包含部楽譜394	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
395	演奏番号395	包含部楽譜395	包含部楽譜395	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
396	演奏番号396	包含部楽譜396	包含部楽譜396	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
397	演奏番号397	包含部楽譜397	包含部楽譜397	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
398	演奏番号398	包含部楽譜398	包含部楽譜398	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
399	演奏番号399	包含部楽譜399	包含部楽譜399	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
400	演奏番号400	包含部楽譜400	包含部楽譜400	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。
401	演奏番号401	包含部楽譜401	包含部楽譜401	尺八	尺八	尺八(内折)横断や尺八が横断中に無い(内折)奏する。尺八、下で音が響く。上は尺八奏法に下は尺八奏法、尺八奏法に下は尺八奏法に下は尺八奏法。	小内	尺八(横断)/尺八(横断)/尺八(横断)	横断尺八、節土中音、尺八、灰石を含む、黒色の色紙を含む。



調査地遠景（東から）



調査地遠景（南から）



調査地遠景 (西から)



調査地遠景 (北から)



A区南壁土層 (2B68)



B区東壁土層 (Y50)



C1区南壁土層 (Y47)



C2区南壁土層 (X43)



C2区東壁土層 (X38)



D区南壁土層 (W34)



F区南壁土層 (T33)



G区西壁土層 (R20)



B334遺構面全景（東から）



B14井戸（西から）



B14井戸（南から）



B334溜枳（西から）



B334溜枳（南から）



B19土坑 (北から)



B25焼土坑 (北から)



B21区画溝 (南から)



B368土坑 (北から)



A28落ちこみ (西から)



A66土坑 (南東から)



A26溝 (東から)



A1,A7流路 (北から)



A区第3遺構面全景 (西から)



B区第3遺構面全景 (東から)



A39土墳墓 (南東から)



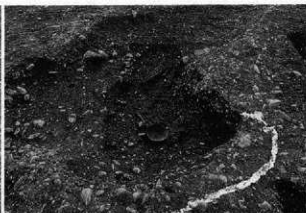
A218土墳墓 (南東から)



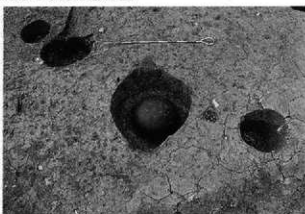
A39, A218土墳墓 (北西から)



A39土墳墓 (北東から)



A218土墳墓 (北東から)



B687ビット (東から)



B687ビット (東から)



B348土坑墓 (西から)



B348土坑墓 (北から)



B348土坑墓 (東から)



B201柱穴 (西から)



B427柱穴 (北から)



B744柱穴 (西から)



B380落ちこみ遺物出土状況 (北東から)



A67, 68土坑 (北東から)



B346, 355溝 (東から)



A195土坑 (西から)



B346, 355溝土層断面 (西から)



A195土坑 (東から)



B355溝土層断面 (南東から)



B346, 355溝 (北から)



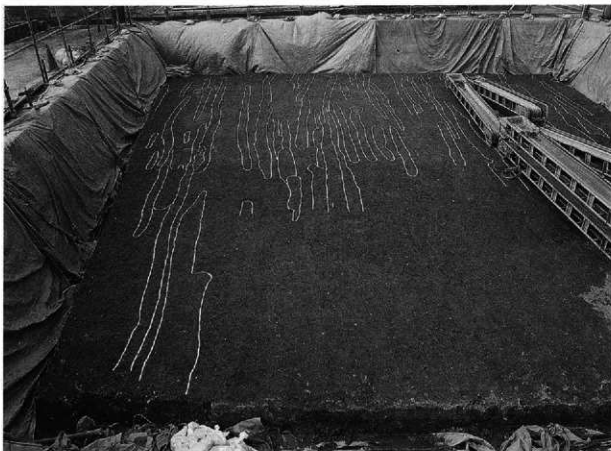
B751土坑 (西から)



B区第6遺構面 (西から)



B区第10層下礫群 (東から)



C1区第1遺構面全景 (東から)



C1区第3-1遺構面全景 (東から)



C2区第3-1遺構面全景 (西から)



C134, 135土坑 (東から)



C135土坑 (東から)



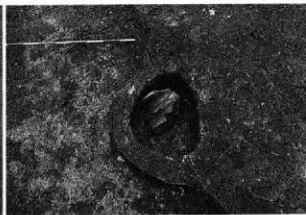
C215集石 (東から)



C190土坑 (北から)



C192溝 (東から)



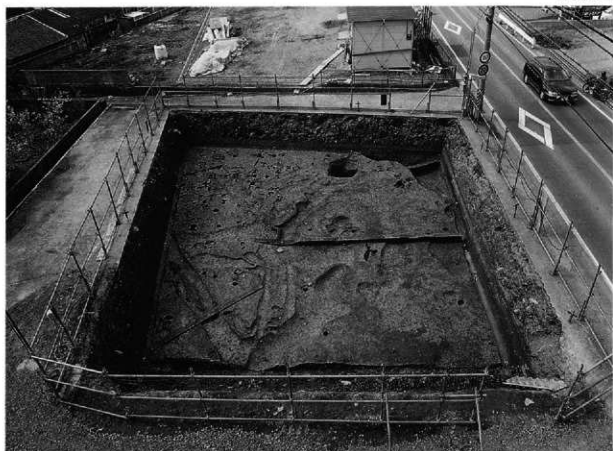
C181ピット (西から)



C182柱穴 (北から)



C260柱穴 (北から)



C1区第3-3遺構面全景（東から）



C2区第3-3遺構面全景（西から）



C220落ちこみ (東から)



C251土坑 (西から)



C237ビット (北から)



C64, 1014溝 (西から)



C53水溜 (北から)



C1004水溜 (北から)



C247井戸 (西から)



C247井戸 (西から)



C279溝 (東から)



C238土坑 (北から)



C1002自然流路 (東から)



C1002遺物出土状況 (北から)



C1002土壌サンプル採取状況



C1010土坑 (西から)



C1021自然流路 (西から)



C2区南半第8b層面全景 (西から)



D区第3-3遺構面全景 (西から)



D区第4遺構面全景 (東から)



D5土坑 (西から)



F区第F2遺構面全景 (東から)



F区第F3遺構面全景 (東から)



F区第F4遺構面全景 (西から)



F93, 94溝 (東から)



F59ピット弥生土器出土状況 (北から)



G区西半第G10層土師器椀出土状況



G区西半第G2遺構面全景 (東から)



G区西半第G11水溜土層断面 (東から)



G区西半第G11水溜 (東から)



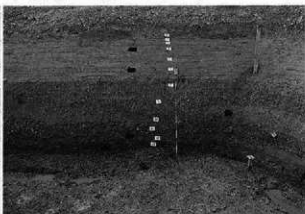
G区東半第G2遺構面全景 (西から)



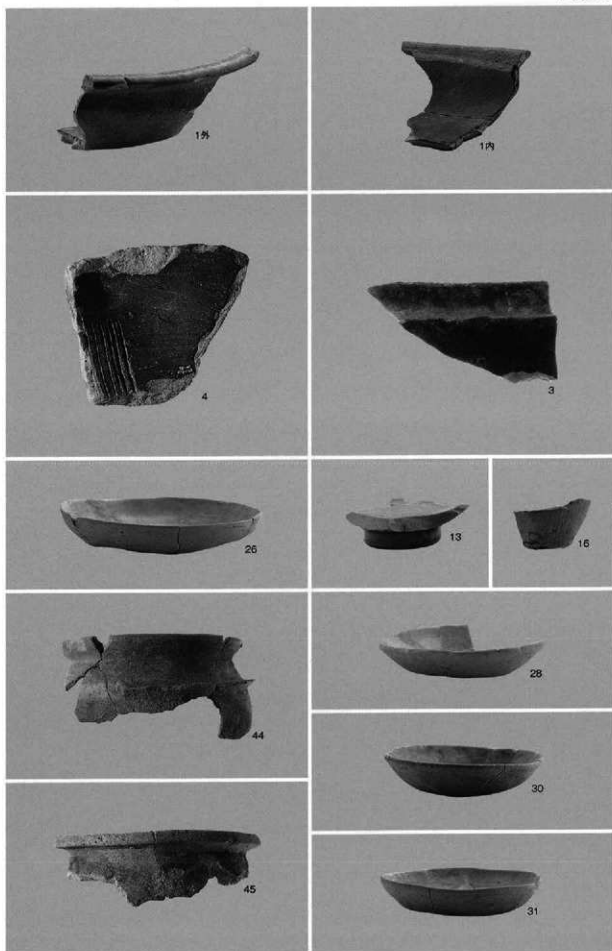
G区東半第G3遺構面全景 (西から)

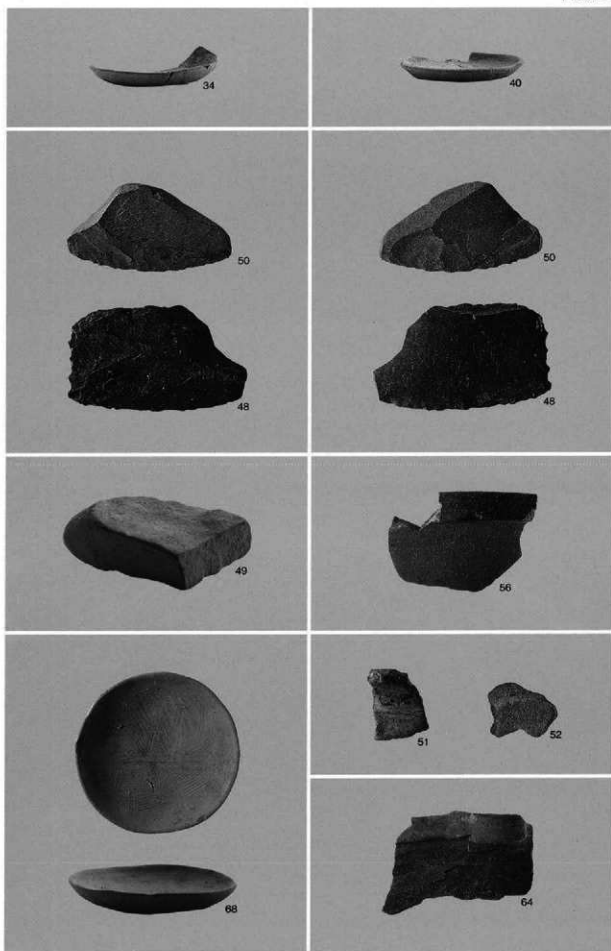


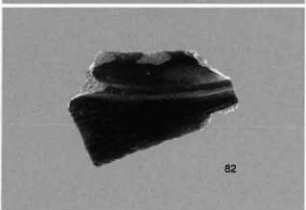
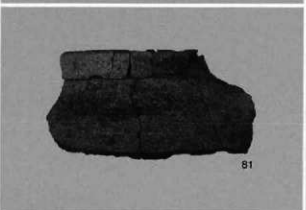
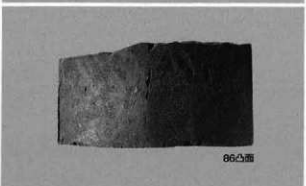
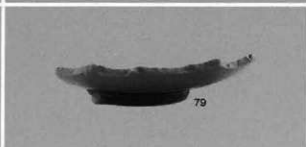
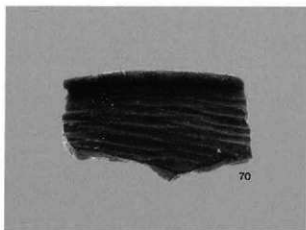
G区東半第G5遺構面全景 (西から)

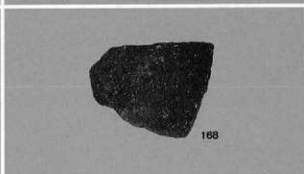
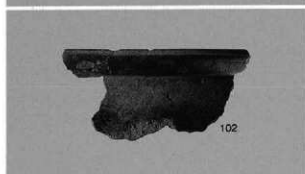
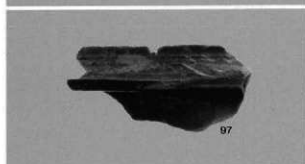
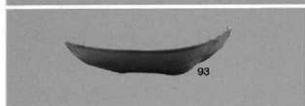
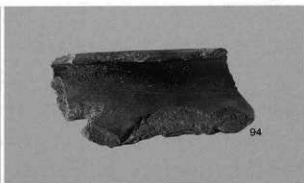
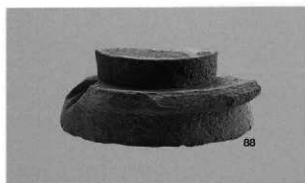


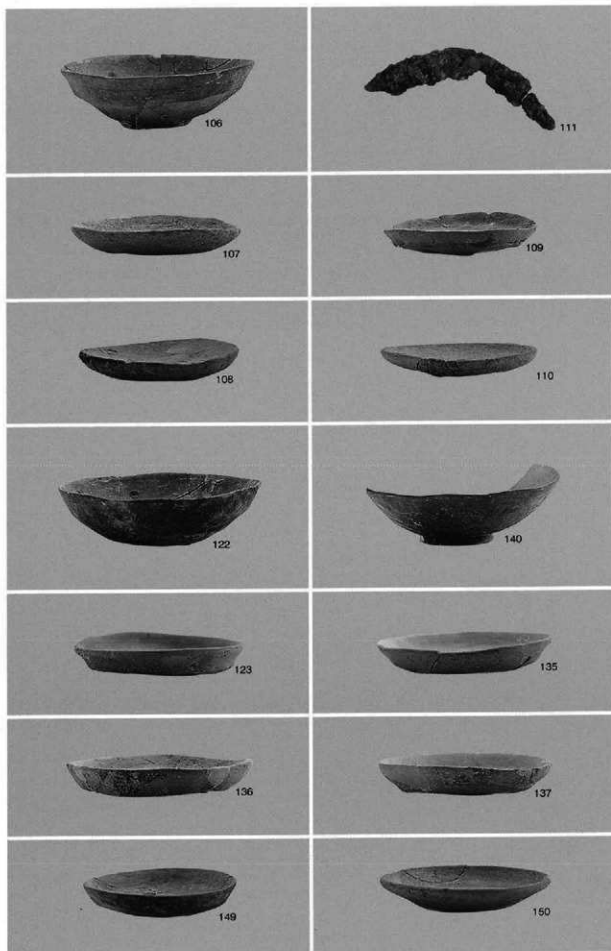
G区南壁土壌サンプル採取状況

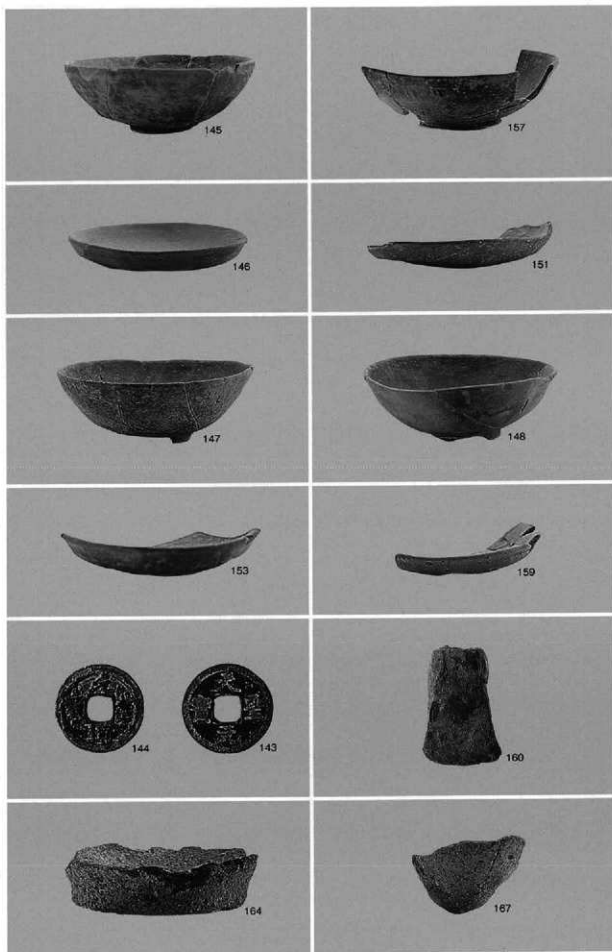


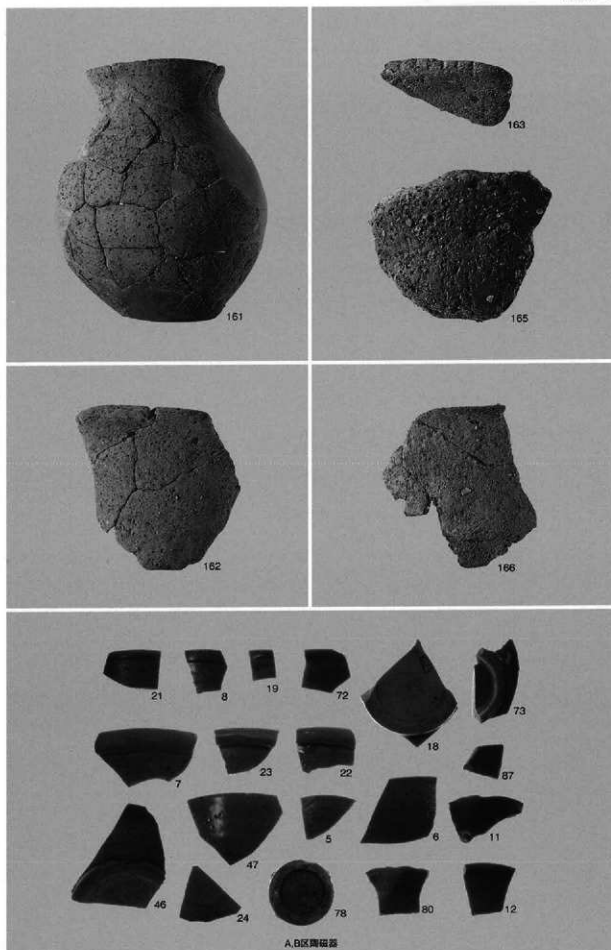


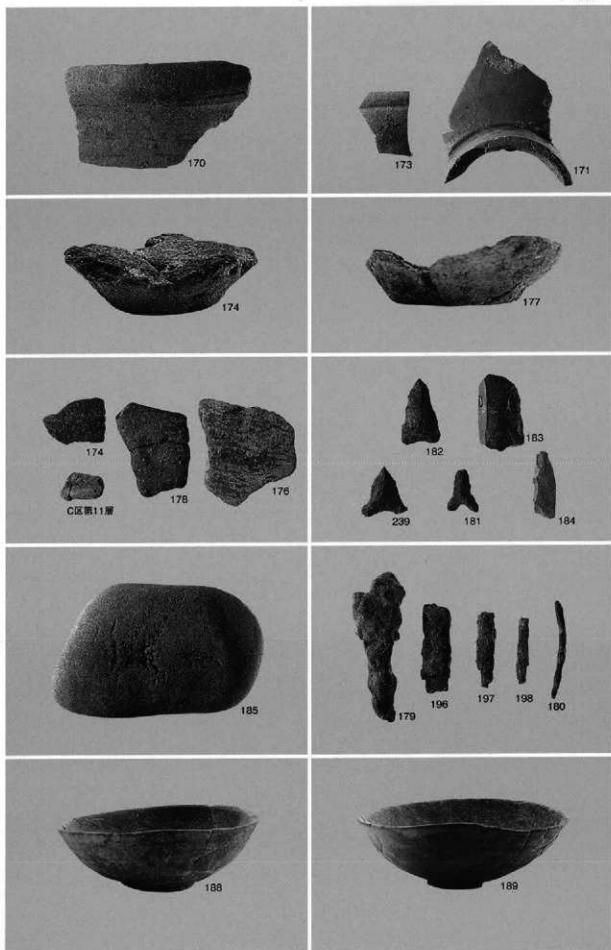


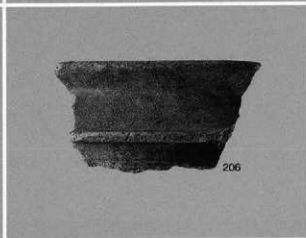
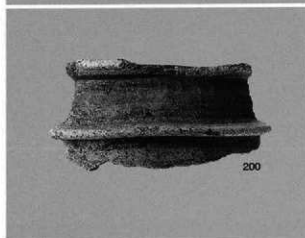
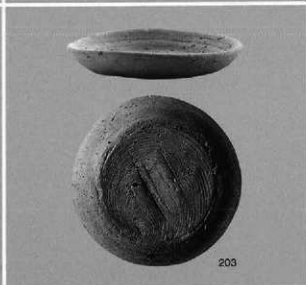
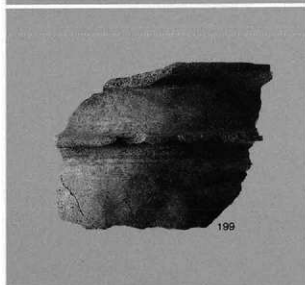
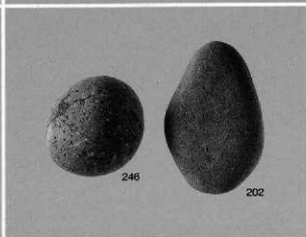
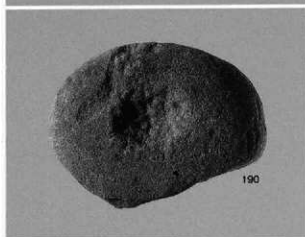
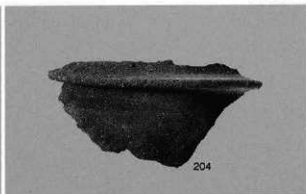
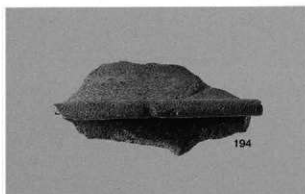


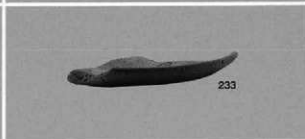
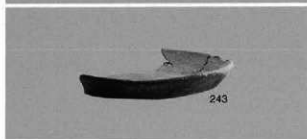
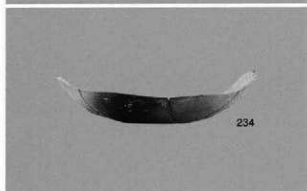
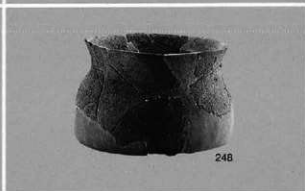
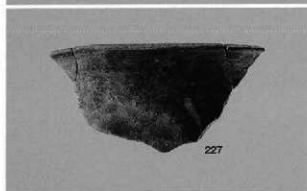
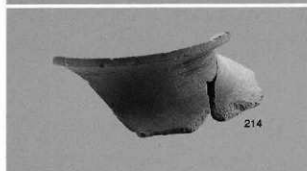
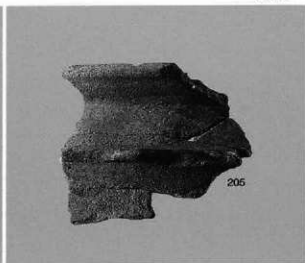
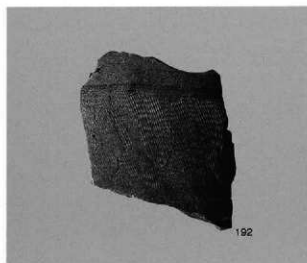


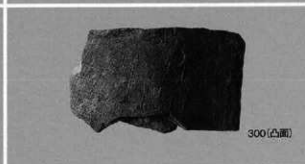
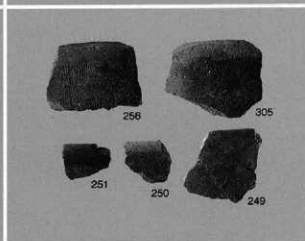
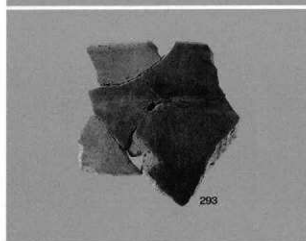
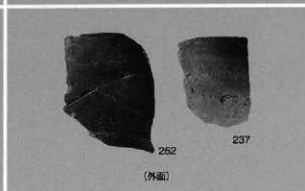
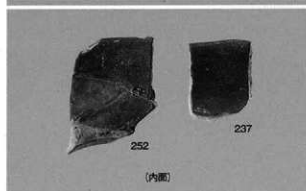
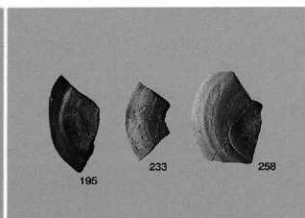
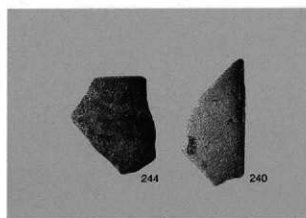


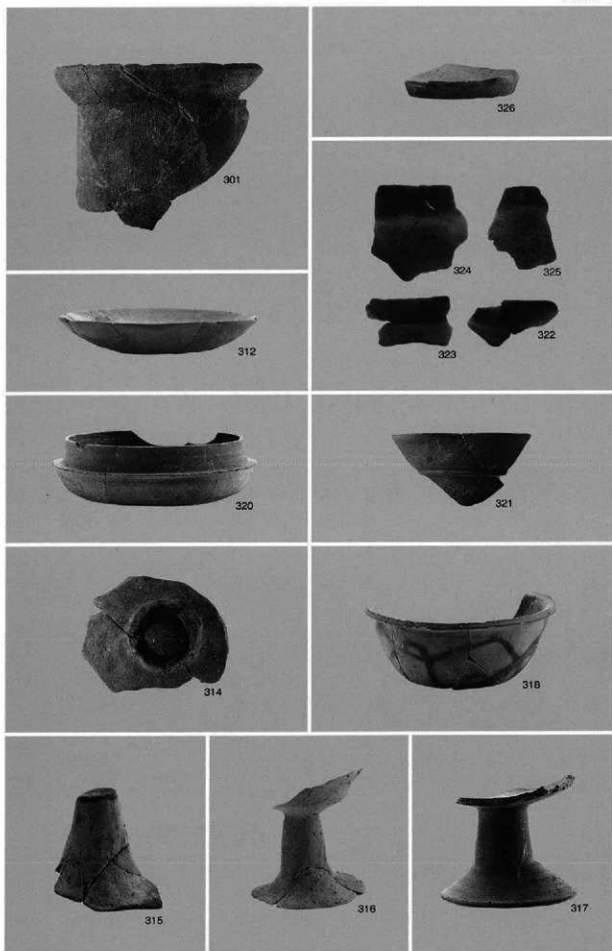


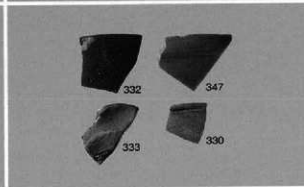
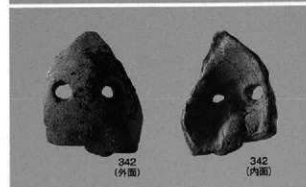
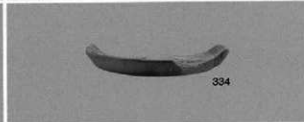
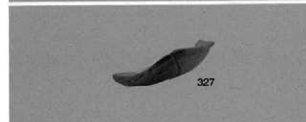
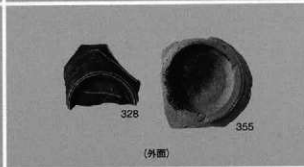
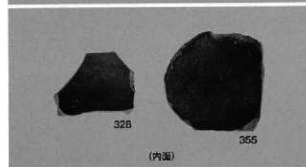
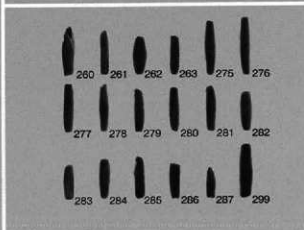
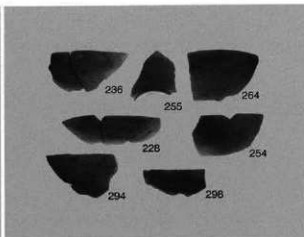
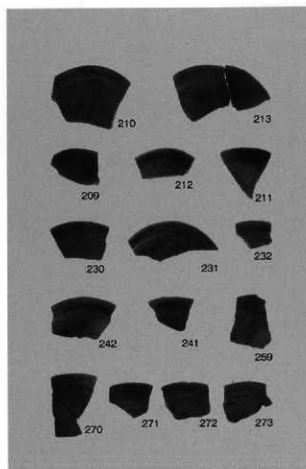


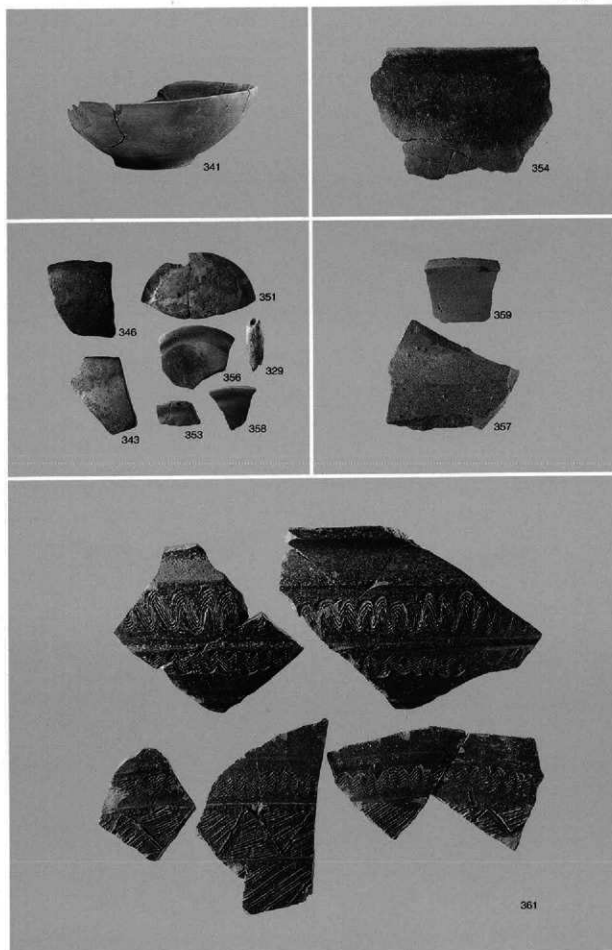


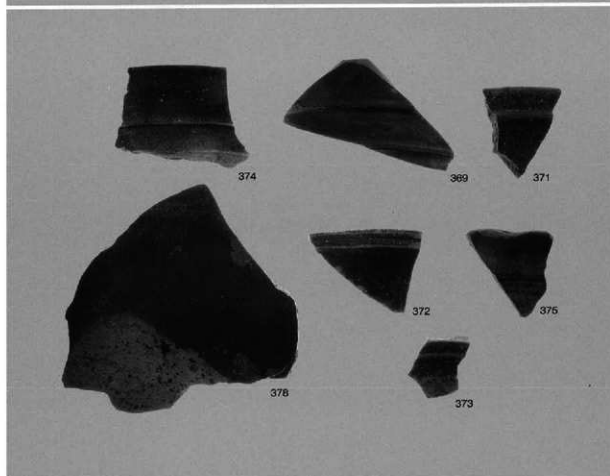
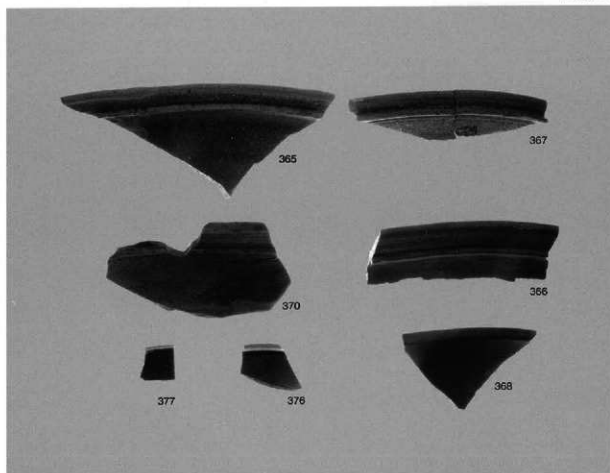


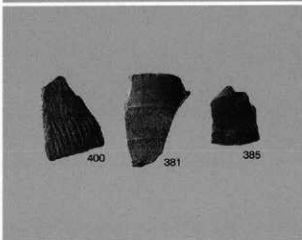
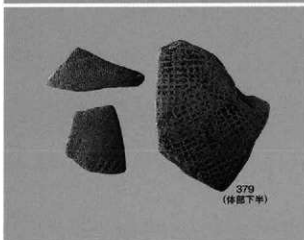
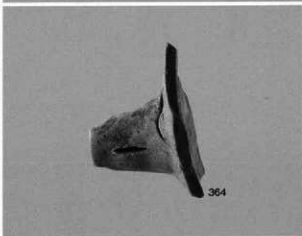
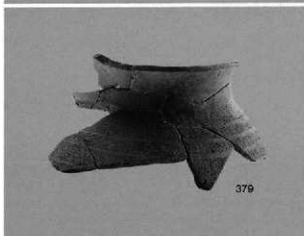
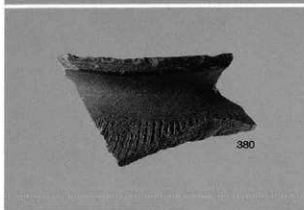
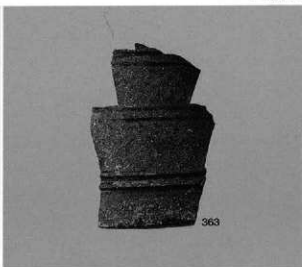
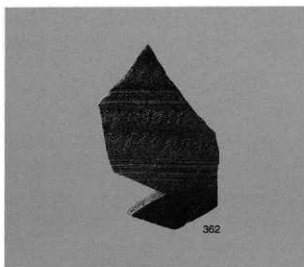


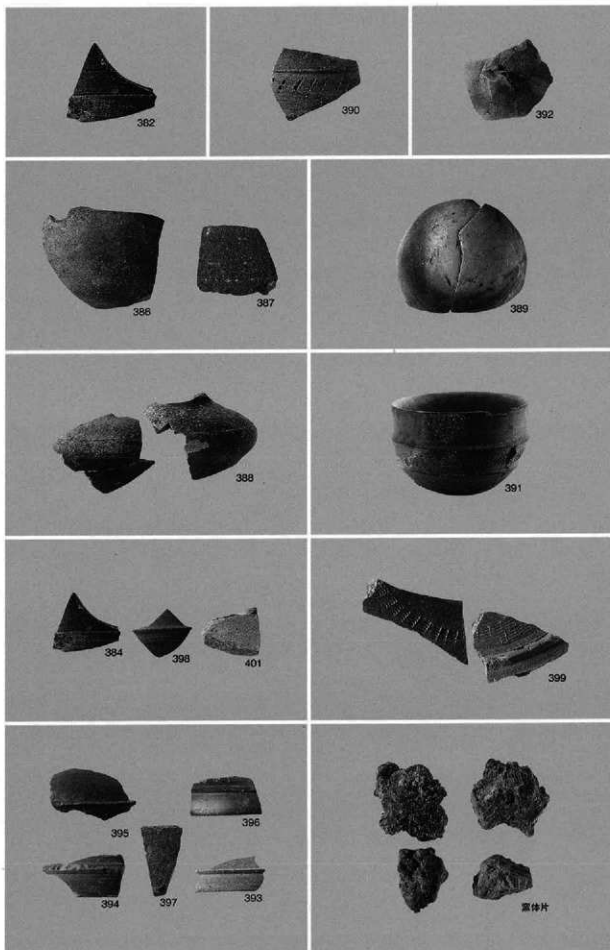












報告書抄録

ふりがな	くすみいせき						
書 名	楠見遺跡						
副書名	都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書						
編著者名	黒石哲夫、佐々木宏治						
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター						
所在地	〒640-8246 和歌山県和歌山市湊571-1 TEL 073-433-3843						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
くすみいせき 楠見遺跡	わかやまし 和歌山市 おきたに 大谷	3020150 70	34° 15' 35"	135° 10' 31"	1次調査 1998年11月11日～ 1999年3月6日 2次調査 1999年11月5日～ 2000年3月10日 3次調査 2001年9月27日～ 2001年11月14日	2,180	都市計画道 路西脇山口 線改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
楠見遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉～ 室町時代	土坑、溝 土坑 井戸、水溜、掘立柱建物 土墳墓、掘立柱建物 井戸、溜井		弥生土器、 初期須恵器、土師器 土師器碗・甕・皿 瓦器碗、瓦器皿、 土師器皿、白磁、青磁、 瓦質土器、常滑焼、 備前焼		初期須恵器 および 鎌倉時代の 屋敷墓
要約	今回の調査地点で中心をなす時代は中世で、確実に居住地として利用され始めるのは平安時代末頃からである。室町時代まで継続して生活が営まれ、掘立柱建物跡、屋敷墓、井戸などを検出した。 当地周辺での中世集落の発掘調査は今回が初めてである。すぐ西側には古代～中世の港として記録が残る平井津の存在が推定されており、今回の調査結果は他地域との交流も含めた周辺の歴史を考える上で重要な資料といえる。 古墳時代は、少数の土坑や溝を検出したのみで遺構密度は低いが、一定量の初期須恵器の出土はS34年の調査との関連で注目できる。						

楠見遺跡

—都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書—

2006年3月31日

編集・発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 中和印刷紙器株式会社